

清武工業団地造成工事埋蔵文化財
発掘調査報告書

辻遺跡

昭和 55 年 4 月

清武町土地開発公社
清武町教育委員会

清武工業団地造成工事埋蔵文化財
発掘調査報告書

辻遺跡

昭和55年4月

清武町土地開発公社
清武町教育委員会

序

清武町におきましては、町内に存在する埋蔵文化財を記録保存するため、開発工事等行なわれる場合は文化財保護法第57条の2の規定により開発行為者において発掘調査を行うことになっております。

今回は清武町土地開発公社が大字木原字辻地区に計画している清武工業団地の造成区域内に埋蔵文化財包蔵地(辻遺跡)があり、これを記録保存するため清武町教育委員会に調査依頼したものであります。

本書は本町の歴史をひもとく資料として広く活用していただきとともに、数すくない文化財について充分認識していただき、文化財保護に今後一層の御理解と御協力を願うものであります。

この調査にあたりましては、県文化財保護審議会委員日高正晴氏をはじめ、県埋蔵文化財調査員北郷泰道氏、宮崎考古学会員長津宗重氏には種々御配意、御協力を賜り深甚の謝意を表します。

昭和55年4月1日

清武町土地開発公社

理事長 落合 兼俊

例　　言

1. 本書は清武工業団地造成工事に伴ない、清武町土地開発公社の依頼を受けて、清武町教育委員会が実施した辻遺跡の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は昭和54年12月10日から昭和55年1月5日まで実施した。
3. 調査関係者は次の通りである。

調　　査　主　体

清武町教育委員会

教　育　長	黒　木　盛　幸
教　育　次　長	落　合　兼　敏
社会教育課長 (文化財担当)	岩　切　哲
調　　査　員	日　高　正　晴(県文化財保護審議会委員) 北　郷　泰　道(県埋蔵文化財調査員) 長　津　宗　重(宮崎考古学会員)

事　業　主　体

清武町土地開発公社

理　事　長　落　合　兼　俊

4. 本報告書の作成には調査員があたり、執筆および挿図作成は第Ⅳ章を長津、他を北郷が担当し、監修を日高が行った。
5. 本報告書に用いたレベル数値は、海拔絶対高である。
6. 土層図中の土色は、『標準土色帖』(監修、農林省農林水産技術会議事務局)を基とした。

本文目次

第Ⅰ章 序 説	1
1. 発掘調査に至る経過	1
2. 遺跡の位置と環境	1
3. 発掘調査の概要と経過	2
第Ⅱ章 包含層の状態	5
1. 第Ⅰ・第Ⅱ・第Ⅲ地区の状態	5
2. 第Ⅳ・第Ⅴ地区の状態	7
第Ⅲ章 縄文時代の遺構と遺物	9
1. 集石遺構・ピット	9
2. 遺物の出土状態	10
3. 遺物	12
(1) 土器	12
(2) 石器	35
第Ⅳ章 辻遺跡出土の土師器と須恵器について	42
1. 土師器と須恵器の出土状態	42
2. 土師器	48
3. 須恵器	51
4. 小結	58
第Ⅴ章 ま と め	57
(1) 縄文前期土器の出土頻度について	57
(2) 層位について	57
(3) 縄文前期土器について	58
(4) 集石遺構について	59
(5) 石器について	60

挿 図 目 次

第 1 図	遺跡所在地図	1
第 2 図	第 I・第 II・第 III 地区地形図および発掘位置図	3
第 3 図	第 IV・第 V 地区地形図および発掘位置図	4
第 4 図	第 I 地区 C-3~5・北壁土層断面実測図	5
第 5 図	第 II 地区 C-1~9・南壁土層断面実測図	6
第 6 図	第 III 地区 1~3・西壁土層断面実測図	7
第 7 図	第 IV 地区 D-7・東壁・南壁土層断面実測図	7
第 8 図	第 V 地区 A-1・南壁土層断面実測図	8
第 9 図	第 II 地区 C-8・集石造構および周辺遺物出土状態実測図	9
第 10 図	第 II 地区 A-5・ピット実測図	10
第 11 図	第 I 地区 E-6・押型文土器出土状態実測図	10
第 12 図	第 II 地区 C-3・Ⅲ類土器出土状態実測図	11
第 13 図	第 IV 地区 C, D-3, 4・土層断面実測図	11
第 14 図	第 IV 地区 C, D-3, 4・集石造構および造物出土状態実測図	13~14
第 15 図	第 I・第 II 地区出土 Ia 類土器実測図・拓影	18
第 16 図	第 IV 地区出土 Ia 類(塞ノ神 A 式)土器実測図・拓影	19
第 17 図	第 IV・第 V 地区出土 Ia 類・Ib 類土器実測図・拓影	20
第 18 図	第 I・第 II・第 IV 地区出土 II 類土器実測図・拓影	22
第 19 図	第 I・第 II 地区出土 III 類土器実測図・拓影	23
第 20 図	第 I 地区出土 IV 類土器実測図・拓影	27
第 21 図	第 II・第 IV 地区出土 V 類・VI 類土器実測図・拓影	28
第 22 図	V 類土器実測図・拓影	29
第 23 図	第 I・第 IV 地区出土 VI 類(押型文)土器実測図・拓影	31
第 24 図	その他の出土土器実測図・拓影	33
第 25 図	石器実測図 (1) 石鏃	37
第 26 図	石器実測図 (2) 石斧・凹石・磨石	39
第 27 図	石器実測図 (3) 敗石・尖頭器・石錐など	41
第 28 図	第 I 地区 C-7 Ⅳ 層の土器の出土状態	42
第 29 図	第 II 地区 C-7・北壁(上)・西壁(下)土層断面実測図	42
第 30 図	第 I・II 地区出土土師器実測図	49
第 31 図	鐵布庄痕土器実測図・拓影	50
第 32 図	第 II 地区出土土錐実測図	50
第 33 図	第 III・IV 地区出土土師器実測図	51
第 34 図	須恵器実測図・拓影	52

表 目 次

第 1 表 I類土器一覧表	16~17
第 2 表 II類土器一覧表	22
第 3 表 III類土器一覧表	28
第 4 表 IV類土器一覧表	25~26
第 5 表 V類土器一覧表	29
第 6 表 VI類土器一覧表	30
第 7 表 石鐵一覧表	36
第 8 表 第I・II地区出土土師器(坏)の法量	44
第 9 表 第I・II地区出土土師器(坏)の計測表	45
第10表 第I・II地区出土土師器一覧表	47~48
第11表 法量対照表	54
第12表 法量対照表	54
第13表 タイプ別からみた各地区的出土パーセント	57
第14表 地区別からみた各タイプの出土パーセント	57

図版目次

- 図版 1 (1) 第Ⅰ・第Ⅱ地区遠景
(2) 第Ⅰ地区発掘風景
- 図版 2 (1) 第Ⅱ地区発掘風景
(2) 第Ⅳ地区発掘風景
- 図版 3 (1) 第Ⅳ地区・アカホヤ層の状態
(2) 第Ⅳ地区 C, D-8, 4・塞ノ神A式と集石遺構
- 図版 4 (1) 第Ⅳ地区・集石遺構
(2) 第Ⅱ地区・集石遺構
- 図版 5 (1) 第Ⅱ地区・Ⅲ類土器出土状態
(2) 第Ⅳ地区・Ⅰ類土器出土状態
- 図版 6 Ⅰ類土器 (1)
- 図版 7 Ⅰ類土器 (2)
- 図版 8 Ⅰ類土器 (3)
- 図版 9 Ⅱ・Ⅳ類土器
- 図版 10 Ⅲ・Ⅴ類土器
- 図版 11 Ⅵ類土器
- 図版 12 Ⅶ類土器
- 図版 13 その他の土器
- 図版 14 石器 (1)
- 図版 15 石器 (2)・第Ⅳ地区押型文土器出土状態
- 図版 16 土師器(1)
- 図版 17 土師器(2)
- 図版 18 織布庄痕土器・須恵器・土鍬

第一章 序 説

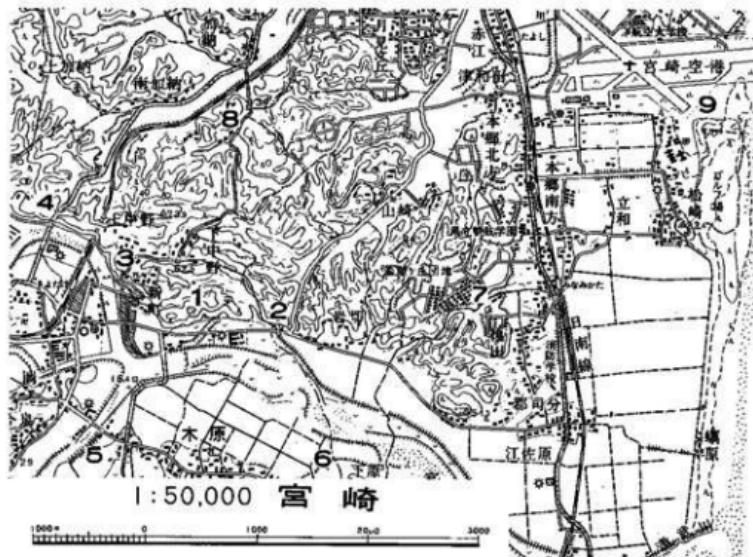
1 発掘調査に至る経過

辻遺跡は、昭和54年九州縦貫自動車道埋蔵文化財分布調査において遺物の散布が確認され、「下中野遺跡」として周知された遺物包含地であった。その後、昭和54年11月清武工業団地造成事業として、辻遺跡を含めた大字木原の丘陵地を造成する計画が立ちあがり、宮崎県商工振興課、同文化課、清武町開発課、同社会教育課の間で同遺跡の取り扱いについて協議を重ねた結果、昭和54年12月10日～昭和55年1月5日まで、発掘調査を行い記録保存の措置をとることになった。

2 遺跡の位置と環境

辻遺跡は、宮崎郡清武町大字木原字辻（730番外）にあり、水無川が清武川と合流する地点の北側の洪積台地上に位置する。

清武町に所在する遺跡について、発掘調査等についてその内容が明らかにされた例は意外と少なく、この方面についての調査・研究は全く停頓していたといえる。しかし、最近昭和51年に九州縦貫自動



第1図 遺跡所在地図

- (1. 辻遺跡 2. 若宮田遺跡 3. 上中野遺跡 4. 清武城跡（城内遺跡） 5. 永田遺跡
6. 木花古墳群 7. 松ヶ迫窓跡 8. 清武古墳群 9. 飛行場遺跡)

車道建設に伴ない城内遺跡（清武城跡）が発掘調査され、又昭和54年辻遺跡の発掘調査に先立ち若宮田遺跡が発掘調査されるなど、次第にこの地域の遺跡についてその内容が明らかにされ始めている。

城内遺跡は中世の山城である清武城の所在地にも比定されていて、発掘調査によっても二ノ丸跡に当たると考えられる遺構が検出され、又縄文土器の出土もみている。一方、若宮田遺跡からは縄文前期土器と土師質の糸切り底をもつ土器が混在して出土していて、層位的に縄文前期層を検出することは出来なかったが、ことにバラエティーに富んだ縄文前期土器が清武川の北岸の台地上から出土した意義は大きくその一連の台地を見直す機会ともなり、その成果を踏まえて辻遺跡の発掘調査も実施し得たといえよう。

3 発掘調査の概要と経過

辻遺跡の位置する台地は、海拔絶対高60m以上の高まりをもつ三つの丘陵地からなる。今回の発掘の対象区は、その内の東の二つの丘陵地であり、その中でも東の丘陵地を畠地の段差に応じ8地区に分け、西の丘陵地を2地区に分けた。東丘陵地の8地区は、最も低位な東の畠地を第I地区、その一段上の畠地を第II地区、最も高位な西の畠地を第III地区と名付けた。一方、西丘陵地の2地区は、比較的低位な西の畠地を第IV地区、東の一段高まりをもつ畠地を第V地区と名付けた。

第I地区には $3 \times 8 m$ のグリッドを設定し、南から北へA～E、西から東へ1～11としてグリッド番号を定めた。第II地区も同様に $3 \times 8 m$ のグリッドを設定し、南から北へA～D、西から東へ1～9とした。第III地区には $2 \times 1.5 m$ のトレンチを設定し、それを1～8に区切った。第IV地区は第I・II地区と同様に $3 \times 8 m$ のグリッドを設定し、南から北へA～G、西から東へ1～13とした。第V地区には $3 \times 8 m$ のグリッドを3箇所設定した。

以下、週を追って発掘調査の概要と経過を記す。

<第 1 週>

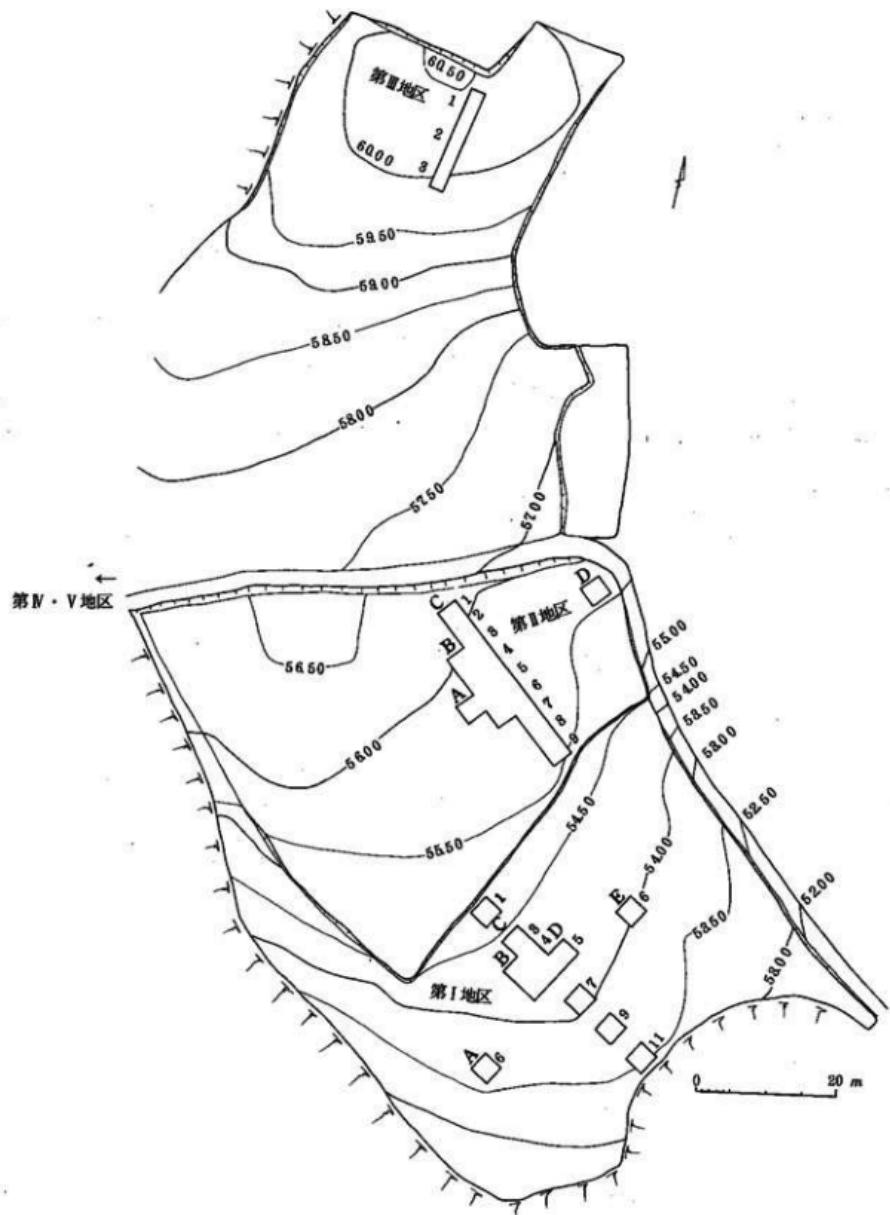
第I地区から発掘調査を開始する。C-1, 3, 5, 7, 9, 11を発掘し、特にC-5から縄文前期土器の比較的良好な出土をみる。又、C-9からは須恵器・土師器等の出土をみる。C-5の縄文前期土器の出土の広がりを確認するためC-4を発掘、又平行して第II地区C-1, 3, 5, 7, 9を発掘する。第II地区においてもアカホヤ上の自然層は削平され、アカホヤ下から縄文前期土器の出土をみる。

<第 2 週>

前週に引き続き第I地区B-4, 5, D-5等を前期層の広がりをつかむため拡張発掘。Ⅲ層褐色土層から塞ノ神式、Ⅳ層暗褐色土層から前平・吉田式が出土し、層序関係の一つの指標となる。第II地区では比較的土器出土の多いC-3, 5を中心としてA-5, B-4, 6, 6を発掘し、又全体の地形上の傾斜と土層の状態を明らかにするためC列を通して発掘する。一方、第III地区、第IV地区D-1, 3, 5, 7, 8, 10, 13を発掘する。第III地区では遺物の出土がⅢ層上面に限られ、以下は無遺物層となつたが、第IV地区では第I・第II地区と同様、縄文前期層をとらえることが出来た。

<第 3 週>

第I地区A-6, E-6、第II地区D-4を全体地形把握のために発掘。第II地区D-4からは出土

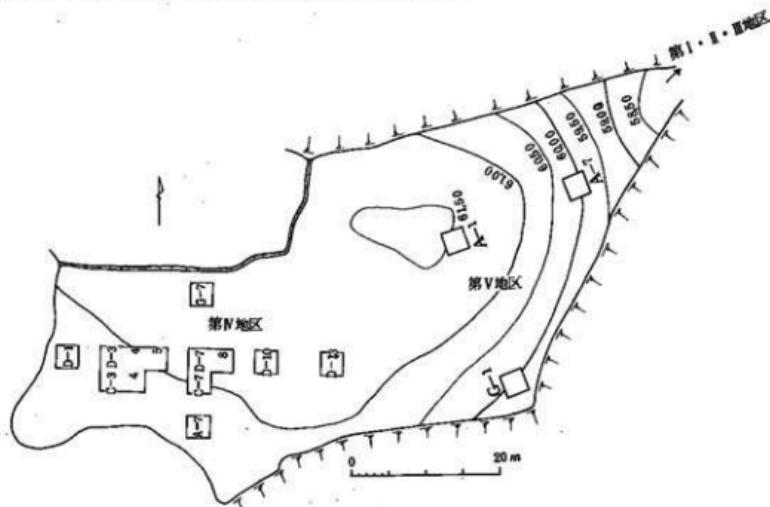


第2図 墓遺跡第I・II・III地区地形図および発掘区位置図

遺物が認められなかったが、E-6 からは押型文土器片等の出土を確認する。又、第Ⅳ地区 D-4において良好な出土状態で遺物がみられたため、C-3, 4 を拡張発掘する一方 A-7, C-7, G-7 を発掘。C-3, 4 D-4、振り下げる結果、塞ノ神A式系土器の1/3個体分の胴部片と底部片を押し潰された状態で検出、又砾石の集石様の集合の片鱗をとらえることが出来た。そのため、集石様の砾石の集合全体をとらえるため D-3 を発掘。以後、C, D-3, 4 として平面的に振り下げる全体の散布状態を検出することに努めた。一方、第Ⅴ地区に8箇所グリッドを設定し発掘。当初、第Ⅳ地区より高位にあることからアカホヤ上の自然層の残存状態に期待を持たれたが、結果は他地区と同様にアカホヤ上の自然層を欠き最も高位の部分に設定したA-1 では表土下1mほどで砾層にたつした。

<第4週>

第Ⅰ地区 C-7 で土師器・須恵器と共に住居跡と思われる片鱗を確認。又、第Ⅱ地区 C-9 よりも土師器等の完形品出土。この週は各地区を無遺物層まで振り下げることに努めた。その結果、第Ⅰ・Ⅱ地区ではⅦ層（暗褐色上層）下のⅥ層（硬質褐色土層）から無遺物層となり、第Ⅳ地区ではⅤ層（灰褐色土層）から無遺物層となった。平板測量ほか土層断面実測図、遺物出土状態実測図など測量・実測作業を行い、出土遺物のレベルをとり、遺物の取り上げ等を行う。



第8図 汗遺跡第Ⅳ・第Ⅴ地区地形図および発掘区位置図

第Ⅱ章 包含層の状態

各区とも、耕地のため著しく削平され、表土（耕土）下からはすぐアカホヤが露出し、アカホヤ上の自然層はすでに失われていた。発掘調査区内でアカホヤ上の自然層が残存していると考えられたのは、わずかに第Ⅰ・第Ⅱ地区の東端に限られる。

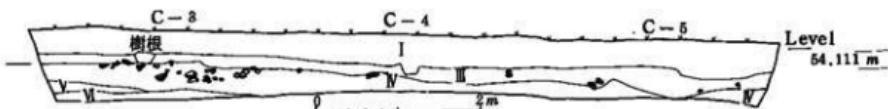
第Ⅰ・第Ⅱ・第Ⅲ地区の位置する東丘陵地と第Ⅳ・第Ⅴ地区の位置する西丘陵地とでは、同一台地上ながらアカホヤ下の土層の様相に若干の差違が認められる。各区の包含層の状態の中でそのことに触れるが、本遺跡の土層図の作成は、一応各区を一定程度掘り下げた1月25日の段階で各区の土層を比較観察・検討し、次のように各区の土層の共通項から基準を定め、それを基に統一的に土層図を作成し、時間的制約による掘り下げの不足を出来る限りおぎなうように努めた。

	第Ⅰ・第Ⅱ・第Ⅲ地区	第Ⅳ・第Ⅴ地区
I 層	表 上 (耕 土)	
II 層	ア カ ホ ャ	
III 層	褐 色 土 層	黑 色 土 层
IV 層	暗 褐 色 土 層	
V 層	黑 褐 色 土 層	灰 褐 色 土 层
VI 層	硬 质 褐 色 土 层	褐 灰 色 土 层
VII 层	粘 质 黄 褐 色 土 层	褐 色 土 层
VIII 层		砾 层 (粘 质 褐 色 土 混じり)
IX 层	砾 层	

1 第Ⅰ・第Ⅱ・第Ⅲ地区の状態

<第Ⅰ地区>

第Ⅰ地区ではⅡ層アカホヤまでが削平され、わずかに同地区的南端(A-6), 北端(E-6), 東端(C-11)においてその片鱗を確認し得たにとどまる。しかし、かなり同地区は東に向って傾斜しており、その部分においては土師器・須恵器を伴なうアカホヤ上の自然層を残存させていた。



I 表土(耕土)(75 YR 8/3)

II 褐色土層(75 YR 4/6)

III 暗褐色土層(75 YR 8/4)

IV 黒褐色土層(硬質)

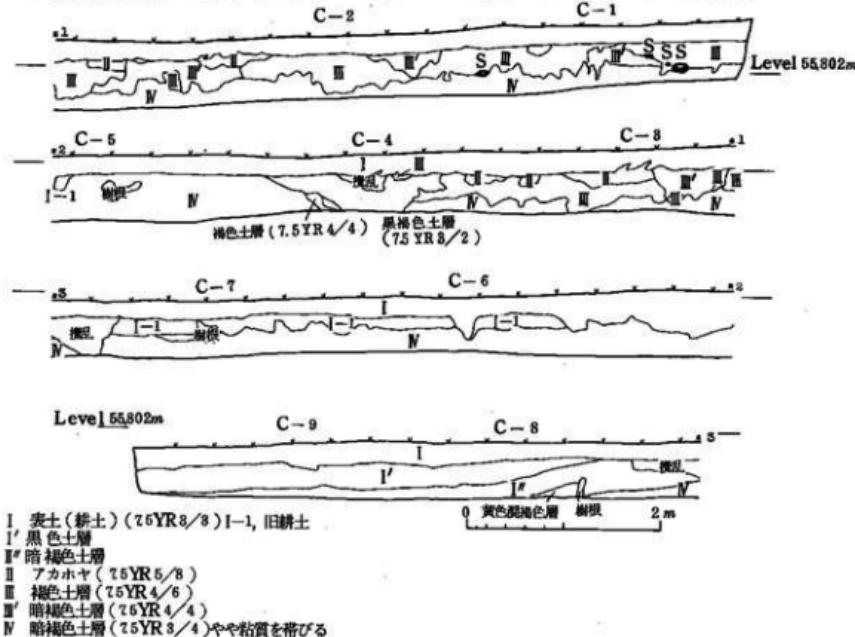
V 褐色土層

第4図 第Ⅰ地区 C-3~5・北壁土層断面実測図

縄文前期土器を比較的良好に検出することの出来たC-8～5グリットにおいては、Ⅲ層アカホヤはカットされⅢ層褐色土層、Ⅳ層暗褐色土層に縄文前期土器を包含している。Ⅲ層においては塞ノ神A式、Ⅴ層においては前平・吉田式がその主な出土土器である。地層は西から東に傾斜しており、9mで50cm程傾斜している。又、Ⅲ層とⅣ層の境からⅣ層中層にかけて礫の集石様の集まりを断面において確認出来たが、やや全体に地層にそって流れしており、平面上で集石造構となるものは検出しえなかった。V・VI層は掘り下げる結果、無遺物層と確認された。

<第Ⅱ地区>

第Ⅱ地区では、ブロック状にアカホヤを確認し得たが、完全な層としては検出されていない。I層以上（耕土）があり、同地区の西側（C-1, 2）からC-8あたりまでⅡ層アカホヤをその下に追うことが出来た。C-6, 7で旧耕土と思われる腐蝕土（I-1層）が確認され、C-8, 9でクロボクに似た黒色の腐蝕土（I'層）がみられ、又その下に土師器を包含する暗褐色土層（I''層）が認められた。前期縄文土器出土は第Ⅰ地区と同じくⅢ層褐色土層から認められ、Ⅳ層暗褐色土層との漸移層的な暗褐色土層（Ⅲ層）が部分部分に出てきている。Ⅴ層からは貝殻文系土器（Ⅲ類土器）およびヘラ括きによって絞文を施文する土器（Ⅱ類土器）などが出土している。第Ⅱ地区でも第Ⅰ地区と同様東端において

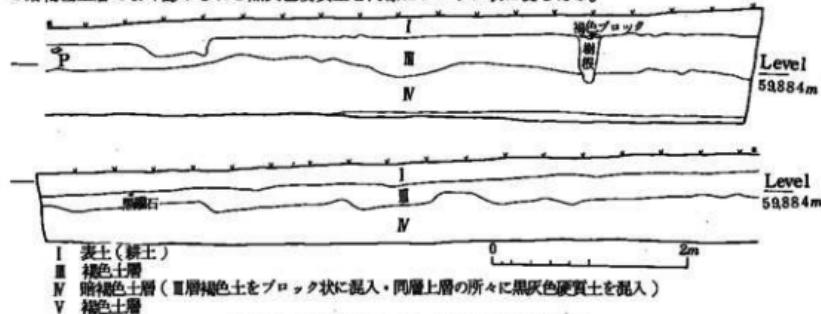


第5図 第Ⅱ地区C-1～9・南壁土層断面図

て土師器等の出土をみていることは、この地の旧地形の復元に有効であるが、第Ⅲ地区ではⅢ・Ⅳ層の層の乱れが著しく、C-8, 9の掘り下げを土師器出土の面でとどめたことからトータルな地層の把握に若干問題を残した。

<第Ⅲ地区>

第Ⅲ地区は東台地では最も高位置にあることから、アカホヤの自然層の残存に最も期待が持たれたが、第Ⅰ・Ⅱ地区と同様すでに削平されていた。Ⅰ層表土（耕土）、出土土器片、石錐頭はⅢ層褐色土層上面にのみ限られ、Ⅳ・Ⅴ層は無遺物層であった。Ⅵ層は褐色土をブロック状に混じえる他、アカホヤ下の暗褐色土層でよく認められる黒灰色硬質土を同様にブロック状に混じえる。

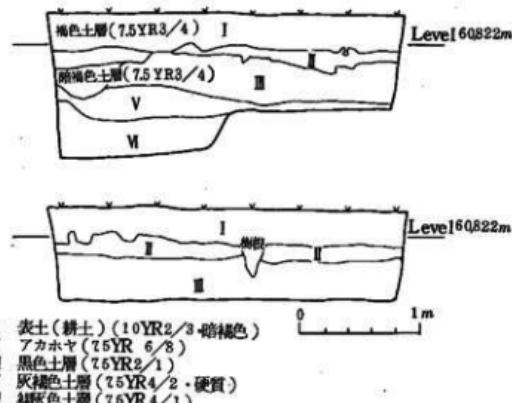


第6図 第Ⅲ地区1～8・西壁土層断面実測図

2 第Ⅳ・Ⅴ地区の状態

<第Ⅳ地区>

第Ⅳ地区もアカホヤ上の自然層は失われていたが、アカホヤは第Ⅰ・第Ⅲ地区に比し明瞭な層として把握出来る。しかし、アカホヤ下の層に第Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ地区と対照的な相異が認められる。Ⅲ層は漆黒に近い黑色土層で、前期繩文土器の出土はこの層に限られる。このⅢ層は第Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ地区におけるⅢ層褐色土層、Ⅳ層暗褐色土層に対応するものと考えられた。第Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ地区ではⅢ層とⅣ層に出土土器の相異が認められたが、第Ⅳ地区Ⅲ層には窯ノ神A・B式、前平・吉田式等が混在した状態で出土している。又、Ⅴ層から無遺物層となり、Ⅲ層中層あたりで集



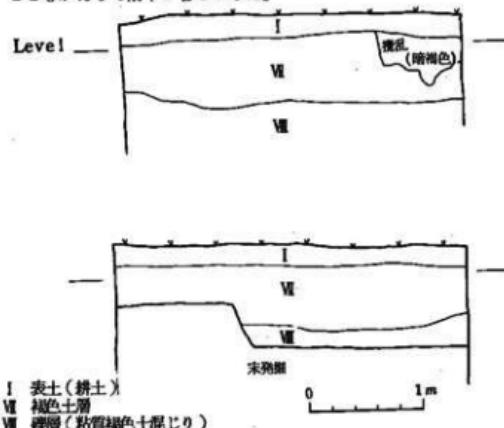
第7図 第Ⅳ地区D-7・東壁D-7・南壁D-7 土層断面実測図

石遺構が検出されていることなどが、その理由である。

V層灰褐色土層は、第I・II・III地区での黒褐色土層に、VI層褐色土層は、同区での褐色土層にそれぞれ対応させることができることになる。

<第V地区>

第V地区は、西丘陵地で最も高位置にあり、東丘陵地での第III地区と同様層の残存に期待が持たれたが、ここもかえって削平が著しかった。



第8図 第V地区A-1・南壁土層断面実測図

第V地区でのVI層までが削平されており、VI層褐色土層・粘質をもち乾燥するとブロック状にはがれる粘土質層、VI層砾層・粘質褐色土を混じえる、までを確認した。土器出土はI層下面に限られ、いずれも細片で削平時にはさみ込まれたものと考えられる。VI層からボーリング調査の石器を検出していることは特記すべきであろう。

以上、各地区的包含層および土層について述べたが、問題となるのはやはり第I・II・III地区でのIII・IV層、第IV・V地区でのIV層の対応の仕方であろう。先にも述べたように第IV・V地区IV層黒色土層に土層色上からも、また集石遺構への層位の位置関係からも、周辺に出土する土器類に層序関係を決定的になると見えることは困難であった。この問題について、縄文前期土器を出土した遺跡の土層を比較検討する中で「まとめ」で再度触れたい。

なお、第I・II・III地区と第IV・V地区の土層の対応・対照は、遺跡の所在する台地の一部削除した崖面を参考として行った。

第Ⅲ章 繩文時代の遺構と遺物

1 集石遺構・ピット（第9図・第10図・第14図）

第Ⅱ・第Ⅵ地区において、拳大から人頭大の円礫あるいは角礫のまとまりのある集合を検出した。こうした礫の集合は第Ⅰ地区的土層断面（第4図）においてもその片鱗を認めることができる。礫のまとまりの在り方、あるいは周辺の遺物の出土状態からして、人為的な集石遺構として把握出来よう。

<第Ⅱ地区>（第9図、図版4-2）

この集石遺構は比較的大きな長軸40cm大の石から拳大以下の小さな礫の集合からなる。周辺からはヘラ描き縞衫文を施す土器片あるいは条痕文土器片が検出されているほかやや離れてはいるが同様の礫の散布中から片面あるいは両面の凹石（第26図5・6）も検出されている。集石は60×110cmの不整形な広がりをもつが、集石下の掘り込みは明確ではない。又、礫は明赤褐色～灰褐色の色調を呈する安山岩質のものである。

<第Ⅳ地区>（第14図、図版4-1）

第Ⅳ地区C、D-3、4からは比較的良好な状態で塞ノ神A式（Ia類土器）をはじめとする前期縄文土器の出土をみ、又その中に多くの礫の散布と集石遺構を検出した。集石に近い礫の間からは長二等辺三角形の凹基式の石鏟（第29図30）が出土地している。この集石遺構は第Ⅱ地区的ものに比して比較的均一な拳大の礫の集合からなっているが、第Ⅱ地区と同じく集石下の掘り込みは明確ではない。集石は90×120cmのほぼ円形状をなしている。



第19図9

第18図2



第18図8



第9図 第Ⅱ地区C-3・集石遺構および周辺遺物出土状態実測図

遺構としては他にピット状遺構を検出している。検出地は第Ⅱ地区集石遺構の南約10mの地点である。ピットの存在はⅣ層の上層を掘り下げた段階で確認された。口径の長軸6.7cm、短軸6.5cm、底径は3.4×2.5cmの精円形である。ピット内部の上層の地点から石鏟(第26図7)他土器細片を検出している。ここではピットとして扱ったが、石鏟等出土遺物がその上部に限られたこと、あるいは周辺の遺物出土状態との関連を若干欠くこと、又その形状の不整形もあわせて、どのような用途のものであるのか、どの時期のものであるのか、又ピットとして断定し得るのか、不明な点は多い。

2 遺物の出土状態

5つの地区に分けた発掘区は、現在の畠地の段差に応じ便宜的に設定したものにすぎないが、それぞれ

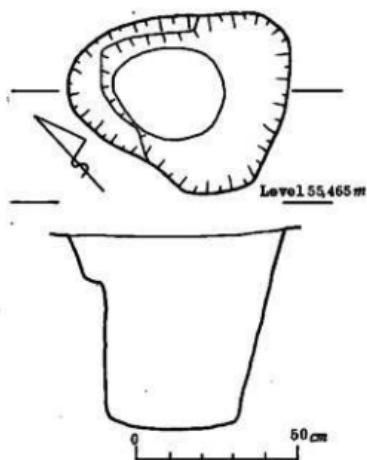
● 黒
磨
石

◎ 第28図8

● 第28図26

● 黑
磨
石

第11図 第Ⅰ地区E-6・押型文土器出土状態実測図



第10図 第Ⅱ地区A-5・ピット実測図

の地区からの土器の出土状態・頻度には大きな差異が見られる。まず、押型文土器(Ⅳ類)の出土はほとんどが第Ⅰ地区に集中している。第Ⅰ地区以外からは、わずかに第Ⅱ地区において山形押型文が1点検出されているにすぎない。しかし、第Ⅰ地区における出土状態もまとまりのあるものではなく(第11図)、散漫な状態である。次に前平(Ⅴ類)・吉田(Ⅳ類)式系土器については、第Ⅰ地区にやや集中化した出土が見られたもの、

第Ⅱ・第Ⅳ地区の出土状態は散漫であった。ヘラ描き菱形文(Ⅱ類)、貝殻旗縁刺突連続山形文(Ⅲ類)土器は主には第Ⅱ地区に次いで第Ⅰ地区に集中化して検出され、塞ノ神式(Ⅰ類)系土器は第Ⅰ・第Ⅳ地区に集中化して検出されている。

<第Ⅰ地区>

第Ⅰ地区からはほとんど各タイプの土器が出土しているが、この地区において塞ノ神A式(Ⅰa類)系土器がⅢ層(褐色土層)から前平(Ⅴ類)・吉田(Ⅵ類)式系土器がⅣ層(暗褐色土層)から出土しており、それぞれの先後関係を一定程度押さえることが出来た。

<第Ⅱ地区>

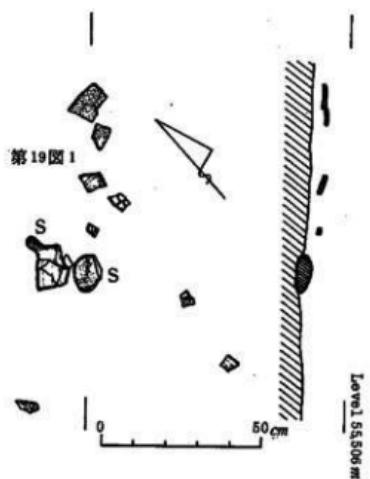
第Ⅱ地区からは塞ノ神式(Ⅰ類)系土器はほんの数点検出されたのみで、前平(Ⅴ類)・吉田(Ⅵ類)式系土器のタイプとⅡ類・Ⅲ類のヘラ描き菱形文・貝殻旗縁刺突連続山形文の両タイプとでは、相対的には後者に比較的良好な出土状態をみることが出来た(第12図)。又、石錐の出土の大半がこの地区に集中していることは注目される。

<第Ⅲ地区>

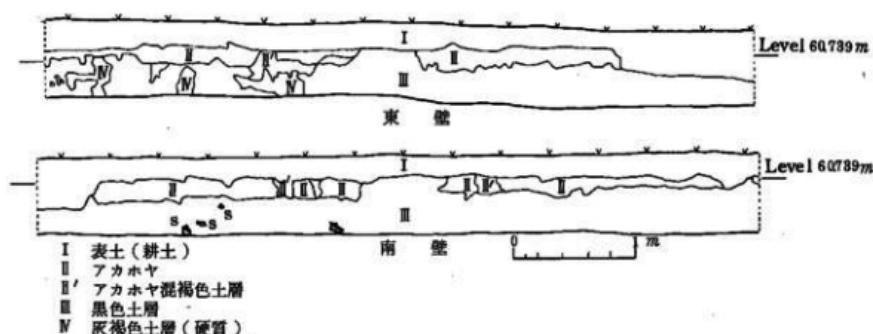
発掘面積が第Ⅳ地区と共に相対的に狭小であるため第Ⅰ・第Ⅱ・第Ⅳ地区との同列の比較は出来ないが、遺物の出土はⅢ層上層に限られる。

<第Ⅳ地区>

第Ⅳ地区C, D-3, 4からは集石造構と、良好な出土状態での塞ノ神式(Ⅰ類)系土器の資料を得ている(第14図)。しかし、出土層が第1



第12図 第Ⅳ地区C-3・Ⅲ類土器出土状態実測図



第13図 第Ⅳ地区C, D-3, 4土層断面実測図

・第Ⅱ地区的Ⅲ層（褐色土層）とⅣ層（暗褐色土層）とは全く色調の異なる黒色土層中より前平・吉田式系土器も出土しているため、この地区においては両者の先後関係はさほど明確ではない。

Ⅰ層は表土、Ⅱ層がアカホヤ層で、第Ⅰ・第Ⅱ地区に比し、比較的厚い層（約20cm前後）で入ってきており、アカホヤ層の状態は同地区が最も良好である。アカホヤ層は所々で途切れⅢ層（アカホヤ混褐色土層）がブロック状に入ってくる。Ⅲ層の黒色土層が織文前期の包含層で、所々に下位の層であるⅣ層（灰褐色土層）がブロック状で浮き上がってきている（第13図）。このⅢ層（黒色土層）は第Ⅰ・第Ⅱ地区的Ⅲ層（褐色土層）・Ⅳ層（暗褐色土層）に対照させることができる。第Ⅰ・第Ⅱ地区において疊の集石がⅢ層下面からみられⅣ層上層に至ることに対応して、第Ⅳ地区においての集石遺構あるいは疊の散布はⅢ層黒色土層の中層に見られる。のことから、集石を境としⅢ層上層が第Ⅰ・第Ⅱ地区的Ⅲ層（褐色土層）に、Ⅲ層下層がⅣ層（暗褐色土層）に対照されよう。

しかし、出土遺物をⅢ層上層と同下層において鑑別することはほとんど出来ず、遺物の出土はⅢ層中層に集中していた。この内、Ia類とした塞ノ神A式の底部を含むほぼ $\frac{1}{3}$ 個体分（第16図）が、いわば押し潰された状態で出土している（第14図）。この土器の原位置は、破壊施業されたものではなく、底部が正位置の状態で検出されたことからも、正位置で置かれた土器がその後自然的な原因で押し潰された状態になったものと考えられる。又、他の前平・吉田式・押型文系等の土器は集石遺構を中心とした広範囲な疊の散布の中に散漫に出土している。

＜第Ⅳ地区＞

発掘面積が第Ⅲ地区と同様狭小であり、遺物の出土状態も細片の散布程度にとどまる。

3 遺 物

(1) 土 器

I類としたものは、從来「塞ノ神式」とよばれているもので、第Ⅰ・第Ⅳ地区に集中した出土が見られた。撚糸文系を「塞ノ神A式」、貝殻文系を「塞ノ神B式」とする從来の分類に従い、前者をIa類、後者をIb類として分類するが、Ib類と認め得るものはわずかに第Ⅳ地区出土の1点にすぎない。

II類としたものは、ヘラ描きによる陵杉文を縦位あるいは横位に施文するもので、県下においてあまり知られていないタイプである。第Ⅰ・第Ⅱ・第Ⅳ地区から少量ながら比較的大きな破片で出土している。

III類としたものは、貝殻腹縁を鋸歯状あるいは山形状に施文するものを基本的タイプとし、あるものは平行に施文するものも含むタイプである。ここでは便宜的に貝殻腹縁刺突連続山形文と呼ぶことにする。鹿児島県下からも数例出土しているが、まだ標準遺跡の発見がなく型式化されていない。

IV類としたものは、從来「吉田式」とよばれているもので、貝殻腹縁刺突文とクサビ形貼付け文を施文するというその特徴を具備したものである。第Ⅰ・第Ⅱ・第Ⅳ地区から出土しているが多くは第Ⅰ地区に集中してみられた。

V類としたものは、從来「前平式」とよばれているもので、口縁部に貝殻腹縁による連続刺突文あるいはヘラ状施文具により羽状に凹凸文を施し、器面には条痕文が施文されるものである。第Ⅰ・第Ⅱ・第Ⅳ地区から出土している多くは第Ⅱ・第Ⅳ地区にみられた。



第14図 第Ⅳ地区C, D-3, 4・集石遺構跡上に遺物出土状態実測図

V類としたものは、いわゆる押型文土器である。山形・梢円・格子目の各タイプが出土しているが、第I地区に集中して出土しており、他には第V地区からわずかに1点出土しているのみである。

他に点数は1点ないし数点ではあるが特徴ある数種の土器が出土しており、それについては一括して扱うこととした。

宮崎県内では、いまだ縄文前期土器の資料の蓄積と分類が充分なされているとはいはず、本遺跡出土のものもまたそうした現段階での枠を抜け出ることが出来ない。今後の資料の蓄積の中で新たに提起される問題も出てこようが、一応前記の大枠の分類で以下土器類を紹介しておきたい。

I類（第15～17図、図版6～8）

I類の内、Ia類とする塞ノ神A式系土器は本遺跡における主要な土器群の一つである。

口縁部の形態には、第15図1・2・5～8の「く」の字に外反するものと、第17図3～6・8・9の若干内湾する傾向のものが認められる。地区別にいえば第I地区のものが前者で、第V地区のものが後者である。又、第V地区出土の第17図37も後者のタイプにあり、出土地区的傾向の相異が存在するようである。前者のタイプでは、頸部から上を飾るものがほとんどで沈線文で、頸部から網目状捲糸文の施文が行われている。後者のタイプでは、口縁部は沈線文・刺突文等で飾られ、ほとんどのものが口唇部に刻みを施している。第17図37は区画する沈線文の中に撚糸文を施文している。

第15図3は、「く」の字に外反し山形口縁をなすもので、口唇部に刻目をもち特徴のあるものである。頸部は「く」の字形をなすものがほとんどで、沈線文あるいは刺突文が施されている。

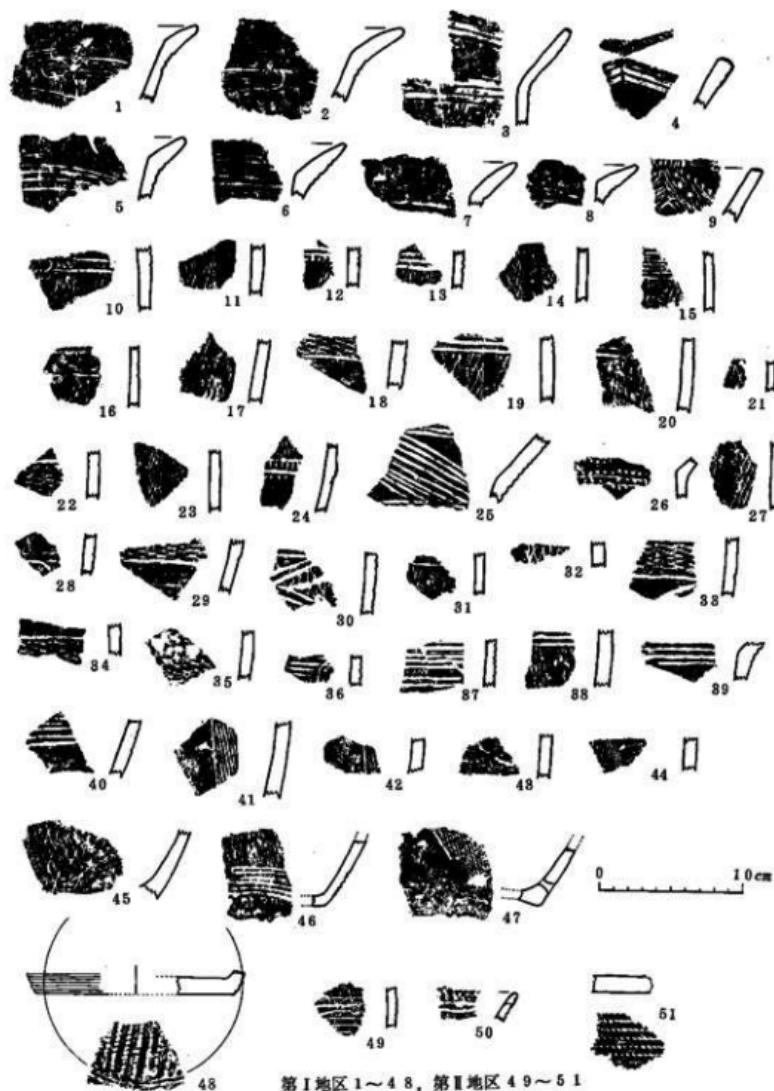
頸部はさほどふくらみを示すものなく、ほとんどが胴部の下位まで直口するものである。施文には縦位と横位の網目状捲糸文（塞ノ神A-a式）と平行捲糸文・斜縞文（塞ノ神A-b式）があり、第15図18・22・29・33～35が横位の網目状捲糸文である他縦位の網目状捲糸文で、平行捲糸文・斜縞文は第15図41～44・47、第17図16・17・26・27・34・35で数は少ない。沈線文の採用には大きくは2種類あり、無文帶と捲糸文帯とを区画的に表現するものと、捲糸文帯の上に施文されるものである。横位あるいは斜位に捲糸文が施文される場合に前者が採用され、縦位の場合にはほとんどが後者の採用によって装飾される。又、沈線文も平行に施される場合と、第15図30、第17図17のように横位あるいは斜位に捲糸文を横切る場合があり、全体の文様帶としては第16図のようにその組み合わせによって構成されよう。底部はおおむね平底ないし若干の上げ底である。第15図46・48・51、第17図38は平底、第15図47、第17図34、第16図は若干の上げ底である。第15図47には穿孔がみられる。文様は第15図46、第17図33・36の平行沈線文を胴部底辺に施文するもの、第15図47、第17図34の沈線文で区画された捲糸文を施文するものがある。本遺跡出土では前者が平底、後者が上げ底となる傾向がみられる。

第16図の土器は本遺跡出土の中で最も良好なI類の資料である。頸部での半径16.5cm、底部半径が8.2cmの大きな深鉢形土器で、現高28.5cmで底部まで含め復元するならば37cm以上の器高をもつと思われる。口縁部は明らかでないが、口縁近くまで沈線文が施文されると考えられる。胴部にはややふくらみをもつものようであるが、底部にかけてすぼまる器形である。器壁は底部付近よりむしろ胴部最大径から上の頸部、あるいは口縁部にかけてが厚く、胴部下位の底部にかけては逆に薄くなる。

第1表 I類土器一覧表

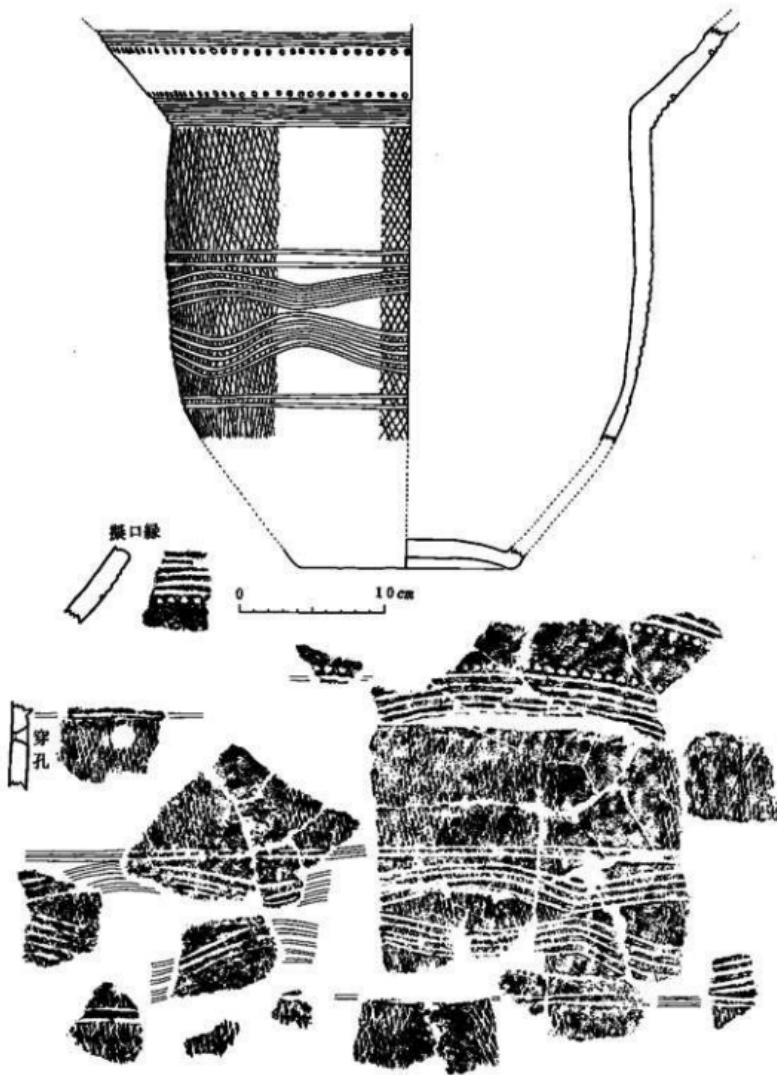
地図番号	出土地区	器部	施文・文様	形 番	胎 土	色 調	施文	備考
第1地図 1	I - D - 5	口縁部	網目状燃系文・沈線文	「く」字口縁	石英粒 錫	暗 黑褐色	不良	施定口径 1.2cm
2	I - D - 5	口縁部	沈 線 文	「く」字口縁	石英粒 錫	白 黄褐色	良好	
3	I - D - 5	口縁部	網目状燃系文・微開起	山 形 口 番	鐵錫石英粒	黃褐色～黑褐色	普通	同一個体
4	I - D - 5	口縁部	突唇文・口縁深削付		石英粒 錫	黃褐色	良	
5	I - B - 4	口縁部	網目状燃系文・沈線文	「く」字口縁	石英粒 錫	白 黄褐色	普通	
6	I - D - 5	口縁部	沈 線 文	「く」字口縁	石英粒 錫	白 黄褐色	普通	
7	I - D - 5	口縁部	沈 線 文	「く」字口縁	石英粒 錫	黑 褐褐色	良	
8	I - D - 5	口縁部	沈 線 文	「く」字口縁	石英粒 錫	白 黄褐色	良	
9	I - C - 2	口縁部	区面状燃文・網目状燃系文		鐵錫石英粒	灰 褐褐色	良好	
10	I - C - 5	網 盆	網目状燃系文・沈線文	網目やくらみをもつ	石英泥を多く混入	黑褐色～赤褐色	不良	
11	I - C - 7	網 盆	網目状燃系文		石英粒 錫	白 黄褐色	良好	
12	I - C - 8	網 盆	網目状燃系文・沈線文		石英粒 錫	暗褐色～黑褐色	小角	
13	I - A - 6	網 盆	網目状燃系文・沈線文		石英粒 錫	白 黄褐色	良好	
14	I - E - 6	網 盆	網目状燃系文	四壁は薄い方である	鐵錫石英粒	暗赤褐色～黑褐色	良	
15	I - D - 5	網 盆	網目状燃系文	器壁は薄い方である	石英粒 錫	白 黄褐色	良好	同一個体(?)
16	I - D - 5	網 盆	網目状燃系文	器壁は薄い方である	石英粒 錫	灰 褐褐色	良好	
17	I - D - 8	網 盆	網目状燃系文		鐵錫石英粒	白 黄褐色～白褐色	良好	
18	I - A - 6	網 盆	区面状燃文・網目状燃系文		石英粒 錫	赤褐色～褐色	普通	施付部を施付する
19	I - C - 6	網 盆	網目状燃系文・沈線文		石英粒 錫	暗褐色～黑褐色	普通	
20	I - B - 4	網 盆	網目状燃系文・沈線文		石英粒 錫	褐～灰褐色	普通	
21	I - C - 5	網 盆	網目状燃系文		石英粒 錫	黑 褐褐色	普通	
22	I - C - 4	網 盆	網目状燃系文・沈線文		鐵錫石英粒	灰褐色～褐色	良	施付部を施付する
23	I - E - 4	網 盆	網目状燃系文		鐵錫石英粒	黑褐色～灰褐色	良好	
24	I - C - 1	網 盆	新田式燃文・骨質前燃文		石英粒 錫	暗 褐褐色	普通	口付部と施付部を分けて、施付部を施す
25	I - C - 1	網 盆	沈 線 文		石英泥/40%歌留野陶土	白 黄～灰白色	良好	
26	I - D - 5	丸 盆	沈 線 文・網 施文	鐵錫石英粒を多く混入	黑 褐褐色	不規則	不良	
27	I - D - 5	網 盆	網目状燃系文	器壁は薄い方である	石英泥を多く混入	黑褐色～灰褐色	良	
28	I - C - 1	網 盆	網目状燃系文・沈線文		石英粒 錫	白 黄～黑褐色	普通	
29	I - C - 4	網 盆	網目状燃系文・沈線文		石英泥を多く混入	暗黑褐色～暗褐色	良	施付部を施付する
30	I - C - 4	網 盆	網目状燃系文・沈線文		石英粒 錫	赤褐色～黑色	良好	
31	I - D - 6	網 盆	網目状燃系文・沈線文		石英粒 錫	白 黄褐色	良好	
32	I - C - 4	網 盆	網目状燃系文		石英粒 錫	水褐色～墨灰色	良好	
33	I - C - 4	網 盆	網目状燃系文・沈線文		石英粒 錫	黑 褐褐色	普通	34と同一個体(?)
34	I - C - 4	網 盆	網目状燃系文・沈線文		石英粒 錫	灰 褐褐色	普通	33と同一個体(?)
35	I - C - 4	網 盆	網目状燃系文		鐵錫石英粒	赤褐色～黑色	良	風化剥離が苦しい
36	I - C - 4	網 盆	網目状燃系文		鐵錫石英粒	白 黄褐色	普通	
37	I - B - 5	網 盆	網目状燃系文・沈線文		石英粒 錫	黑褐色～石英粒混入	不良	
38	I - D - 5	網 盆	網目状燃系文・沈線文		石英粒 錫	淡 褐褐色	普通	
39	I - D - 5	丸 盆	沈 線 文		鐵錫石英粒	白 黄褐色	良	
40	I - D - 5	網 盆	沈 線 文		石英粒 錫	白 黄褐色	良好	施付部と施付部を分けて、施付部を施す(?)
41	I - A - 6	網 盆	区面状燃文・斜線文	器壁は比較的の厚い	鐵錫石英粒	淡 褐褐色	良好	同一個体
42	I - A - 6	網 盆	平行燃系文		石英粒 錫	白 黄褐色	普通	高ノ神A-b式
43	I - C - 3	網 盆	平行燃系文		石英粒 錫	淡 褐褐色	良好	八ツ付器・高ノ神A-b式
44	I - D - 6	網 盆	平行燃系文		石英粒 錫	白 黄褐色	普通	高ノ神A-b式
45	I - C - 4	網 盆	網目状燃系文		石英粒 錫	黑 褐褐色	普通	

鉢図番号	出土地区	器部	基文・文様	器形	胎土	色調	焼成	備考
46	I - C - 9	底 部	網目状捺文・沈線文		微細石英製	黄褐色	良好	
47	I - E - 4	底 部	平行捺条文・沈線文		滑面・石英粒混入	灰褐色	良好	滑面有・石英粒混入 灰褐色
48	I - B - 4	底 部	平行沈線文	(推定径 14cm)	石英粒を多く混入	黒褐色～灰褐色	良好	灰褐色の内側文
49	I - C - 7	側 面	網目状捺条文・沈線文		石英粒混入	暗赤褐色	普通	
50	I - C - 8	口縁部	沈線文・刺突文		大きめの石程混入	茶褐色	不良	
51	I - C - 8	底 部		(推定径 8.6cm)	石英粒を多く混入	白黄色	良好	底/貝皿型の平行捺文
第16回	Y-C,D-8,4	——	網目状捺文・沈線文	摩錦形土器	石英粒を多く混入	灰褐色	良好	網目状捺文・摩錦形土器
第17回	Y-C,D-8,4	口縁部	テラコッタ引き模様文		石英粒混入	白灰～灰褐色	良好	スヌ付着
2	Y - B - 1	口縁部	沈線文・刺突文		微細石英製	黒褐色～黄褐色	不良	
3	Y-C,D-8,4	口縁部	沈線文・口唇部刻目	やや内側する口縁	石英粒の混入は少なめ	灰褐色～黑褐色	良好	同一個体
4	Y-C,D-8,4	口縁部		(穿孔有り)	で精良な粘土			
5	Y - D - 1	口縁部	沈線文・口唇部刻目	やや内側する口縁	石英粒混入	暗褐色	良好	
6	Y - D - 8	口縁部	沈線文・口唇部刻目	やや内側する口縁	微細石英製	黄褐色～黑褐色	不良	
7	Y - D - 5	口縁部	沈線文・刺突文		石英粒混入	灰褐色	不良	
8	Y - A - 7	口縁部	沈線文・刺突文	やや内側する口縁	微細石英製	黄褐色	良好	
9	Y - D - 1	口縁部	沈線文・口唇部刻目	中央内側する口縁	石英粒混入	黒褐色	普通	
10	Y - D - 5	口縁部	沈線文・刺突文		石英粒混入	赤褐色	良好	
11	Y - D - 10	頸 部	沈 線 文		石英粒を多く混入	白黄色	普通	
12	Y - D - 2	頸 部	沈 線 文・刺突文		石英粒混入	淡黄褐色	良好	
13	Y - D - 1	側 面	網目状捺条文・沈線文		石英粒混入	黄褐色～墨色	不良	
14	Y - D - 1	肩 部	網目状捺条文・沈線文		石英粒混入	褐～暗褐色	普通	風化が著しい
15	Y - D - 1	肩 部	網目状捺条文・沈線文		微細石英を多く混入	褐～黑褐色	普通	
16	Y-C,D-8,4	肩 部	刺 線 文・沈線文		微細石英製	赤褐色～黑褐色	良好	口の内側に網目状捺文
17	Y - D - 8	肩 部	平行捺条文・沈線文		石英粒混入	褐～灰褐色	良好	肩ノ神A-b式
18	Y - D - 1	肩 部	網目状捺条文		石英粒混入	黑～暗褐色	良好	
19	Y - D - 1	肩 部	網目状捺条文		石英粒混入	暗褐色	普通	
20	Y-C,D-8,4	肩 部	網目状捺条文・沈線文		石英粒混入	淡褐色	良好	
21	Y-C,D-8,4	肩 部	網目状捺条文・沈線文		石英粒の混入は少ない	黑褐色～灰褐色	良好	
22	Y - D - 5	肩 部	網目状捺条文・沈線文		石英粒混入	暗褐色～暗褐色	普通	
23	Y - D - 8	肩 部	網目状捺条文		石英粒混入	黄褐色～黑褐色	普通	
24	Y - D - 5	肩 部	網目状捺条文・沈線文		石英粒混入	赤褐色	良好	
25	Y - D - 5	肩 部	網目状捺条文・沈線文		石英粒混入	黑褐色～灰褐色	不良	
26	Y-C,D-8,4	肩 部	平行捺条文		石英粒混入	赤褐色～灰褐色	普通	肩ノ一部(?) 肩ノ神A-b式
27	Y-C,D-8,4	刺突文						
28	Y-C,D-8,4	肩 部	網目状捺条文・沈線文		石英粒の混入は少ない	灰褐色～黑色	不良	
29	Y-C,D-8,4	肩 部	沈 線 文	器壁は比較的薄い	石英粒の混入は少ない	暗褐色～黑褐色	良好	同一個体
30	Y-C,D-8,4	肩 部						
31	Y - D - 1	肩 部	平行捺条文		微細石英製	淡黄褐色～黑褐色	普通	風化が著しい
32	Y - D - 10	肩 部	網目状捺条文・沈線文		石英粒混入	淡黄褐色～黑褐色	普通	
33	Y-C,D-8,4	底 部	網目状捺条文・沈線文	平底	微細石英製	灰褐色～白黄色	良好	
34	Y - D - 1	M-B部	刺 線 文・沈線文		石英粒混入	赤褐色～黄褐色	良好	同一個体 肩ノ神A-b式
35	Y - D - 1	M-B部						
36	Y - D - 1	底 部	網目状捺条文・沈線文	平底	微細石英製	赤褐色	良好	
37	Y - A - 1	口縁部	網目状捺条文・刺突文		微細石英製	灰褐色	良好	
38	Y - A - 1	肩 部	沈 線 文・刺突文		石英粒混入	白黄色	良好	
39	Y - G - 1	肩 部	網目状捺条文・沈線文	器壁は比較的薄い	微細石英製	淡黄褐色～白黄色	良好	
40	Y-C,D-8,4	肩 部	刺突文		石英粒混入	赤褐色	良	1b類(蓮ノ神B式)



第I地区 1~48，第II地区 49~51

第15图 第I·第II地区出土Ia类土器实测图·拓影



第16図 第N地区出土 Ia類(塞ノ神A式)土器実測図・拓影



第IV地区1~8·6·40, 第V地区8·7~39

第17图 第IV·第V地区出土Ia類·Ib類土器実測図・拓影

底部は上げ底である。文様は頸部から口縁部にかけて平行沈線文と竹管による刺突文を施し、頸部下の胴部には網目状撚糸文を施文している。また、胴部最大径部から平行沈線文と曲線沈線文が採用されている。上段2条・下段2条の間を4条と5条の沈線文を相対する波状に組み文様帯を構成している。口縁部に近い破片に、粘土帶のつなぎ目から剥離した「縫口縁」が観察出来、又頸部直下の胴部片に穿孔を認める。胎土には石英・長石等の砂粒を比較的多量に混入し、焼成は良好である。

貝殻文系の「塞ノ神B式」の特徴を備えた土器片は第17図40の一点である。貝殻縁による刺突文を二条器面に施しており、胎土には石英粒を混じえ、赤褐色を呈し、焼成は比較的良好である。

II 頸(第18図、図版9)

ヘラ描きによる綾杉文を施文するもので、口縁部が肥厚化する特徴をもつ。胎土には石英・長石等の砂粒を混入し、全般に焼成も良好で比較的堅牢な感じを与える土器である。

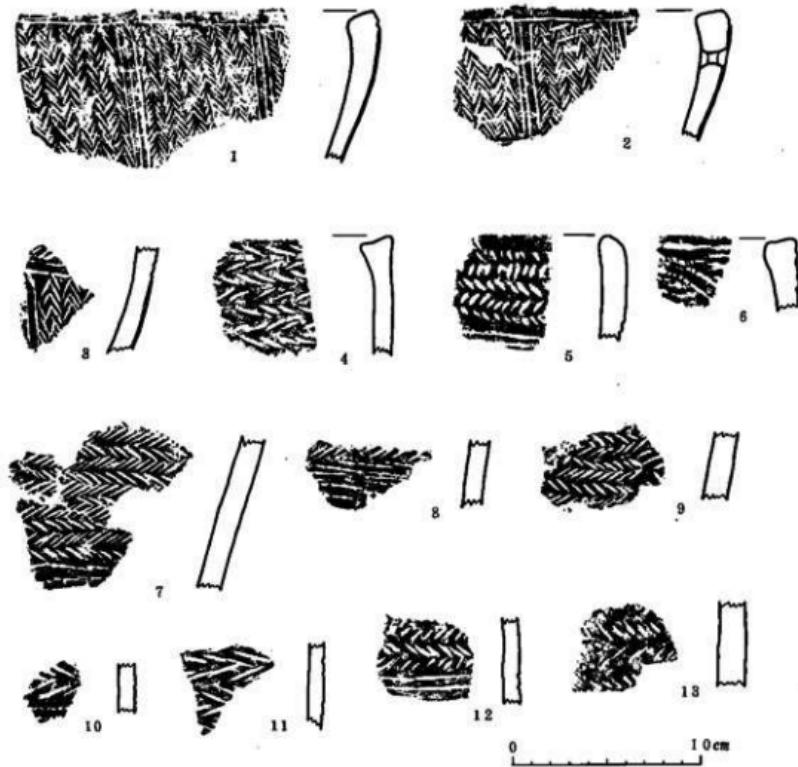
第18図1・2は同一個体で、とも焼成・色調・胎土および綾杉文の形状も似ているが、上部に横位の綾杉文の片鱗がうかがえ、全体の文様帯の復元は得られた資料の中では困難であるが、ここでは一応疑問符を付しておくにとどめようと思う。器形としては、1・2は胴部に向かう器面の角度からして余り深くはない鉢形を呈すると考えられる。口径の大きさは推定34cmで、2には穿孔が認められる。4は綾杉文が横位に施文される他、1・2に比してやや文様が粗大で、口縁の肥厚化あるいは口唇部の形状にも違いがみられるが、焼成は良好でやはり堅牢な感じを与える。5もまた口縁・口唇部の形状が前二者と異なり肥厚化もさほど大きくなく丸みを帯び、文様も綾杉が開きぎみに表現されている。胎土には石英・長石等を多量に混入し、砂質の強い粘土を用いている。7~9は同一個体と思われ、綾杉文の下位に横位の貝殻縁による刺突文が施されることが知られる。これらは、やや焼成が1・2・4に比べ劣るが、全般的には精製された土器である。11の文様は4に類似し、12・13は5の文様に近いが、13では粗っぽく文様のパターンが踏襲されているにすぎない。

6は、施文が貝殻縁による刺突文であり、他と文様要素に差異が見られるが、口縁・口唇部の肥厚化・平坦化など1・2・4に類似するもので、他に類例がないため別に扱わずII類中に分類した。

全般には器面の内側はほとんど丁寧に研磨されており、精緻な土器の部類に入る。

III 頸(第19図、図版10)

貝殻縁による刺突文を連続した山形あるいは鋸歯状に施文するもので、全般に胎土に混入される石英・長石等の砂粒も多く、混入物におおく場合雲母が加わることが特徴である。焼成もさほど良好なものではなく粗製的な土器である。器形は、胴部にあまりふくらみをもつことのない深鉢形が主と考えられる。1・2は同一個体で横位に連続山形文を施文している。口縁は山形口縁をなし、胴部までほとんど直線的でふくらみがない。3~8も同一個体と考えられ、これでは連続山形文が横位に施文されている。9~14も同一個体と考えられ、横位の連続山形文は3~8に比べると細かくやや配列に乱れが見られる。胎土には他と同様、雲母・石英・長石等を含むが、より砂質の強いものである。これらの土器片には山形文の他に横位ないしは若干斜位の平行の貝殻刺突文がみられ、文様のバラエティーの一つの要素が認められる。15は、そうした平行の貝殻縁刺突文を施文した口縁部であるが、III類土器の中

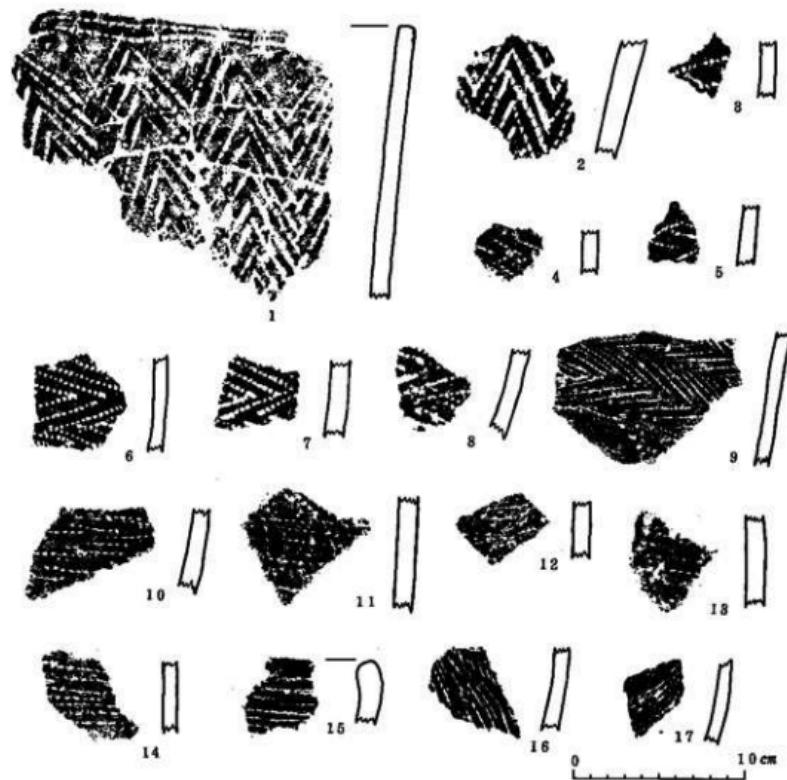


第 I 地区 5・6・13, 第 II 地区 1~8・7~12, 第 IV 地区 4

第 18 図 第 I・第 II・第 IV 地区出土 II 類土器実測図・拓影

第 2 表 II 類土器一覧表

測量番号	出土地区	器種	文・文様	器 形	地 土	色 調	底 成	備考
第 I 地区 1	I-C-2	口縁部	幾何文・ヘラ型き縫合文	(底径約 5.4 cm)	石英粉を多く混入	灰灰・灰褐色	良好	同一箇所
2	I-C-2	口縁部	幾何文・ヘラ型き縫合文	底元有り				
3	I-C-8	脚 部	幾何文・ヘラ型き縫合文		石英粉を多く混入	灰灰・灰褐色	良好	1・2と同じ(?)
4	I-C-7	口縁部	ヘラ型き縫合文	口部端が肥厚し、平底である	黄緑・灰灰褐色	灰・灰褐色	良好	1・2・3・4同じ(?)
5	I-C-4	口縁部	幾何文・ヘラ型き縫合文	口縫合が肥厚し、平底である	石英粉を多く混入	灰 灰	普通	1・2・3・4同じ(?)
6	I-C-8	口縁部	幾何文・ヘラ型き縫合文	口縫合が肥厚し、平底である	石英粉を多く混入	灰灰・灰褐色	普通	1・2・3・4同じ(?)
7	I-C-7	脚 部	ヘラ型き縫合文	底元有り	石英粉を多く混入	灰・灰褐色	良好	同一箇所(?)
8	I-C-7	脚 部	ヘラ型き縫合文		石英粉を多く混入	灰褐色	普通	
9	I-C-8	脚 部	ヘラ型き縫合文		石英粉を多く混入	灰 灰	普通	
10	I-C-8	脚 部	ヘラ型き縫合文		石英粉を多く混入	灰 灰	普通	
11	I-C-8	脚 部	ヘラ型き縫合文		石英粉を多く混入	灰 灰	普通	
12	I-C-8	脚 部	ヘラ型き縫合文		石英粉を多く混入	灰 灰	普通	
13	I-C-8	脚 部	ヘラ型き縫合文		石英粉を多く混入	灰 灰	普通	
14	I-C-2	脚 部	ヘラ型き縫合文		石英粉を多く混入	灰 灰	普通	
15	I-C-2	脚 部	ヘラ型き縫合文		石英粉を多く混入	灰 灰	普通	



第Ⅰ地区 8～15、第Ⅱ地区 1～2・16～17

第19図 第Ⅰ・第Ⅱ地区出土Ⅲ類土器実測図・拓影

第3表 Ⅲ類土器一覧表

標識番号	出土地點	基盤	高 文・文 基	形 态	施 工	色 調	施化	量 程
第Ⅰ地区 1	9-C-2	板状	直鉢形深腹平底の火文	口縁直口	表面・石器粉を 多く混入	黒褐色～赤褐色	普通	同一個体
2	9-C-2	板状	直鉢形深腹平底の火文	口縁直口	表面・石器粉を 多く混入	黒褐色～赤褐色	普通	同一個体
3	1-D-2	板状						
4	1-C-5	板状						
5	1-C-5	板状	横筋有唇縫斜腹火文	斜縫に様とんどみくらみを もたない	表面・石器粉を 多く混入	黒褐色～赤褐色	普通	同一個体(?)
6	1-E-4	板状						
7	1-B-4	板状						
8	1-B-4	板状						
9	1-K-6	板状						
10	1-D-5	板状						
11	1-D-5	板状	横筋有唇縫斜腹火文	斜縫に様とんどみくらみを もたない	表面・石器粉を 多く混入	黒褐色～赤褐色	普通	同一個体(?)
12	1-D-5	板状	横筋有唇縫斜腹火文	斜縫に様とんどみくらみを もたない	表面・石器粉を 多く混入	黒褐色～赤褐色	普通	同一個体(?)
13	1-D-5	板状						
14	1-D-5	板状						
15	1-C-6	板状	平行直縫斜腹火文	おずかに内側する口縫	表面・石器粉を 多く混入	黒褐色～赤褐色	普通	
16	1-C-9	板状	直縫斜腹火文					
17	1-C-9	板状	直縫斜腹火文					

に加えることが出来ようと思う。しかし、口縁部の形状には1と違いがあり、やや器壁も厚く、わずかに内湾がみとめられる。16・17での貝殻腹縁刺突文には配列の乱れがみられ、10~14にみる平行な貝殻腹縁刺突文とも異なるが、やはり文様のバラエティーの一つとして考えられそうである。

V 類(第20図・第21図1~3・6~20、図版9・11)

いわゆる「吉田式」系の土器で、第I地区からの出土が大半を占める。角筒土器と円筒土器が認められるが、器形の全体を復元出来るものはなかった。角筒土器は第20図1~4・12・17・19・20・27・33・35・39・41~43、第21図11・12などで、円筒土器は第20図21・22、第21図1・9・10・13・16などである。角筒土器と円筒土器との間には、文様をはじめとし胎土・焼成・色調・器壁の厚さなどに大きな違いは認められず、全般に比較的微細な石英・長石等の砂粒を胎土に混じ、焼成も良好な方である。

口縁部の形状には、第20図1・2・4など山形口縁をなすと認められるものがあり、すべての口縁部片の口唇には刻目が施されている。口縁端部の文様は8条の横位の貝殻腹縁刺突線文を施すものがほとんどで、以下に縦位あるいは斜位の貝殻腹縁刺突線文が施されている。貝殻腹縁による刺突文は多くの場合波状の線文として表現されるが、第20図40~45などでは若干刺突部分が方形に表現されている。条痕文の地文はほとんどの土器片に認められたが、第20図2・3・11・12・20・37・38、第21図6・16には条痕の地文が施されていない。又、条痕文は斜位に施文されるものがほとんどであるが、第20図21・22などは縦位に施文されるものである。第20図39、第21図2・4などは条痕というより押し引きに近いが、いわゆる押し引き文は第21図20に認められる。「吉田式」の特徴とされるタサビ形貼り付け文は最も良好には第20図2に認められたが、他は貼り付け文の磨滅等が著しい。その中でも、第21図7・8のタサビ形貼り付け文は若干幅の広くなるもので、最近の資料の集積の中で進められている「吉田式」の細分化の中に組み入れられるものようである。底部片としては第20図44があり、角筒土器のもので刻目を施している。

V 類(第21図4~5、第22図、図版10)

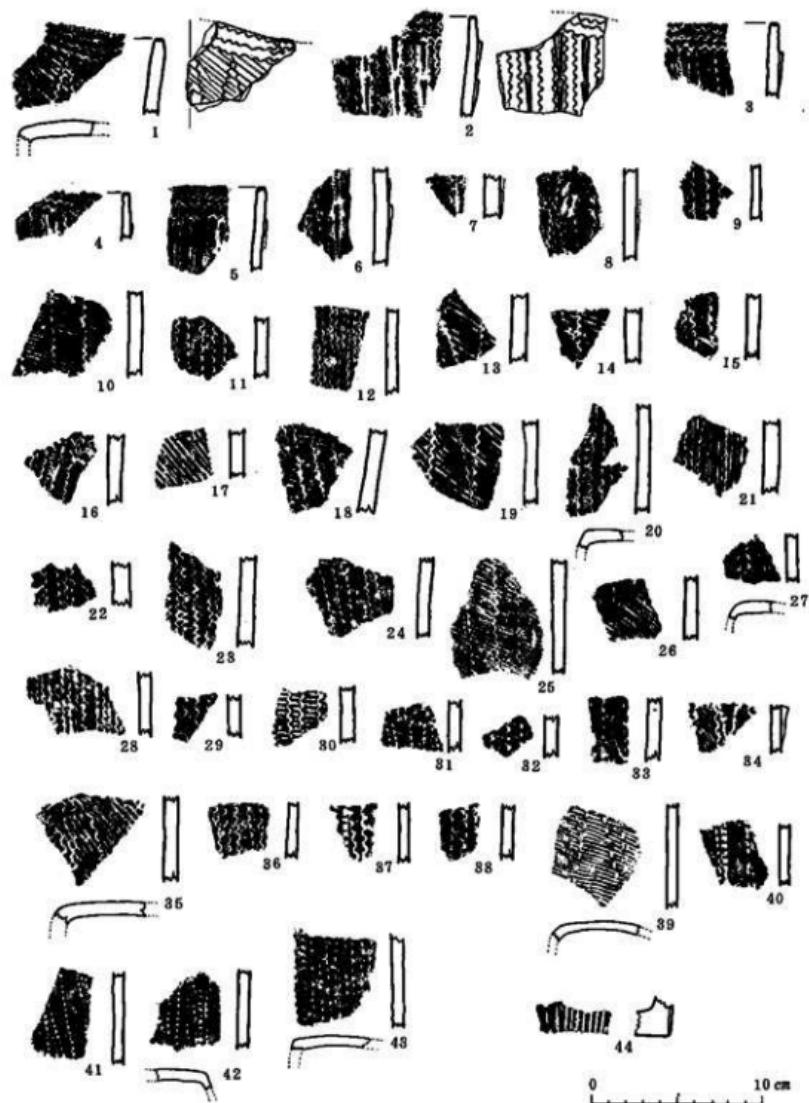
いわゆる「前平式」に属するとされるもので、その出土数は少なく、主には第II・第III地区にみられた。角筒土器と同筒土器が認められ、第21図4~5、第22図17~19はその角筒土器と考えられる。第22図1~3は、口縁端部にヘラ状の施文具により羽状あるいは列点状に凹凸文を施すもので、口唇部は平坦になり角ばっている。2・3では口縁端部下に沈線を施して区画し、1では口縁端部下に粗い条痕文を施文している。第22図4~15はいずれも口縁端部に貝殻腹縁連続刺突文を施文し、以下は条痕文を施すタイプのものである。口縁部はいずれも直口をなすが、6がわずかに外湾を示している。16は角筒土器の胴部と考えられ、やや粗大に方形状に表現された貝殻腹縁刺突文が施文されている。条痕の地文も施文されている。17~18は同一個体で条痕文のみが施文されており、17の破片に角筒のコーナーの片縫がわずかに認められるほか、横位断面も直線的で角筒土器と判断される。

全般的にV類「吉田式」土器に比して、胎土に混入される石英・長石等の砂粒が多く、砂質が強い粘土が使用されている。焼成も全般的に悪くはないが、さほど良好ともいえない。

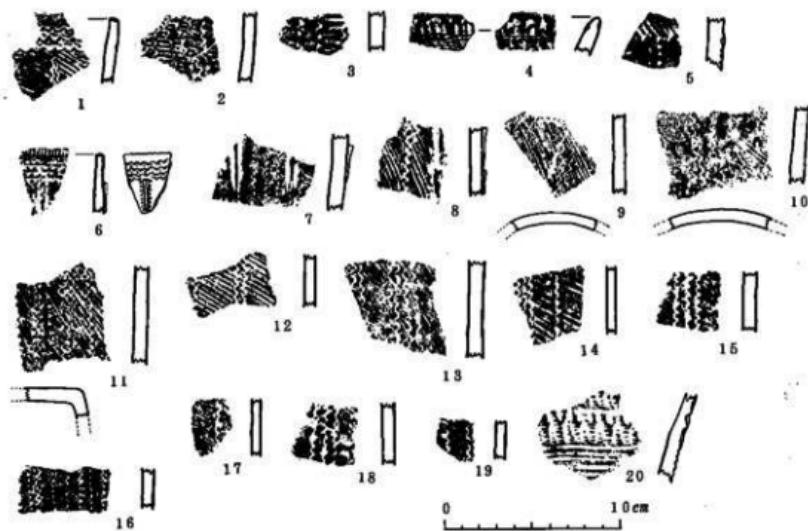
第4表 IV類土器一覧表

種別番号	出土地区	器部	馬文・文様	断形	胎土	色調	施成	備考
第Ⅳ固 1	I - C - 4	口縁部	其腰縫跡空窓文・条文 タサビ形貼り付け文	角筒・山形口縁	微細石英混	黒褐色～褐色	良好	I-骨頭削目
2	I - C - 4	口縁部	其腰縫跡空窓文 タサビ形貼り付け文	角筒・山形口縁	石英粒混	黒褐色	良好	I-骨頭削目・条痕の地文なし
3	I - B - 4	口縁部	其腰縫跡空窓文 タサビ形貼り付け文	角筒	微細石英混	黒褐色～赤褐色	普通	I-竹削刻目・条痕の地文なし
4	I - C - 4	口縁部	其腰縫跡空窓文・条文 タサビ形貼り付け文	角筒・山形口縁	石英粒混	黒褐色	良好	I-骨頭削目
5	I - C - 4	口縁部	其腰縫跡空窓文・条文 タサビ形貼り付け文	——	微細石英混	黒褐色	普通	I-骨頭削目・条痕は部位に施文される
6	I - C - 4	口縁部	其腰縫跡空窓文・条文 タサビ形貼り付け文	——	石英粒混	黒褐色	良	——
7	I - C - 4	胴部	其腰縫跡空窓文・条文 タサビ形貼り付け文	——	石英粒混	黒褐色～赤褐色	良好	——
8	I - C - 4	胴部	其腰縫跡空窓文・条文 タサビ形貼り付け文	——	石英粒混	灰褐色	普通	——
9	I - C - 1	胴部	其腰縫跡空窓文・条文	——	微細石英混	黒褐色～褐色	良好	——
10	I - C - 4	胴部	其腰縫跡空窓文・条文	——	石英粒混	黑～白褐色	良	——
11	I - C - 4	胴部	其腰縫跡空窓文	——	石英粒混	黒褐色	普通	条痕の地文なし
12	I - C - 4	胴部	其腰縫跡空窓文	角筒	石英粒混	褐色	普通	条痕の地文なし
13	I - C - 9	胴部	其腰縫跡空窓文・条文	——	微細石英混	黒褐色～黃褐色	良好	——
14	I - C - 9	胴部	其腰縫跡空窓文・条文	——	微細石英混	赤褐色	普通	——
15	I - B - 4	胴部	其腰縫跡空窓文・条文	——	微細石英混	暗褐色	良好	——
16	I - C - 6	胴部	其腰縫跡空窓文・条文	——	石英粒混	黑褐色	普通	——
17	I - C - 6	胴部	其腰縫跡空窓文・条文	角筒	石英粒混	黒褐色～赤褐色	良好	——
18	I - E - 6	胴部	其腰縫跡空窓文・条文	——	石英粒を多く混入	黒褐色～赤褐色	良好	——
19	I - E - 6	胴部	其腰縫跡空窓文・条文	角筒	石英粒混	黒褐色	良	内部は剥離している
20	I - A - 6	胴部	其腰縫跡空窓文・条文	角筒	石英粒混	黒褐色	良	条痕の地文なし
21	I - E - 6	胴部	其腰縫跡空窓文・条文	円筒	石英粒混	暗赤褐色	良好	条痕は斑状に施文される
22	I - A - 6	胴部	其腰縫跡空窓文・条文	円筒	大きめの石英粒を混入	明赤褐色	普通	条痕は斑状に施文される
23	I - C - 4	胴部	其腰縫跡空窓文	——	微細石英混	灰褐色～白灰色	不良	——
24	I - C - 4	胴部	其腰縫跡空窓文・条文	——	石英粒混	赤褐色～黒褐色	良	——
25	I - C - 4	胴部	其腰縫跡空窓文・条文	——	微細石英混	黒褐色	良好	——
26	I - D - 5	胴部	其腰縫跡空窓文・条文	——	微細石英混	黒褐色～茶褐色	普通	——
27	I - D - 5	胴部	其腰縫跡空窓文・条文	角筒	微細石英混	茶褐色～黒褐色	不良	——
28	I - D - 5	胴部	其腰縫跡空窓文・条文	——	石英粒混	黒褐色～茶褐色	良好	——
29	I - C - 3	胴部	其腰縫跡空窓文・条文	——	微細な石英粒を混入し稍良質な粘土	褐～赤褐色	良好	——
30	I - C - 5	胴部	其腰縫跡空窓文・条文 縫文を押しつぶす條文	——	石英粒混	用色	普通	内部は剥離している
31	I - C - 5	胴部	其腰縫跡空窓文・条文	——	石英粒混	黒褐色	良好	——
32	I - C - 7	胴部	其腰縫跡空窓文・条文	——	石英粒混	黒褐色	普通	——
33	I - C - 7	胴部	其腰縫跡空窓文・条文	角筒	石英粒混	黒褐色	普通	——
34	I - C - 7	胴部	其腰縫跡空窓文・条文 タサビ形貼り付け文	——	石英粒混	赤褐色～黄褐色	良	輪やりや広い大きめのタサビ形貼り付け文
35	I - C - 5	胴部	其腰縫跡空窓文・条文	角筒	微細石英混	白黄色～褐色	良好	——

辨別番号	出土地区	器形	施文・文様	器形	施文・文様	色調	地成	備考
第20回#4	I - C - 4 鋼 部	貝殻縫隙刺突線文・条痕文		直細石英器	黒褐色～褐色	良好		
87	I - C - 4 鋼 部	貝殻縫隙刺突線文		微細石英器	黒褐色	普通	条痕の地文なし	
88	I - C - 4 鋼 部	貝殻縫隙刺突線文		石英粒器	黒褐色	普通	条痕の地文なし	
89	I - B - 5 鋼 部	貝殻縫隙刺突線文・条痕文を押し引き風に施文	角 簡	盛母・石英粒器	明褐色	良好		
40	I - B - 5 鋼 部	貝殻縫隙刺突線文・条痕文		盛母・石英粒器	暗褐色	良	貝殻縫隙文は若干方形状に表現	
41	I - C - 5 鋼 部							
42	I - C - 5 鋼 部			石英粒器	黒褐色	普通	同一個体	
43	I - C - 5 脊 部							
44	I - B - 4 底 部	刻印文	角 簡	微細石英器	黒褐色	良好		
第21回 1	II - C - 5 口縁部	貝殻縫隙刺突線文・条痕文	円 簡	石英粒器	暗赤褐色	良好	口唇部削り	
2	II - B - 3, 4 脊 部	貝殻縫隙刺突線文・条痕文		石英粒器	黒褐色	普通		
3	II - C - 6 脊 部	貝殻縫隙刺突線文・条痕文		石英粒器	赤褐色～黄褐色	良好		
4	II - C - 8 口縁部							
5	II - C - 8 脊 部	貝殻縫隙刺突線文・条痕文	角 簡	石英の混入は少なく精良な粒土	黒褐色～暗赤褐色	普通	V型土器・同一個体	
6	IV - D - 10 口縁部	貝殻縫隙刺突線文・タリビ形貼り付け文		微細な盛母・石英を混入	暗 黑褐色	良好	生脈の地文なし	
7	IV - C - 7 脊 部	貝殻縫隙刺突線文・タリビ形貼り付け文		石英粒器	黒褐色～黄褐色	普通	条痕の地文なし	
8	IV - C - 7 脊 部	貝殻縫隙刺突線文・条痕文タリビ形貼り付け文		石英粒器	暗赤褐色	良好		
9	IV - C - 7 脊 部	貝殻縫隙刺突線文・条痕文	円筒(推定径1.5cm)	微細石英器	黒褐色	良好	内面は剥離が進んでいる	
10	IV - C - 7 脊 部	貝殻縫隙刺突線文・条痕文	円 簡	石英粒を多く混入	黒褐色	普通	？と同一個体(?)	
11	IV-C, D-3, 4 脊 部	貝殻縫隙刺突線文・条痕文	角 簡	微細石英器	黒褐色～暗褐色	良好		
12	IV - D - 5 脊 部	貝殻縫隙刺突線文・条痕文	角 簡	微細石英器	暗褐色～褐色	普通		
13	IV - D - 13 脊 部	貝殻縫隙刺突線文・条痕文	円 簡	石英粒器	赤褐色	普通		
14	IV - D - 15 脊 部	貝殻縫隙刺突線文・条痕文		石英粒器	赤褐色	普通		
15	IV - D - 16 脊 部	貝殻縫隙刺突線文・条痕文		石英粒器	暗赤褐色	普通		
16	IV - D - 7 脊 部	貝殻縫隙刺突線文	円 簡	石英粒器	暗灰褐色	普通	条痕の地文なし	
17	IV-C, D-3, 4 脊 部	貝殻縫隙刺突線文		石英粒器	黒褐色	良		
18	IV - D - 10 脊 部	貝殻縫隙刺突線文・条痕文		石英粒を多く混入	黒褐色	良		
19	IV - D - 8 脊 部	貝殻縫隙刺突線文・条痕文		石英粒器	黒褐色	普通		
20	IV - D - 8 脊 部	貝殻押し引き文・条痕文		盛母・石英粒混入	茶褐色	良好		



第20図 第I地区出土之頸土器実測図・拓影

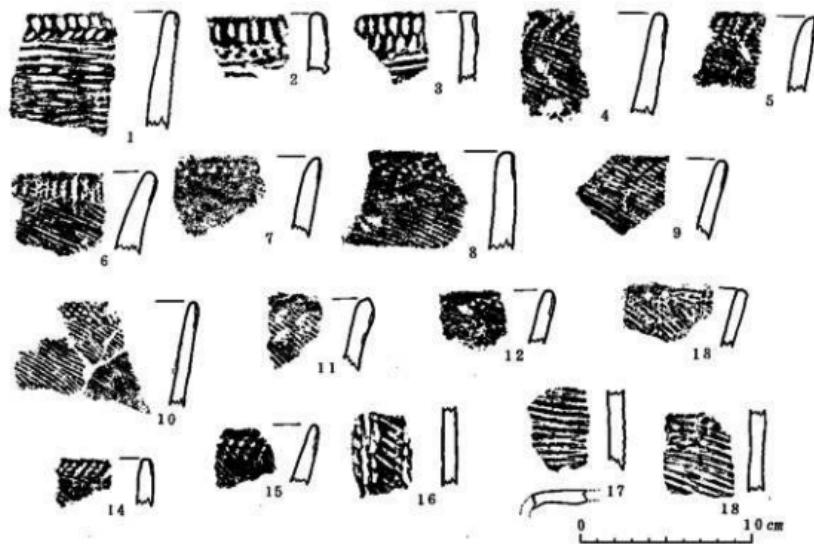


第Ⅱ地区1~5、第Ⅳ地区6~20

第21図 第Ⅱ・第Ⅳ地区出土N類V類土器実測図・拓影

V類(第28図、図版12)

山形・精円・格子目の3タイプの押型文が出土している。わずかに第Ⅳ地区に1点みとめられた他はすべて第Ⅰ地区からの出土である。口縁部はおおよそ直口をなすものであるが、2では外へ開きぎみとなっている。胴部片では9・15・20・21など器壁の厚いものと7・11・16・17・26などのように薄いものがある。底部片は1点のみで、山形押型文を施し平底のタイプである。文様では、2の口縁部が両面に山形押型文を施し、内側の口縁端部に押型原体を押し引いた時に得られるとされる平行短線を施している。山形押型文では、文様の比較的しっかりしたものは1・2・15などで、7・12・13・16・19では山形が鋭角になり、逆に1・9ではそれが鈍角なものとなっている。精円押型文では、22・26・27のように精緻なものと、23・24・28のようにやや粗大になるものとがみられる。又、4・12・23・25~27・31の胎土には石英・長石等の砂粒の他に鐵母が混入されている。焼成は全般的に比較的良好く、21・22などの器面内側はヘラ状の工具で研磨され丁寧な作りが認められる。



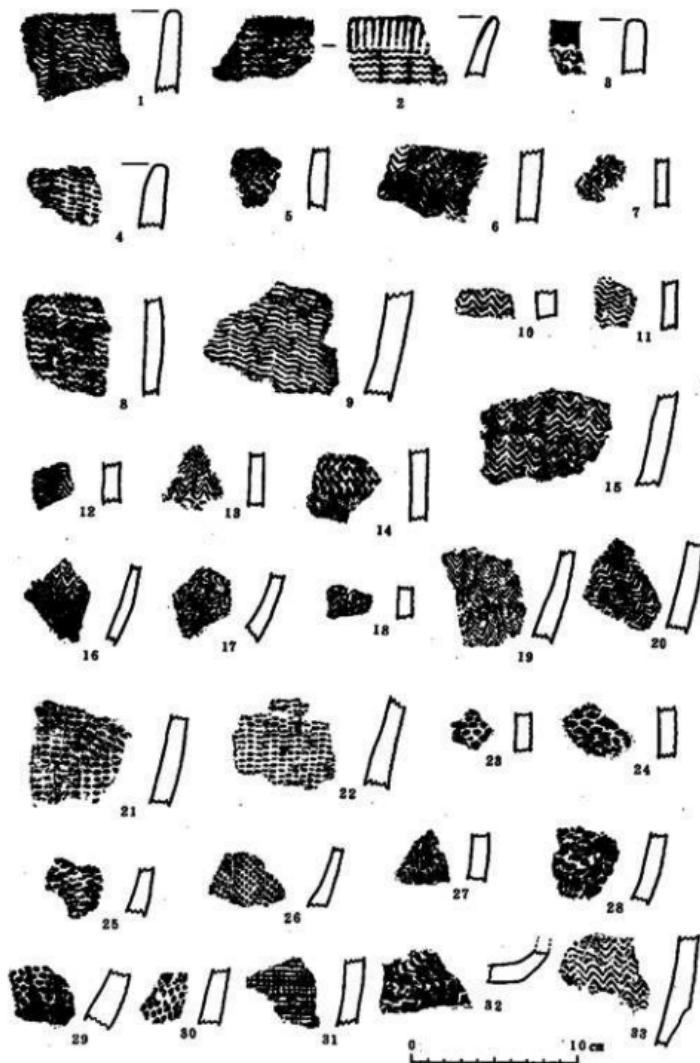
第22図 V類土器実測図・拓影

第5表 V類土器一覧表

標誌番号	出土地区	部	文・文様	形	土	色調	鉄成	備考
第22図 1 - C - 8		口縁部	テラ拂き凹凸文・条痕文	口縁直口・円筒	石英粉多量に混入	暗褐色	普通	
3 N-C,D-2,4		口縁部	テラ拂き凹凸文・弦線文	口縁直口・円筒	石英粉多量に混入	黒褐色	普通	
8 I - C - 5		口縁部	テラ拂き凹凸文・弦線文	口縁直口・円筒	石英粉多量に混入	灰褐色～赤褐色	良	
4 N - D - 5		口縁部	貝殻磨擦連続斜交文・条痕文	口縁直口	石英粉多量に混入	白灰色	普通	
5 N - D - 19		口縁部	貝殻磨擦連続斜交文・条痕文	口縁直口	石英粉多量に混入	淡黄褐色	普通	
6 N - C - 7		口縁部	貝殻磨擦連続斜交文・条痕文	口縁わずかに外角	石英粉粒混	黄褐色～灰褐色	普通	
7 N - D - 8		口縁部	貝殻磨擦連続斜交文・条痕文	口縁直口	像脚石英混	黒褐色～黄褐色	良好	
8 N - C - 7		口縁部	貝殻磨擦連続斜交文・条痕文	口縁直口	石英粉多量に混入	黒褐色	良	
9 N - D - 1		口縁部	貝殻磨擦連続斜交文・条痕文	口縁直口	石英粉粒混	茶褐色	良好	
10 N - D - 5		口縁部	貝殻磨擦連続斜交文・条痕文	口縁直口	石英粉多量に混入	黑灰～黄褐色	普通	
11 I - C - 8		口縁部	貝殻磨擦連続斜交文・条痕文	口縁部わずかに凹厚	石英粒混	黄褐色	良好	
12 I - B - 2		口縁部	貝殻磨擦連続斜交文・条痕文		石英粉多量に混入	黒褐色	普通	
13 N-C,D-2,4		口縁部	貝殻磨擦連続斜交文・条痕文	小型の円筒土器	像脚石英混	黄褐色	普通	
14 N - D - 10		口縁部	貝殻磨擦連続斜交文・条痕文		石英粒混	赤褐色	良好	
15 I - C - 2		口縁部	貝殻磨擦連続斜交文・条痕文		石英粉多量に混入	灰黑色	普通	
16 I - B - 4	胴部	貝殻磨擦斜交文・条痕文	角筒土器	石英粒混	赤褐色	良好		
17 I - B - 4	胴部	条痕文	角筒土器	石英粒混	赤褐色	普通	同一個体	
18 I - B - 4	胴部							

第6表 VI類土器一覧表

器物番号	出土地区	遺 稣	施文・文様	器 形	胎 土	色 調	地成	備 考
第23回 1	I-C-9	口縁部	山形押壓文	口縁直口	鐵筋石英混	黒褐色～茶褐色	良好	
2	I-E-4	口縁部	山形押壓文	やや外反	石英粒混	黒褐色	良好	
3	I-C-6	口縁部	山形押壓文	口縁直口	石英粒混	暗褐色～黄褐色	不良	
4	I-C-3	口縁部	精円押壓文	口縁直口	鐵母・石英粒混	灰褐色	良好	
5	I-C-9	胴 部	山形押壓文		石英粒混	黒褐色	普通	文様は焼れている
6	I-E-4	胴 部	山形押壓文		石英粒混	灰褐色	良好	
7	I-B-4	胴 部	山形押壓文		石英粒混	黒褐色	普通	
8	I-E-4	胴 部	山形押壓文	胴部はややふくらみをもつ	石英粒混	赤褐色～黒褐色	良好	細かい山形文
9	I-C-11	胴 部	山形押壓文	底部は厚く、ややくらみをもつ	石英粒を多く混入	黒褐色～灰褐色	良好	文様はややユーリーズである
10	I-B-5	胴 部	山形押壓文		石英粒混	白褐色～灰褐色	普通	
11	I-C-7	胴 部	山形押壓文		石英粒混	暗赤褐色～灰褐色	普通	
12	I-A-6	胴 部	山形押壓文	胴部・石英粒を多く混入	褐色	褐色	良好	内面に指痕あり
13	I-B-4	胴 部	山形押壓文		石英粒混	黒褐色	普通	
14	I-C-4	胴 部	山形押壓文		石英粒を多く混入	黒褐色～白褐色	普通	大きな粒の石英も混入する
15	I-C-5	胴部～底部	山形押壓文	底部にかけて器壁はやや肥厚	石英粒混	灰褐色～灰褐色	普通	大きな粒の石英も混入する
16	I-E-6	胴部～底部	山形押壓文	底部にかけて器壁はやや薄くなる	石英粒を含み粗粒な粘土	暗褐色～赤褐色	良好	
17	I-C-4	胴部～底部	斜俊山形押壓文		石英粒混	暗赤褐色～黑色	普通	
18	I-C-4	胴 部	山形押壓文		石英粒混	茶褐色	良好	
19	I-B-4	胴部～底部	山形押壓文	底部にかけて器壁はやや肥厚	石英粒混	赤褐色～黒褐色	良好	内面は裏面に研磨されている
20	I-C-3	胴部～底部	山形押壓文		石英粒を多く混入	黒褐色～褐色	普通	
21	I-B-4	胴部～底部	精円押壓文		石英粒混	褐色	良好	内面はヘラ状工具により研磨
22	I-C-3	胴部～底部	精円押壓文		鐵母・石英粒混	黒褐色～白褐色	良好	内面はヘラ状工具により研磨
23	I-B-4	胴 部	精円押壓文		鐵母・石英粒混	黒褐色	普通	
24	I-D-6	胴 部	精円押壓文		石英粒混	淡褐色～灰褐色	良好	
25	I-D-5	胴部～底部	精円押壓文	底部にかけて器壁はやや肥厚	鐵母・石英粒混	暗褐色～灰褐色	普通	
26	I-E-6	胴部～底部	精円押壓文	底部にかけて器壁は大きく肥厚	鐵母・石英粒混	黒褐色	良好	内面は裏面の擦痕で調整
27	I-C-5	胴 部	比較的細かい精円押壓文		鐵母・石英粒混	淡赤褐色～灰褐色	良好	
28	I-C-3	胴 部	精円押壓文		鐵母・石英粒混	赤褐色～黒褐色	普通	
29	I-C-11	胴部～底部	精円押壓文		石英粒混	黒褐色	良好	
30	I-E-4	胴部～底部	斜俊精円押壓文		石英粒を含み粗粒な粘土	赤褐色～黒褐色	普通	
31	I-C-11	胴 部	格子目押壓文		鐵母・石英粒を多く混入	暗褐色～黑色	普通	
32	I-D-5	底 部	斜俊山形押壓文		石英粒混	黒褐色～灰褐色	普通	
33	N-C,D-34	胴 部	山形押壓文 (推定径 8 cm)		石英粒混	黒褐色～茶褐色	良好	土器片背面の手斧は剥離している



第Ⅰ地区1~32，第Ⅳ地区8~3

第28图 第I·第IV地区出土M类(押型文)土器实测图·拓影

その他の土器（第24図、図版13）

以下、点数は1~2点であるが特徴的な土器について列記することにする。

1は第Ⅱ地区B-4出土で、Ⅳ層（暗褐色土層）に包含されていた。胎土には石英・長石等の砂粒を少量混入し、比較的精良な粘土を用いている。色調は暗褐～黒褐色で、焼成は良好である。口唇部には微細な刻目突帯をもち、胸部にまでほとんどふくらみをもたず直線的で、深鉢形をなすと考えられる。文様は貝殻条痕文を連続山形状に配し、Ⅲ類土器との文様の近似が認められる。器壁は比較的薄く、内面は粗い擦痕で調整されている。又、ススを付着している。

2は第Ⅱ地区C-8出土で、Ⅲ層（褐色土層）に包含されていた。胎土には石英・長石等の砂粒を含み、色調は黒褐色を呈し、焼成は良好である。山形口縁をなし、内外の口縁端部・口唇部に細かい刻目を施しており、微細な刻目突帯は口縁下位にも施され、地文はRLの単節斜縄文である。又、土器片下部の文様は撚糸文と思われる複雑な文様構成をもっている。器面内側はヨコナデ調整で、内面には炭化物あるいはススの付着を認める。

以上1・2は「繩式」の系統の土器ともみられるが、ことに2はその文様要素からいって、いわゆる瀬戸内地方の前期土器の影響を受けたとされる土器に類似性が強い。

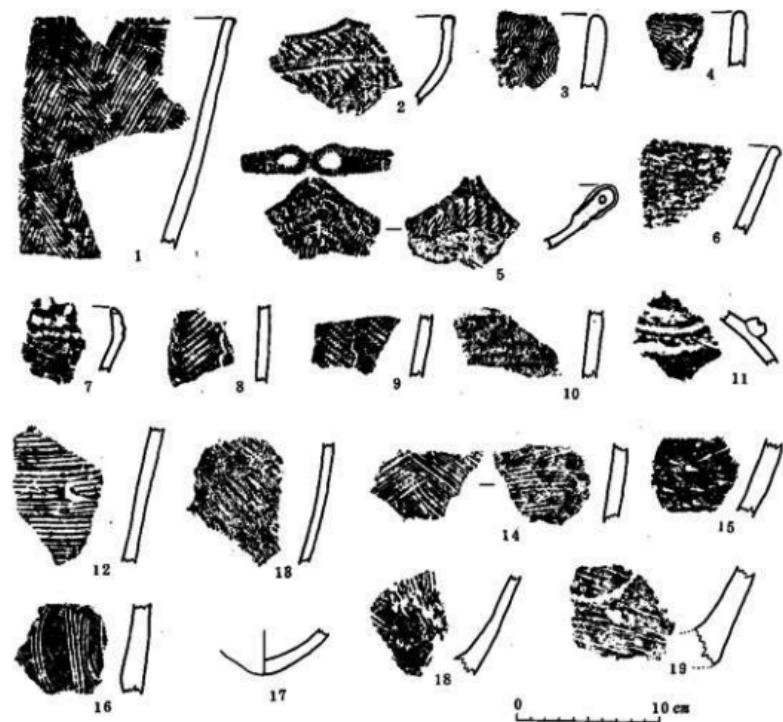
3・4は前者が第Ⅰ地区B-4、後者が第Ⅴ地区D-7の出土で、前者はⅣ層（暗褐色土層）、後者は第Ⅳ地区Ⅳ層（黒色土層）に包含されていた。共に貝殻条痕と思われる文様を波状に施したもので、鹿児島県下にも類例が求められるが、まだ型式化はされていない。3は、胎土に石英・長石等を多量に混入し、色調は赤褐～黒褐色を呈し、焼成は良好である。若干の山形口縁をなすとみられ、器面内側はヘラ状の工具によって撚り付けられている。4も、胎土に石英・長石等を多量に混入し、色調は黒褐～黄褐色を呈し、焼成は普通である。

5は第Ⅱ地区B-5出土で、攪乱層からの出土である。胎土に混入される石英砂は少量で比較的精良な粘土を用いている。色調は黄褐～茶褐色を呈し、焼成はきわめて良好である。山形に外反した口縁をなし、口唇部には細かい刻目がまんべんなく施され、裝飾孔をもっている。貝殻およびヘラ状工具によるとと思われる短かく引っ張いたような斜短線を地文とし、幅広の刻目突帯がその上に貼り付けられている。キャリバー状に近い器形をなすものと考えられ、中期土器の系統が考えられる土器で、2の土器と共に県内の類例が待たれる。

6は第Ⅴ地区A-1出土で、黒褐色土層に包含されていた。口唇部に刻目突帯が施されているが、風化が著しくその詳細の確認は困難である。胎土には、やや大粒の黒曜石片が混入していた他石英・長石等を多量に混入している。色調は暗黒褐～黒色で、焼成はさほど良い方ではない。器面には粗い条痕文を施し、内面は口縁端部がヨコナデ調整されている。

7は第Ⅰ地区D-5出土で、Ⅲ層（褐色土層）に包含されていた。胎土は砂質の強いもので、焼成は良好である。口唇部には粗大なヘラ状の工具を押し付けたと思われる刻目が施され、その下にも粗い凹凸文が二条施文されている。口縁は内湾し、塞ノ神式にみる二重口縁風の口縁を思わせるが、ここでは別に扱い保留しておいた。

8・9は共に第Ⅱ地区C-5出土で、Ⅳ層（褐色土層）に包含されていた。8の破片において、縦位のRL 単節斜縄文の他、結節の回転痕の反対側にLR 単節斜縄文がみられる事から、LR 単節斜縄文



第24図 その他の出土土器実測図・拓影

の施文された7とは同一個体とみられる。共に、胎土には少量の石英・長石等の砂粒を含み精良な粘土が用いられており、色調は茶褐色を呈し、焼成は良好である。

10は第I地区D-5出土で、Ⅲ層(褐色土層)に包含されていた。胎土には雲母・石英・長石等を混入し、色調は灰黒色を呈し、焼成は普通である。貝殻模様による刺突文を半載竹管様に表現したもので、鹿児島県下に類例が知られる。

11は第I地区C-9出土で、N層(褐色土層)に包含されていた。胎土には石英・長石等を混入し、色調は外表面が赤褐色、内面は黒褐色で、焼成は良好である。粗大な貼り付け突帯をもち、突带上には刺突文を施している。

12は第Ⅱ地区C-7出土で、N層(暗褐色土層)に包含されていた。胎土への石英・長石等の混入は少量で、色調は黒褐~黒色を呈し、焼成は良好である。精緻な貝殻条痕文を施文し、文様の施し方は先の1の土器に類似している。

13は第Ⅱ地区B-3, 4の出土で、出土層が判然とせず一括土器としてとり上げたものである。胎土には石英・長石等を混入し、色調は暗茶褐色～黒灰色を呈し、焼成は良いとはいえない。貝殻痕跡により粗く削り器面を調整したものであろうか。

14は第Ⅳ地区C, D-3, 4出土で、第Ⅳ地区Ⅲ層（黒色土層）に包含されていた。胎土には石英・長石等を混入し、色調は暗赤褐色で、焼成は良好である。器面には貝殻条痕文を交互に斜位に施文し、内面には横位ないしは斜位の粗い条痕文を施文している。

前期貝殻条痕文のバラエティーは最近の資料の蓄積の中で、かなり捉えられるに至っているが、この土器も鹿児島県下に類例が求められる。

15は第Ⅰ地区C-9出土で、Ⅲ層（褐色土層）に包含されていた。胎土には石英・長石等の砂粒を多く混入し、色調は茶褐色～赤褐色を呈し、焼成は普通である。器面には粗雑にヘラ状の工具と思われるもので、はね上げた短線を不斷に施文している。この文様はⅡ類土器へラ描き綾杉文と関連があるとみられ、鹿児島県下の類例では、その幾つかのバラエティーを指摘出来るようである。

16は14と同じく第Ⅰ地区C-9出土で、Ⅲ層（褐色土層）に包含されていた。胎土には微細な石英・長石等の砂粒を混入し、色調は黒灰～灰褐色を呈し、焼成は普通である。器面にはスヌを付着している。文様はヘラ状あるいは櫛状の施文具を使用しているとみられる。底部に近い破片で下部がやや肥厚化している。

17は第Ⅱ地区C-4出土で、Ⅳ層（暗褐色土層）に包含されていた。丸底に近い尖底で、胎土に混入される石英・長石等は少量で、色調は褐～黑色を呈し、焼成は普通である。器面には文様はみられず、内面の底にかけてヘラ状の工具で調整を施している。

18は第Ⅳ地区D-5出土で、第Ⅳ地区Ⅲ層（黒色土層）に包含されていた。胎土には比較的多く石英・長石等を混入し、色調は表面が赤褐色～黒褐色、内面が褐色を呈し、焼成は普通である。器面には貝殻条痕文を施文し、底部に近い破片で、底部にかけて器壁は肥厚化している。

19は第Ⅰ地区C-3出土で、出土層が判然とせず一括してとり上げたものである。胎土には石英・長石等を混入し、色調は黄褐色を呈し、焼成は普通である。推定径は破片の下部で18cmと比較的大きな平底の底部へと続くものと思われる。器面には条痕文を施している。

「第V章　まとめ」において触れる鹿児島県桑ノ丸遺跡・下剣峯遺跡・村原（桜ノ原）遺跡など近年の比較的良好な縞文前期遺跡からの出土土器に以上の土器の類例は何らかの形で求めることが出来る。なお、宮崎県下においては今後の蓄積と類例化に待たなければならないが、こうした鹿児島県下の類例を基にこれらの土器の位置付けを考えていく必要を感じる。

(2) 石器

石器では、石鎚のほか、敲石・磨石・凹石・石斧・剥片石器などが出土しており、又先土器時代の遺物と思われる尖頭器が出土している。

石鎚(第25図・図版14)

石鎚は未成品と思われるものも含めて83点が出土しているが、その内21点の出土が第Ⅱ地区に集中している。

24・25・26は未成品と思われるが、24は石鎚とみれば凸基式に入るが、ここでは異形の石器としてみなしておきたいと思う。石鎚の形式には平基式(5・9・20・23・32)と凹基式(1・3・4・8・10・11・13~17・19・21・22・27~31・33)があり、凹基式が主体を占めている。6・12・18などは、基部へのノッチが浅いが、調整加工の施し方からみて凹基式に含まれられようと思う。又、それぞれの形状に応じて二等辺三角形状(6・8・9・11~19・21・27・30・31・33)、正三角形状(1・4・5・20・28・32)、五角形状(3・10)、ハート形状(29)などに分類することが出来る。

石質は黒曜石が主で、他にチャート(3・10・29・30)、頁岩(5)などがある。又、黒曜石には気泡が多く白済したもの(1・13・31・33)と透明度の強いもの(6・8・11・17・32)などがあり、少なくとも二種類の原産地の異なる黒曜石が使用に供されたことが想定出来る。

剝離・調整の特徴としては、3・32が薄く剝離された剥片の反りをもつ形状を比較的残しており、3では基部のノッチと片側の刃部に調整加工がみられるが、一方の刃部は剥片の銳利な部分をそのまま刃部として残している。一方32では、三辺に細かな両面からの調整加工が施されており、基部にあたる一辺はわずかに内湾している。他は4・13・15などが原剝離面を比較的多く残し、刃部に微細剝離加工が施されているが、おおくのものは精緻な調整加工が施されている。

欠損部分は、先端部分を欠損するものが9・16・21・22で、脚部を欠損するものが2・7・11・13・15で、8は片側部にわずかな欠損がみられる。

これらの石鎚はいずれも縄文前期の遺物と考えられるが、5地区の内出土土器が相対的に少なかった第Ⅱ地区にその出土が集中しているという現象は注目される。同地区からはまた黒曜石の剥片等が多く出土している。〈場〉の想定をうんぬんするには資料が限られているが、石鎚の使用、あるいはその製作に関する〈場〉を想定することも可能かと思われる。

石斧(第26図1・2・3・4、図版15)

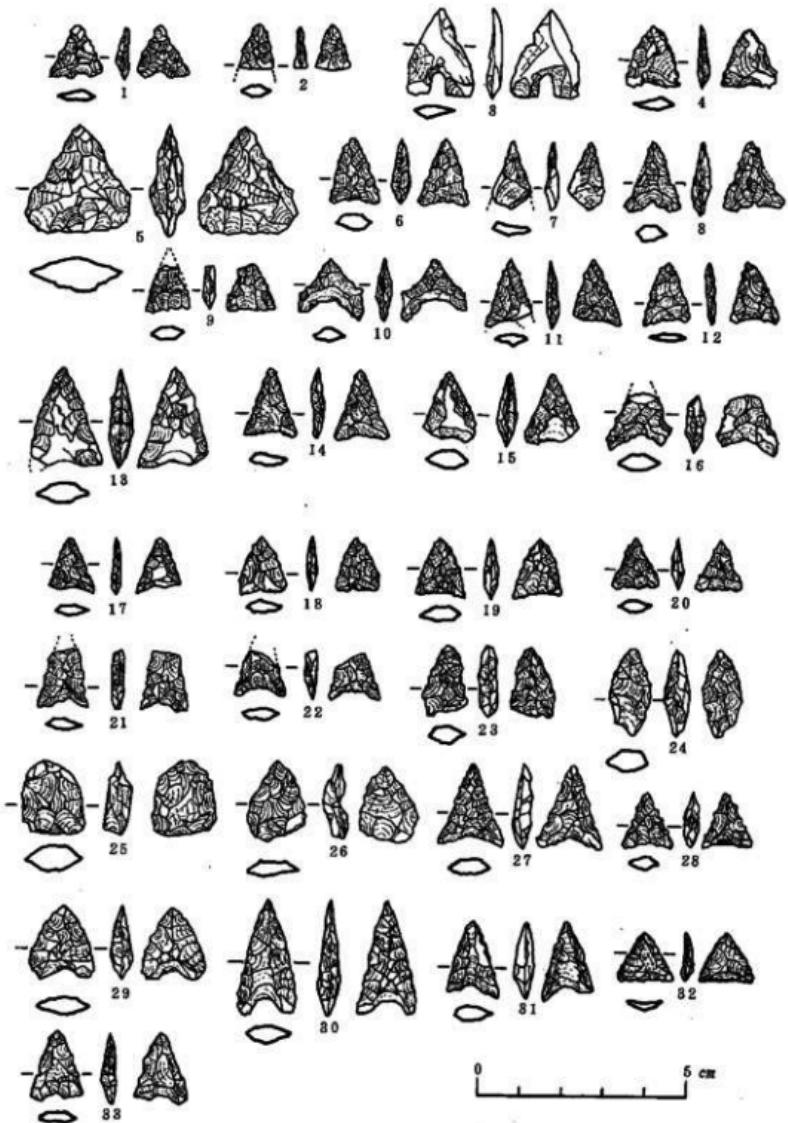
石斧では、磨製・打製の二種類が4点出土している。

1は砂岩製の磨製石斧で、第Ⅰ地区C-4の出土である。表面は風化が著しく、やや剝離がみえていたために使用痕の確認は困難であるが、片側部の中途にわずかであるが凹みが生じているのが観察される。それが片側部にのみみられることで着柄による結索痕か手ずれとも断定しかねるが、製作における凹みとも思われない。全長7.6cm、最大幅4.4cm、厚さ1.4cmである。

2はチャート製の磨製石斧で、第Ⅱ地区C-2の出土である。剥片を使用したもので、側面よりみる

第7表 石鎚一覧表(単位cm)

第25番番号	出土地区	全長	最大幅	厚さ	石質	形式	備考
1	I・C-7	1.2	1.2	0.4	黒曜石	凹基式	
2	I・C-7	(1.1)	(0.8)	0.8	〃	—	脚部欠損
3	I・B-4	2.1	1.6	0.8	チャート	凹基五角形	
4	I・C-5	1.5	1.2	0.2	黒曜石	凹基式	
5	I・D-5	2.6	2.3	0.9	頁岩	正三角形	
6	I・C-5	1.6	1.2	0.4	黒曜石	凹基式	
7	I・C-5	(1.6)	(0.9)	0.8	〃	—	脚部欠損
8	I・C-1	1.7	1.3	0.4	〃	凹基式	
9	I・A-5	(1.1)	1.1	0.8	〃	(平基二等式)	先端欠損
10	I・C-1	1.4	1.6	0.8	チャート	凹基五角形	
11	I・C-1	1.6	(1.1)	0.8	黒曜石	凹基式	一部欠損
12	I・B-8.4	1.5	1.1	0.2	〃	〃	
13	I・C-7	2.3	(1.7)	0.5	〃	〃	一部欠損
14	I・B-8	1.7	1.8	0.8	〃	〃	
15	I・C-8	1.6	(1.8)	0.4	〃	〃	
16	I・C-7	(1.4)	1.5	0.5	〃	〃	先端欠損
17	I・B-6	1.3	(1.0)	0.2	〃	〃	
18	I・C-7	1.3	1.1	0.8	〃	平基式	
19	I・B-8.4	1.4	1.2	0.4	〃	〃	
20	I・B-4	1.2	1.2	0.2	〃	〃	
21	I・B-8	(1.4)	1.2	0.8	〃	凹基式	先端欠損
22	I・B-5	(1.1)	1.2	0.8	〃	〃	〃
23	I・B-8	1.7	1.1	0.5	〃	平基式	
24	I・C-6	2.1	1.0	0.6	珪石	—	末成品
25	I・B-4	1.7	1.5	〃	黒曜石	—	〃
26	I・C-6	1.9	1.4	0.5	〃	—	〃
27	I・A-2	2.0	1.6	0.4	〃	凹基式	
28	I・A-8	1.8	1.2	0.8	〃	〃	
29	I・A-2	1.7	1.5	0.5	チャート	ハート式	
30	N・C.D-8.4	2.7	1.4	〃	〃	凹基長辺三等辺	
31	N・D-7	1.9	1.2	〃	黒曜石	凹基式	
32	N・B-6	1.8	1.0	0.2	〃	正三角形	
33	N・C.D-8.4	(1.7)	1.2	0.4	〃	凹基式	



第25図 石器実測図(1) 石鏃

と反りがみられる。磨研は一応全面にゆきわたっているが、割り出した石材そのものが不整形で、いわゆる局部磨製のものとみられる。使用痕は認められず、刃先には横位の、両面にはいくぶん斜位の磨研の際の微細な擦痕がみられる。全長 8.0 cm, 最大幅 3.9 cm, 厚さ 1.1 cm である。

3 は砂岩製の磨製石斧で、第Ⅳ地区 D-7 の出土である。磨研は丁寧に両面に施されている。刃部先端部を中心に細かく磨耗がみられるほか、両側部に結索痕あるいは手ずれと思われる磨耗が観察される。全長 8.4 cm, 最大幅 4.6 cm, 厚さ 1.9 cm である。

4 は砂岩製の打製石斧であるが、1 と同様風化が著しい。原石からの剥片を使用し、片面には自然面を残しており、刃部および両側は粗く割り出されている。刃部先端部は著しく磨滅している。全長 10.8 cm, 最大幅 5.3 cm, 厚さ 2.5 cm である。

凹石(第 26 図 5・6, 図版 15)

5 は赤褐色を呈する砂岩製のもので、径 8.6 × 9.1 cm, 凹み部分での厚さ 4.2 cm である。6 も同じく赤褐色を呈する砂岩製のもので、径 8.8 × 9.9 cm, 凹み部分での厚さ 8.7 cm である。6 は両面に凹みをもつ。共に第Ⅱ地区 C-6 の出土である。

磨石(第 26 図 7~9, 図版 15)

すべて青灰色を呈した石英斑岩製のもので、7・8 が第Ⅳ地区 C, D-8, 4, 9 が第Ⅰ地区 C-7 の出土である。7 は径 9.6 × 9.9 cm, 厚さ 5.6 cm, 8 は径 1.0.2 × 1.0.8 cm, 厚さ 4.7 cm, 9 は径 9.8 × 1.0.5 cm, 厚さ 6.8 cm である。

敲石(第 27 図 5, 図版 14)

いくぶん茶褐色をした石英斑岩製で、第Ⅰ地区 C-4 出土である。長径 8.1 cm, 短径 6.7 cm, 厚さ 4.8 cm で、両側が敲き潰されている。

石鍬(第 27 図 7, 図版 14)

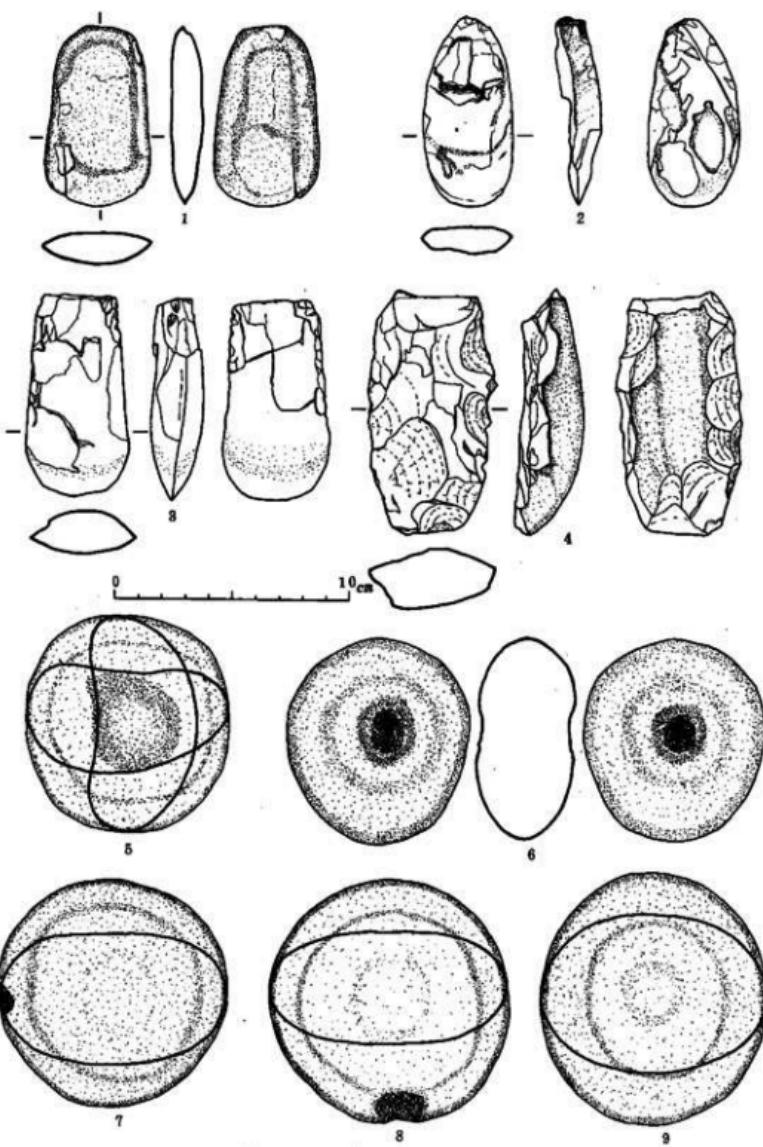
赤褐色を呈した砂岩製のもので、第Ⅱ地区 C-1 のピット上部の出土である。研磨して凹みをつけた磨製の石鍬である。長径 5.8 cm, 短径 3.7 cm, 厚さ 1.8 cm, 重さ 4.4 g である。

彫器(第 27 図 1, 図版 14)

縦長の剥片を使用したチャート製で、第Ⅰ地区 C-4 の出土である。片面に第一次剥離面を残し、両側は剥離の鋭利な部分をそのまま残している。彫刻面は磨滅が著しいが、彫刻面加工と思われる微細な剥離を認めることが出来るため、彫器として取り扱っておく。全長 8.2 cm, 最大幅 2.2 cm, 厚さ 1.0 cm である。

ナイフ形石器(第 27 図 3, 図版 14)

頁岩製で第Ⅰ地区 C-4 の出土である。断面は三角形を呈し、片側は剥片の鋭利さをそのまま利用し



第 I 地区 1 · 9, 第 II 地区 2 · 5 · 6

第 26 図 石器実測図(2) 石斧・凹石・磨石

たナイフ形石器とみられ、片側は刃溝し加工が行なわれている。全長 5.5 cm, 最大幅 3.0 cm, 厚さ 1.4 cmである。

剝片石器（第 27 図 4, 図版 14）

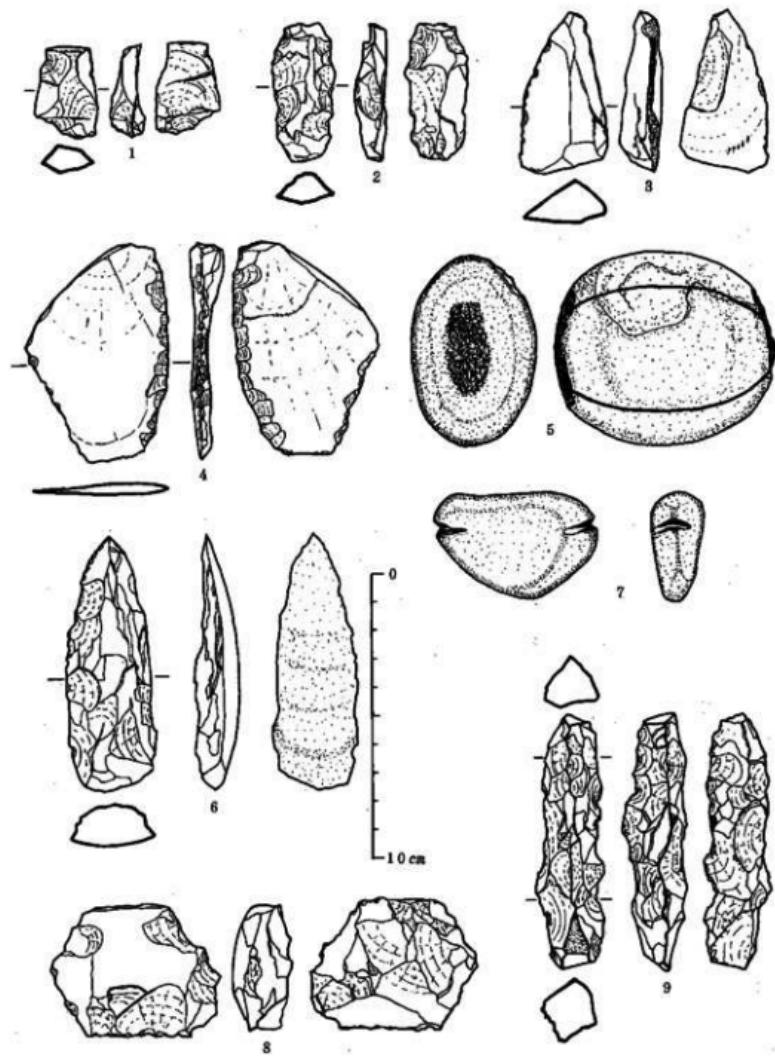
不均質な頁岩製で、第 I 地区 D-5 の出土である。剝片から打ちかいた剝片を使用しており、両面に打痕がみられる。両側に微細な剝離加工を施し刃部を作り出している。全長 7.4 cm, 最大幅 5.1 cm, 厚さ 0.4 cm の薄いものである。

石核石器（第 27 図 8, 図版 14）

チャート製で、第 V 地区 G-1 の出土である。剝離は粗いが刃部が作り出されており、ここでは一応石核石器としてとり上げておいた。長径 5.9 cm, 短径 4.6 cm, 厚さ 2.1 cm である。

尖頭器（第 27 図 2・6・9, 図版 14）

2 は頁岩製で第 I 地区 D-5 の出土である。断面は三角形状を呈し、その三面に剝離加工がみられる。全長 3.2 cm, 最大幅 2.2 cm, 厚さ 1.0 cm である。6 は砂岩製で第 II 地区 C-5 の出土である。片面には自然面を残した反りをもつ剝片を使用している。片面剝離で、全長 9.1 cm, 最大幅 2.8 cm, 厚さ 1.5 cm である。9 は頁岩製で第 V 地区 A-1 の出土である。出土層は疊層上面にあたり、先土器時代の遺物と考えられる唯一のものである。断面は三角形状を呈し、いわゆる三稜尖頭器と呼ばれるものに相当する。剝離加工は三面にわたり粗く行われている。全長 8.9 cm, 最大幅 2.8 cm, 厚さは 1.7 ~ 2.2 cm である。



第I地区 1～5、第II地区 6・7、第V地区 8・9

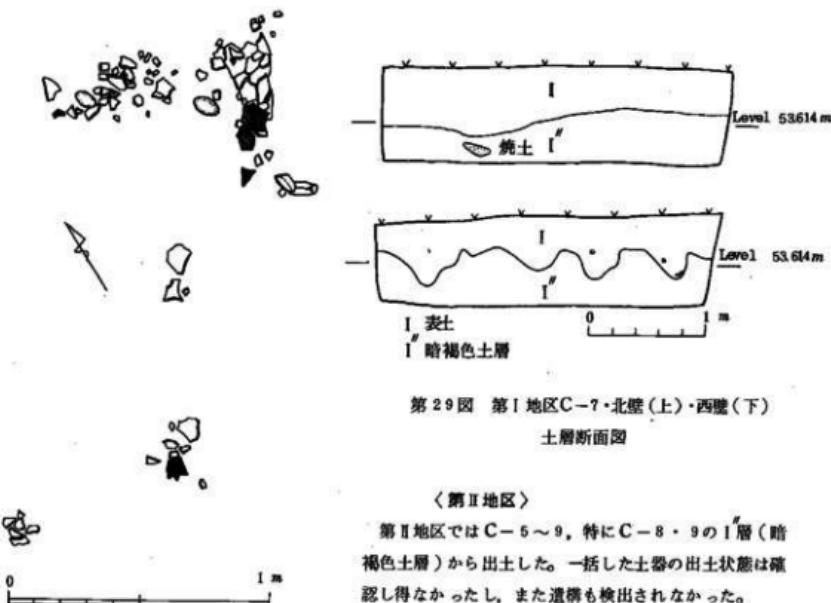
第27図 石器実測図(3) 蔽石・尖頭器・石錐など

第Ⅳ章 辻遺跡出土の土師器と須恵器について

1 土師器と須恵器の出土状態

〈第Ⅰ地区〉

第Ⅰ地区ではC-7・9・11で出土しているが、特にC-7に集中している。C-7において、I層（暗褐色土層）の下部で1個体の土師器の壺がつぶれた状態で検出されたため、これと同レベルでの土器の出土状況を確認した（第28図）。出土した土器は、土師器の壺7（第30図5・6・17・18・20・29・30）、高壺1（33）、甕3（35・38・39）、織布压痕土器（第31図55～58）、須恵器の壺2（第34図1・2）である。また土層断面図（第29図）で示されているように北壁のI層（暗褐色土層）に焼土が含まれている。そこで何らかの遺構として調査したが、遺構としては確認し得なかった。しかし、この土器は一括した資料である。C-9・11出土の土師器はI層から出土している。



第29図 第Ⅰ地区C-7・北壁（上）・西壁（下）
土層断面図

〈第Ⅱ地区〉

第Ⅱ地区ではC-5～9、特にC-8・9のI層（暗褐色土層）から出土した。一括した土器の出土状態は確認し得なかったし、また遺構も検出されなかった。

第28図 第Ⅰ地区C-7の土器の出土状態

〈第Ⅲ・Ⅳ地区〉

第Ⅲ・Ⅳ地区からは、土師器が1層・3層褐色土層上面から8点出土した。第Ⅴ地区からは全く出土しなかった。

2 土師器

東丘陵地の第Ⅰ・Ⅱ地区出土の土師器を総括して述べることにする。

坏 (第30図1~31, 図版16の1~31)

坏は、底部の切り離し手法がヘラ切りであるA類と底部の切り離し手法が不明であるが平底であるB類に分かれる。A類は丸底に近いA-1類と、平底に近く底部の厚いA-2類に更に分かれる。B類は体部と底部の境が甘いB-1類と、体部と底部の境が明瞭で体部に横ナデを施しているB-2類に更に分かれる。

坏A-1類 (第30図1, 図版16-1)

(1)は、口径12.6cm, 底径7.6cm, 器高4.2cmを測り、底部はヘラ切り離し後、部分的にナデを施す。器面には横ナデを、内底には指先によるナデを施す。体部はゆるやかに外反し、口唇部先端はやや丸味をおびる。色調は黄褐色を呈し、胎土は精選され、焼成は良好である。

坏A-2類 (第30図2~4, 図版16-2~4)

(2)は、口径10.4cm, 底径5.4cm, 器高4.6cmを測り、底部はヘラ切り離し後、部分的にナデを施す。器面には横ナデを施し、内底は平坦にナデ調整する。体部は垂直気味に外反し、口唇部先端は丸味をおびる。底部と体部の境は明瞭で、底部の厚さは1cmと厚い。平底に近い。色調は赤褐色を呈し、胎土には少量の砂を含み、焼成は良好である。(5)は、底径6.4cmで、色調は赤褐色を呈する。胎土には少量の砂を含み、焼成は普通である。(4)は底部で、色調は赤褐色である。胎土には多量の砂を含み、焼成は普通である。(5)は、ヘラ切り離しの底部で、器壁が薄く平底である。赤褐色を呈し、少量の砂を含み、焼成は普通である。(5)はA-1類、A-2類にも属さない。

坏B-1類 (第30図6~11, 図版16-6~11)

(6)は、口径14.0cm, 底径8.8cm, 器高8.7cmを測り、底部の切り離し手法は不明であるが平底である。器面にはナデを、内底には指先によるナデを施す。体部と底部の境は甘い。体部はゆるやかに外反し、口唇部で再度外反する。口唇部先端はやや尖り気味である。色調は赤褐色を呈し、胎土には多量の砂を含み、焼成は普通である。(7)は底径7.9cmの底部で、体部と底部の境は甘く、体部の内外面ともナデを施す。色調は黄褐色を呈し、胎土には多量の砂を含み、焼成は普通である。(8)は底径8.0cmの平底の底部で、底部と体部の境は甘く、体部の内外面ともナデを施す。(6)・(7)より器壁が厚い。体部に「+」のヘラ記号を有する。色調は黄褐色を呈し、胎土には多量の砂を含み、焼成は普通である。(9)・(10)・(11)は底部片で、坏B-1類に属する。

坏B-2類 (第30図12~14, 図版16-12~14)

(12)は、口径12.4cm, 底径7.3cm, 器高8.9cmを測り、底部の切り離し手法は不明であるが平底である。底部と体部の境は明瞭である。器面には横ナデを施し、内底は平坦にナデ調整している。体部は外反し、口唇部先端は尖り気味である。体部に「+」のヘラ記号を有する。色調は赤褐色を呈し、胎土

には少量の砂を含み、焼成は普通である。(13)は底径 6.6 cm で、底部の切り離しは不明であるが平底である。底部と体部の境は幾分甘い。器面には横ナデを施し、内底は平坦にナデ調整している。色調は赤褐色を呈し、胎土には多量の砂を含み、焼成は悪い。(14)は底部を欠いており、器面には横ナデを施す。色調は黄褐色を呈し、胎土には多量の砂を含み、焼成は普通である。

(15)～(28)は壺の口縁部である。(第 30 図 15～28、図版 16-15～28) (15)は外面は横ナデ、内面はナデを施し、口唇部は内外面とも強い横ナデを施し、口唇部先端は丸味をおびる。(16)は内外面ともナデを施し、器壁は薄く、口唇部先端はやや尖り気味である。(17)は内外面ともナデを施し、口唇部先端はやや尖り気味である。(18)は内外面ともナデを施し、器壁は薄く、口唇部先端は尖る。(19)は内外面ともナデを施し、口唇部の外面は強い横ナデを施し、口唇部先端は丸い。(20)は内外面ともナデを施し、器壁は薄く、口唇部先端はやや尖り気味である。(21)は内外面ともナデを施し、器壁は薄く、口唇部先端は尖る。(22)は内外面ともナデを施し、口唇部先端は丸い。(23)は内外面ともナデを施し、口唇部先端は丸い。(24)は内外面ともナデを施し、口唇部先端は丸い。(25)は内外面ともナデを施し、口唇部先端直下に強い横ナデを施す。(26)は内外面ともナデを施し、口唇部先端は丸い。(27)は内外面ともナデを施し、口唇部先端は丸い。(28)は内面はナデを、外面は横ナデを施し、口唇部先端は丸い。(29)～(31)は底部の切り離し手法は不明であるが、平底である。しかし、A-1 類から B-2 類には属さない。(29)は底部と体部の境はなく内外面ともナデを施す。(30)は(29)と同タイプであるが、底部が薄い。(31)は底部と体部の境に強い横ナデを施し、内外面ともナデを施す。底部は 7 mm と厚い。(図版 16-29、図版 17-30・31)

器高 4 2	器高			口径		
				42	12	46
2				30		
2						
1.8	■2	3	13			
■6	8	7			■12	
		10			■6	

第 8 表 第 I・II 地区出土土器(壺)の法量

番号	法量(cm)			底部の切り離し	法量比 (底径 ÷ 口径)	備考
	口径	底径	器高			
1	1.2.6	7.6	4.2	ヘラ切り	0.60	A-1
2	1.0.4	5.4	4.6	ヘラ切り	0.52	A-2
3		6.4		ヘラ切り		A-2
6	1.4.0	8.8	8.7	不明(平底)	0.63	B-1
7		7.9		不明(平底)		B-1
8		8.0		不明(平底)		B-1 (ヘラ記号)
12	1.2.4	7.3	3.9	不明(平底)	0.59	B-2 (ヘラ記号)
13		6.6		不明(平底)		B-2

第9表 第I・II地区出土土器(坏)の計測表

塊 (第80図32, 図版17-32)

(32)は塊の口縁部で、直立気味に外反している。口唇部先端は丸く、内外面ともナデを施す。色調は黄褐色を呈し、胎土には多量の砂を含み、焼成は悪い。

高坏 (第80図33-34, 図版17-33-34)

(33)は高坏の脚部で、外面はナデを施し、上位には非常に浅い凹線がある。内面は横ナデを施し、色調は黄褐色を呈する。胎土には多量の砂を含み、焼成は普通である。(34)は高坏の坏部と脚部の接合部で、風化が著しいために調整は不明である。色調は赤褐色を呈し、胎土には多量の砂を含み、焼成は普通である。

壺 (第80図35-48, 図版17-35-48)

(35)は、口径2.6-4cmの長胴の壺で、口唇部先端は平坦である。口縁部の内外面ともナデを施し、肩部に斜め方向のハケ目を施す。色調は黄褐色を呈し、胎土には多くの砂を含む。焼成は部分的に良好な所もあるが、全体的にあまり良くない。(36)～(47)は、壺の口縁部の破片で、口径を復原できるものは1つもない。(36)は内外面ともナデを施し、口唇部先端は平坦に近い。(37)は内外面ともナデを施し、器壁は薄く、口唇部先端はやや丸い。(38)は内外面ともナデを施し、口唇部先端は厚くやや丸い。(39)は内外面ともナデを施し、口唇部先端は丸い。(40)は内外面ともナデを施し、口唇部先端は平坦である。(41)は器壁は厚く、外面はヘラ磨きされ、その他の部位はナデを施し、口唇部先端は凹状を呈する。(42)は内面はハケ目を、その他の部位はナデを施し、口唇部先端は凹状を呈する。(43)は内面はハケ目を、その他の部位はナデを施し、口唇部先端は平坦に近い。(44)は内外面ともナデを施し、口唇部先端は笠状の道具で平坦にされ、その際の粘土が残っている。(45)は内外面ともナデを施し、口唇部先端はやや丸い。(46)～(48)は壺の底部である。(46)は底径5.4cmの上げ底の底部で、内外面ともナデを施す。(47)は平底の底部で内外面ともナデを施す。(48)は底部の破片で、内外面ともナデを施す。

黒色土器 (第80図49-52, 図版17-49-51)

黒色土器は、炭素の吸着方法の違いで内面のみを焼すA類と内外面を焼すB類とに分かれる。⁽¹⁾(49)～(51)はA類に、(52)はB類に属する。(49)は壺の口縁部で内面は黒色で研磨され、外面は赤褐色でナデを施す。胎土は精選され、焼成は良好である。(50)は壺の口縁部で、口縁は直立気味に外反し、口唇部先端は丸い。内面は黒色で研磨され、外面は黄褐色でヘラ磨きを施す。胎土は精選され、焼成は良好で

ある。(51)は碗の口縁部で、口唇部先端は平坦で、外面に強い横ナデを施す。内面は黒色で研磨され、外面は黄褐色でナデを施す。胎土は精選され、焼成は良好である。その他のA類の破片としては、第I地区C-7で3点、第II地区C-9で2点出土している。各々、(49)、(51)と同一個体のものである。(52)は内外面とも黒色で、内外面とも研磨されている。胎土は精選され、焼成は良好である。当遺跡ではB類は1点しか出土していない。

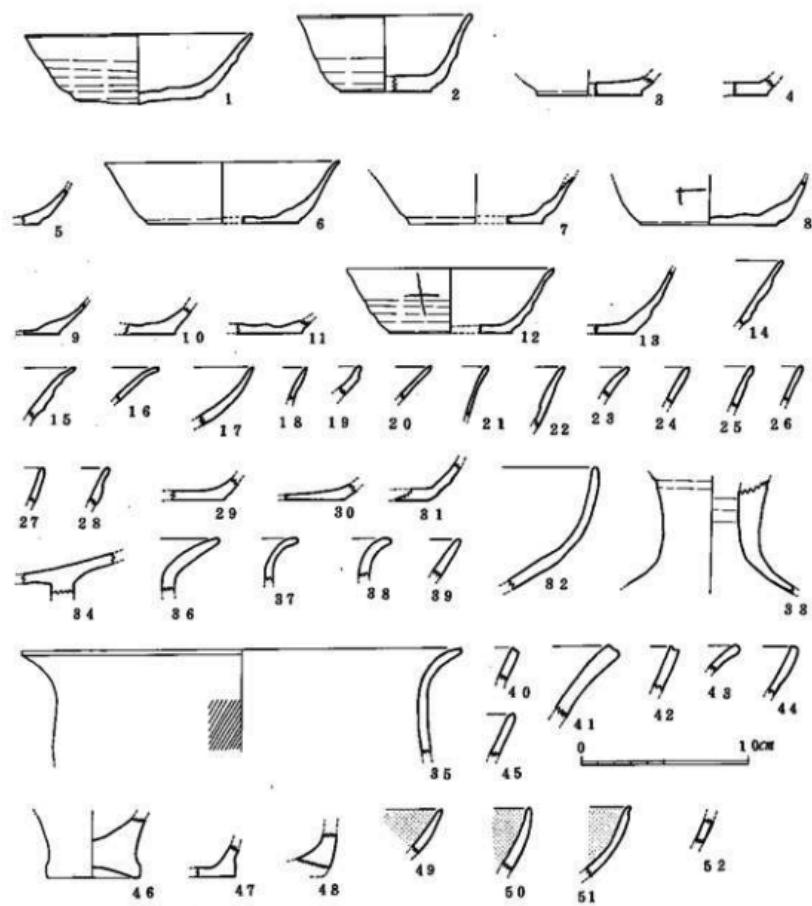
織布压痕土器 (第81図53~61、図版18-53~61)

第I地区C-7から多数出土している。(53)は口縁部を肥厚させており、口唇部先端は平坦である。外面には凹凸があり、内面は風化著しいために織布压痕は完全に消失している。色調は黄褐色を呈し、胎土には大粒の砂を含み、焼成はあまり良くない。(54)は口縁部になるに従って薄くなり、口唇部先端を幾分内湾させている。外面には凹凸があり、内面は風化著しいために織布压痕は口唇部内面に若干残っている程度である。色調は赤褐色を呈し、胎土には大粒の砂を含み、焼成はあまり良くない。(55)は全体的に器壁が厚く、口唇部先端を幾分内湾させている。口唇部先端は平坦に近い。口唇部内面には指の押痕痕が1ヶ所ある。外面には凹凸があり、内面には1cm間の経糸・緯糸とも7~8本の織布压痕がある。色調は赤褐色で、胎土には大粒の砂をかなり含み、焼成はあまり良くない。(56)は、1cmと全体的に器壁の厚い口縁部で、口唇部先端は平坦である。内面には1cm間の経糸・緯糸とも7~8本の織布压痕を施す。色調は赤褐色を呈し、胎土には大粒の砂を含み、焼成はあまり良くない。(57)は1.8cmと全体的に器壁の厚い口縁部で肥厚しており、口唇部先端は平坦である。外面には凹凸があり、内面は風化著しいために織布压痕は完全に消失している。色調は黄褐色を呈し、胎土には大粒の砂を含み、焼成はあまり良くない。(58)は器壁の薄い口縁部で、口唇部先端は平坦である。内面は風化著しいために織布压痕は消失している。色調は黄褐色を呈し、胎土には少量の砂を含み、焼成はあまり良くない。(59)~(60)は第I地区C-7で出土した。(59)は肥厚した口縁部で、口唇部先端を内側につまみ出している。口唇部先端は平坦に近い。内面は風化著しいために織布压痕は完全に消失している。色調は黄褐色を呈し、胎土には少量の砂を含み、焼成はあまり良くない。(60)は器壁が厚い口縁部で、口唇部先端を内側に幾分つまみ出している。口唇部先端は平坦である。内面には1cm間に経糸・緯糸とも7~8本の織布压痕を施す。色調は黄褐色を呈し、胎土には大粒の砂を含み、焼成はあまり良くない。(61)は口唇部の断面が三角形を呈し、口唇部先端は平坦である。内面は風化著しいために織布压痕は完全に消失している。色調は赤褐色を呈し、少量の砂を胎土に含んで、焼成はあまり良くない。織布压痕土器の器形は、国分寺跡(西都市大字三宅字国分寺)で出土した、外面にそぎおとされた断面三角形の口唇部を持つ口徑⁽¹⁰⁾1.8~1.4、高さ9~11cmの尖底或いは丸底の碗形土器と同様なものと推定される。

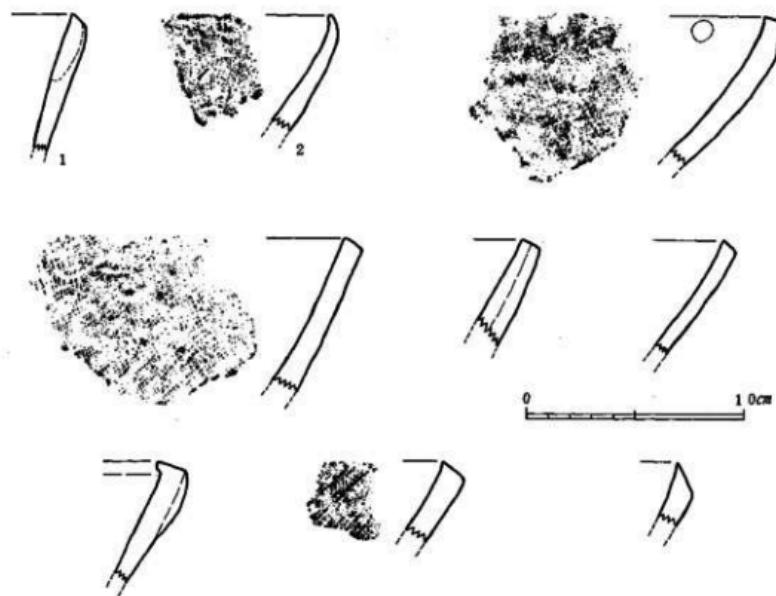
第10表 第I・II地区出土土器一覧表

番号	出土地	器種	器部	色調	胎土	焼成	備考
1	I-C-8	坏	完形	黄褐色	精選	良好	A-1類
2	I-C-5~9	坏	略完形	赤褐色	少量の砂	良好	A-2類
3	I-B-4	坏	底部	赤褐色	少量の砂	普通	A-2類
4	I-C-9	坏	底部	赤褐色	多量の砂	普通	A-2類
5	I-C-7	坏	底部	黄褐色	少量の砂	普通	
6	I-C-7	坏	略完形	赤褐色	多量の砂	普通	B-1類
7	I-C-7	坏	口縁欠	黄褐色	多量の砂	普通	B-1類
8	I-C-7	坏	口縁欠	黄褐色	多量の砂	普通	B-1類・ヘラ記号有
9	I-C-5~9	坏	底部	赤褐色	多量の砂	普通	B-1類
10	I-C-5~9	坏	底部	黄褐色	多量の砂	普通	B-1類
11	I-C-7	坏	底部	赤褐色	精選	普通	B-1類
12	I-C-7	坏	略完形	赤褐色	少量の砂	普通	B-2類・ヘラ記号有
13	I-C-5~9	坏	口縁欠	赤褐色	多量の砂	悪い	B-2類
14	I-C-8	坏	底部欠	黄褐色	多量の砂	普通	B-2類
15	I-C-7	坏	口縁	赤褐色	精選	普通	
16	I-C-7	坏	口縁	赤褐色	多量の砂	普通	
17	I-C-7	坏	口縁	黄褐色	多量の砂	普通	
18	I-C-7	坏	口縁	赤褐色	精選	良好	
19	I-C-7	坏	口縁	黄褐色	精選	普通	
20	I-C-7	坏	口縁	黄褐色	多量の砂	普通	
21	I-C-5~9	坏	口縁	赤褐色	多量の砂	普通	
22	I-C-5~9	坏	口縁	黄褐色	少量の砂	普通	
23	I-C-5~9	坏	口縁	黄褐色	精選	普通	
24	I-C-5~9	坏	口縁	黄褐色	精選	普通	
25	I-C-5~9	坏	口縁	黄褐色	多量の砂	普通	
26	I-C-5~9	坏	口縁	黄褐色	多量の砂	普通	
27	I-C-9	坏	口縁	赤褐色	精選	普通	
28	I-C-9	坏	口縁	赤褐色	精選	普通	
29	I-C-7	坏	底部	黄褐色	精選	良好	
30	I-C-7	坏	底部	黄褐色	精選	良好	

番号	出土地	器種	器部	色調	胎土	焼成	備考
3 1	I-C-7	壺	底 部	赤 褐 色	精選	普通	
3 2	I-C-7	壺	底 部 欠	黄 褐 色	多量の砂	悪い	
3 3	I-C-7	高 壺	脚 部	黄 褐 色	多量の砂	普通	
3 4	I-C-7	高 壺	接合部	赤 褐 色	多量の砂	普通	
3 5	I-C-7	甕	口 頭部	黄 褐 色	多量の砂	普通	
3 6	I-C-7	甕	口 緑	赤 褐 色	大粒の砂	良好	好
3 7	I-C-7	甕	口 緑	赤 褐 色	大粒の砂	良好	好
3 8	I-C-7	甕	口 緑	赤 黄 褐 色	大粒の砂	悪い	好
3 9	I-C-7	甕	口 緑	黄 褐 色	精選	良好	好
4 0	II-B-4	甕	口 緑	赤 褐 色	多量の砂	悪い	好
4 1	II-C-5~9	甕	口 緑	赤 褐 色	少量の砂	良好	好
4 2	II-C-8	甕	口 緑	黄 褐 色	多量の砂	良好	好
4 3	II-C-8	甕	口 緑	黄 褐 色	少量の砂	普通	
4 4	II-C-8	甕	口 緑	黄 褐 色	精選	普通	
4 5	II-C-9	甕	口 緑	黄 褐 色	多量の砂	普通	
4 6	II-C-9	甕	底 部	黄 褐 色	大粒の砂	悪い	
4 7	II-C-5~9	甕	底 部	赤 褐 色	多量の砂	悪い	
4 8	II-C-5~9	甕	底 部	赤 褐 色	精選	普通	
4 9	II-C-7	壺	口 緑	黑	精選	良好	黑色土器A類
5 0	II-C-9	壺	口 緑	黑色・黄褐色	精選	良好	黑色土器A類
5 1	II 表採	壺	口 緑	黑色・黄褐色	精選	良好	黑色土器A類
5 2	I-C-7	壺	破 片	黑 色	精選	良好	黑色土器B類
5 3	I-C-7	鉢	口 緑	黄 褐 色	大粒の砂	不良	織布圧痕土器
5 4	I-C-7	鉢	口 緑	赤 褐 色	大粒の砂	不良	織布圧痕土器
5 5	I-C-7	鉢	口 緑	赤 褐 色	大粒の砂	不良	織布圧痕土器
5 6	I-C-7	鉢	口 緑	赤 褐 色	大粒の砂	不良	織布圧痕土器
5 7	I-C-7	鉢	口 緑	黄 褐 色	大粒の砂	不良	織布圧痕土器
5 8	I-C-7	鉢	口 緑	黄 褐 色	少量の砂	不良	織布圧痕土器
5 9	II-A-5	鉢	口 緑	黄 褐 色	少量の砂	不良	織布圧痕土器
6 0	II-C-5~9	鉢	口 緑	黄 褐 色	大粒の砂	不良	織布圧痕土器
6 1	II-C-5~9	鉢	口 緑	赤 褐 色	少量の砂	不良	織布圧痕土器



第30図 第I・II地区出土土器実測図



第8-1図 第I・II地区出土の織布圧窯土器

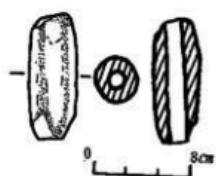
土鏡（第3-2図、図版18）

第II地区C-6で出土した円筒状の土鏡である。長さ3.8cm、最大幅1.5cm、孔径0.4cmを測る。重さ10g、両端の一部を欠損する。棒などに巻いて作ったものではない。色調は淡黄褐色を呈し、胎土には微細な石英などを含み、焼成は良好である。

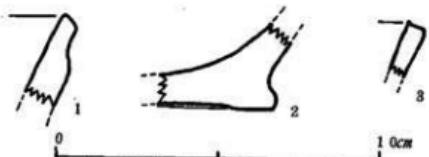
〈第III・IV地区〉

甕（第8-3図1～3）

(1)は口縁部の破片で、内外面ともナデを施す。口唇部先端は平坦で外面を強く横ナデする。器壁が厚く、色調は黄褐色を呈する。胎土には大粒の砂を含み、焼成は悪い。(2)は若干上げ底気味の底部である。



第3-2図
第II地区出土土鏡実測図



第3-3図 第III・IV地区出土の土器

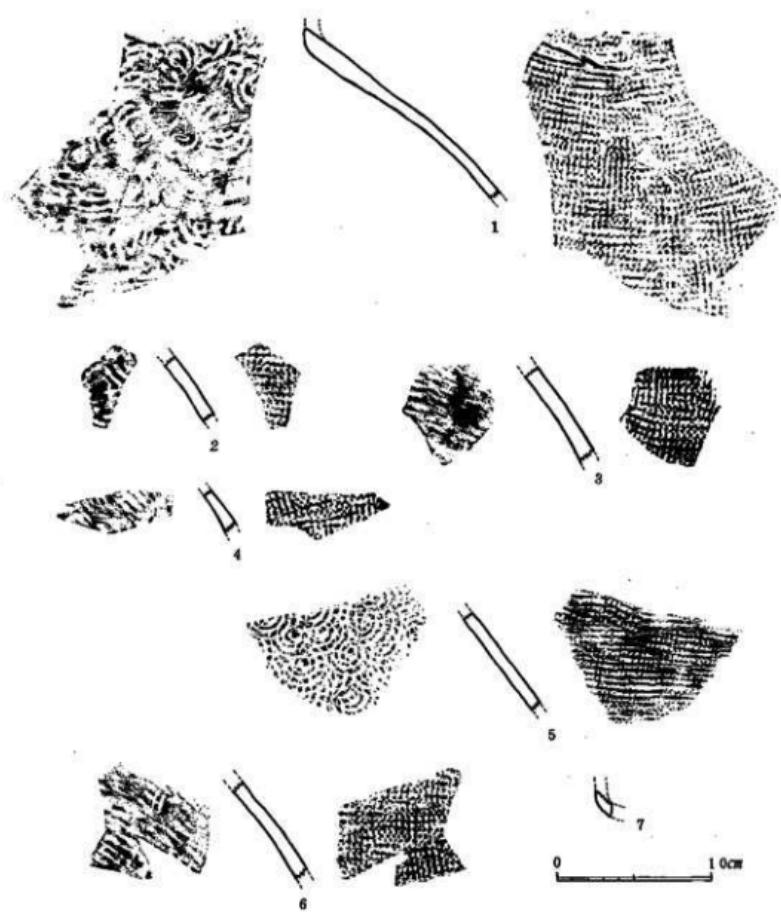
底部が張り出し、器壁・底部とも厚い。色調は黄褐色を呈し、胎土には多くの砂を含み、焼成は普通である。(1)・(2)とも第III地区のAトレンチのIII層(褐色土層)上面から出土した。(3)は第IV地区C・D 3・4から出土した口縁部の破片で、内外面ともナデを施す。口唇部先端は凹状を呈する。色調は黄褐色を呈し、胎土には多くの砂を含み、焼成は普通である。

3 犀噸器

当遺跡の東丘陵地の第I地区C-7で5点(第3-4図1~5), 第II地区C-5~9で2点(第3-4図6~7)出土した。すべて壺の破片である。

壺(第3-4図1~7, 図版18-1~5)

(1)は壺の肩部で口縁を欠いている。頸部が取れた部分に叩き目が残存しているので壺の器壁に内外から打圧を加えた後、口縁部を付けたものである。体部の内面は青海波状の叩きを施した後に、部分的に横方向にナデ消している。外面は格子目状の叩きを施す。色調は内面が淡黄褐色、外面が暗黄褐色である。胎土は精選されているが、焼成はあまり良くない。(2)は(1)と同一個体の壺の体上半部の破片である。内面は青海波状の叩きを施した後に、部分的に横方向にナデ消している。外面は格子目状の叩きを施す。色調は、内面が淡黄褐色を、外面が暗黄褐色を呈する。胎土は精選されているが、焼成はあまり良くない。(1)・(2)とも第3-8図の状態で出土した。(3)は壺の体上半部の破片で、内面には横位のゆるい曲線状の叩きを、外面には格子目状の叩きを施す。内外面とも淡黄褐色を呈する。(4)は体上半部の破片で、内面は横位のゆるい曲線状の叩きを施した後に、部分的にナデ消している。外面は格子目状の叩きである。(3)・(4)とも胎土は精選されているが、焼成は悪い。(5)は体上半部の破片で、内面に青海波状の叩きをシャープに施し、外面には格子目状の叩きを施す。また外面の叩きの上から笠状の道具で三条の沈線を施す。内面は青灰色で、外面は灰色である。胎土は精選され、焼成は堅硬である。(3)~(5)は第I地区C-7のI層・I'層から出土した。(6)は体上半部の破片で、内面は横位のゆるい曲線状の叩きを、外面には格子目状の叩きを施す。内面は黄褐色を、外面は青灰色を呈する。胎土は精選されているが、焼成は悪い。(7)は口縁を欠いた肩部の破片である。頸部がはずれた部分には叩き目を残しているので(1)と同じ製作技法で製作された壺である。内面はナデを施し、色調は淡黄褐色を呈する。胎土は精選されているが、焼成は悪い。(6)・(7)は第II地区的C-5~9のI層~I'層から出土した。



第3-4図 須恵器の実測図

4 小 結

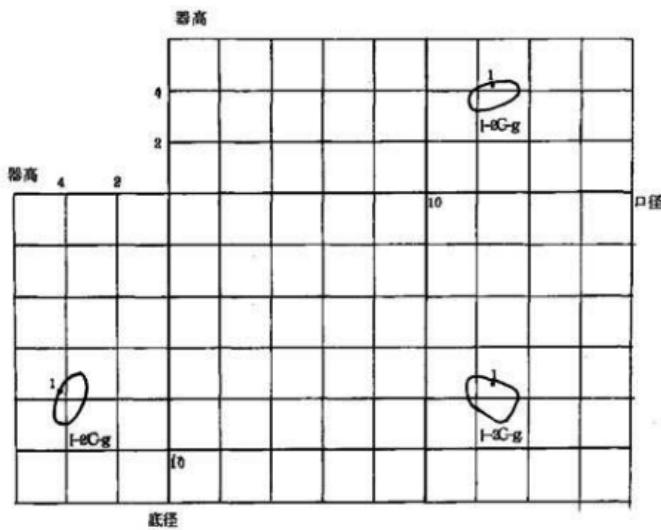
当遺跡で出土した土師器（黒色土器・織布压痕土器を含めて）と須恵器に関する問題点について述べる。問題点としては、土師器の時期、黒色土器と他の土器類との共伴関係、織布压痕土器と他の土器類との共伴関係、須恵器の時期と窯（生産地）の問題の4点が挙げられる。

第一に土師器の時期について述べる。7・8世紀の土器が、胎土・製作手法を異に明らかに生産地を異にしながらも、同一形態・同一法量をもっているのは、強い規制下で生産されたと考えられている。よって、この法量を標準にして歴史時代の土師器の編年を行なうのは有効な手段と考えられる。九州では、特に御笠川南条坊遺跡（福岡県筑紫郡太宰府町大字太宰府字平野・泉木）においてその編年が着々と進められている。宮崎では比較しうる歴史時代の土師器の有効な資料があまりないので、御笠川南条坊遺跡出土の土師器の法量に、当遺跡出土の土師器の法量をあてはめて当遺跡出土の土師器の時期を考えてみたい。この方法には地域差や時期差など種々な問題があるが、当遺跡出土の土師器の時期の1つの目安を求めるための一つの方法として試験的に採用したい。

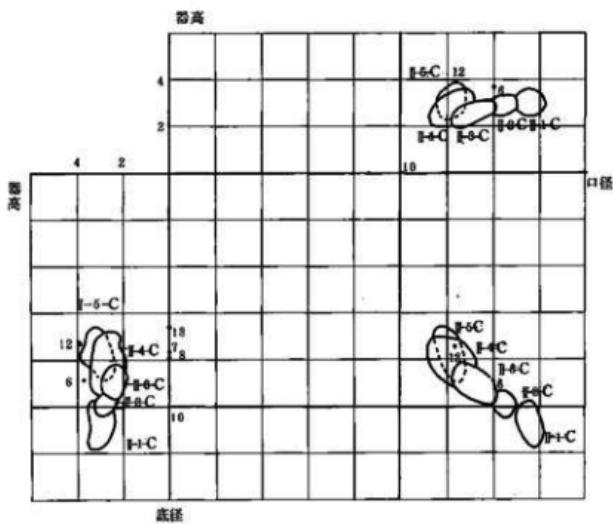
当遺跡では、まとまった資料としては坏がある。底部の切り離し手法と平底を基準にしてA-1類、A-2類とB-1類、B-2類に分けた。底径を推定復原した坏を含めて8個体あるが、口径・底径・器高の法量をすべてそろえている完形の坏はわずか4個体だけで、数量的には非常に制限されている。A-1類を代表する(1)は、御笠川南条坊遺跡のI-2C-g類に相当する（第11表）。I-2C類の推定年代は10世紀中頃～後半である。B類は平底であるので底部の切り離し手法が糸切りの可能性も考えられる。そこで糸切りと仮定して比較すると、口径と底径の法量では、B-1類を代表する(6)はII-8-C類に、B-2類を代表する(8)はII-5-C類に相当する。しかし、(6)、(8)とも器高が高いという点で不都合が生じる（第12表）。糸切りの出現の時期は、関東が早く8世紀中葉、畿内では遅れて奈良末。九州の大宰府では更に遅れて第9次調査のSE225の12世紀初頭、御笠川南条坊遺跡のSK312土盛上部・下部、SK888土盛出土のI-1類の土師器の12世紀中頃～後半とされている。以上のように糸切りへの技法的転換は、かなりの地域差がある。また高台付坏が1点も出土していない。大宰府では高台付坏の出現は、第18次調査のSE400出土の土師器の9世紀前半、御笠川南条坊遺跡のME13区下層出土のI-1A類の土師器の8世紀末～9世紀初頭である。以上の点から地域差・時期差などを加味して考えると、当遺跡出土の土師器の坏の時期は平安時代前半（9世紀～10世紀）頃とするのが妥当であろう。

黒色土器は、当遺跡ではA類8点、B類1点が出土している。黒色土器A類の出現は、大宰府では第18次調査のSE400の平安初期に、御笠川南条坊遺跡ではI-1A類の土師器と共におり8世紀末～9世紀初頭に求められている。A類の終末は、I-2C類の土師器と共に10世紀中頃から後半に求められている。B類は、御笠川南条坊遺跡では、I-1A類からI-2C類と共に8世紀末～10世紀末まで存続した。一方、大宰府政庁では10世紀中頃から11世紀後半まで存続した。黒色土器A類からも前述した坏の時期が首肯される。

織布压痕土器は、宮崎県内では尾平野洞窟（北諸県郡大字安久尾字平野）、下弓田遺跡（串間市大字南方字下弓田）、こまくりげ遺跡（小林市大字細野）、竹山遺跡（小林市大字細野字竹山）、国分寺跡（西都市大字三宅字国分寺）などで出土している。外面にそぎおとされた断面三角形の口唇部を持ち、



第11表 御笠川南条坊遺跡の土師器との法量対照表



第12表 御笠川南条坊遺跡の土師器との法量対照表

口径13~14、高さ9~11cmの尖底或いは丸底の焼形土器である。尾平野洞窟と下弓田遺跡は繩文時代の遺跡である。こまぐりげ遺跡では土師器の高台付塊、歴史時代の須恵器と共に竹山遺跡では土師器の高台付塊、黒色土器A類、墨書き土器と共に、国分寺跡では布目瓦、土師器の高台付塊と共にした。織布庄痕土器の点からも坏の時期が首肯される。

須恵器の時期については、壺の肩部と側部の破片だけで、時期の決め手である口頭部を欠いているので限定できない。しかし、叩きや製作技法の特徴からすれば歴史時代の須恵器である。当遺跡の東約25·^間kmにある松ヶ迫窯跡（宮崎市大字郡司分）は、奈良時代の須恵器の窯で、県内の知られている6ヶ所⁹例の窯の中では最古の窯である。他の窯は平安時代を中心に操業された窯である。当遺跡の須恵器は松ヶ迫窯跡で生産された可能性が強いと考えられる。

また、第28図の出土状態で見られるようにB-1類の土師器の坏と須恵器の壺、織布庄痕土器が共伴していたことからも首肯される。

以上の土師器の坏、黒色土器（特にA類）、織布庄痕土器、須恵器などの遺物の点、そして共伴関係などから総合的に判断すると、当遺跡出土の土器類は平安時代前半（9世紀～10世紀）頃の所産と考えられる。今後の資料の増加に期待したい。

（注）

- (1) 田中琢 「古代・中世における手工業の発達（窯業）一體内」（『日本の考古学』Ⅵ）昭和42年
稻垣晋也氏は、A類を第二類、B類を第一類としている。（稻垣晋也「瓦器焼の成立と展開 奈良時代黒色工人から奈良時代火鉢座への系譜」）（『日本考古学論叢』2）昭和43年
- (2) 茂山謙 「竹山遺跡」（『九州縦貫自動車道埋蔵文化財調査報告書』）昭和47年
- (3) 小笠原好彦 「7・8世紀の土器の生産」（『考古学雑誌』第6・5巻第3号）昭和54年
- (4) 前川成洋他 「福岡南北バイパス関係埋蔵文化財調査報告書」第2集 昭和50年
同上第8集 昭和51年、同上第6集 昭和52年、同上第8集 昭和54年
- (5) 岩永哲夫氏の御教示によれば、当遺跡の東へ約800mにある若宮田遺跡で糸切り底の皿が多数出土した。 岩永哲夫・日高正晴「若宮田遺跡・発掘調査報告書」 昭和54年
- (6) (4)と同じ
- (7) (4)と同じ
- (8) 糸切りには静止糸切りと回転糸切りがある。回転糸切りには前引き糸切り、まわし糸切り、離し糸切りがある。小川貴司 「回転糸切り技術の展開」（『考古学研究』第26巻第1号）昭54年
- (9) 大塚初重 「土師器・須恵器の編年とその時代」（『日本考古学を学ぶ』）昭和58年
- (10) 平城宮の主馬寮の井戸出土の須恵器である。高島忠平 「第47・50~52次発掘調査宮城西方官街地区」（『奈良国立文化財研究所年報』1969）昭和44年 しかし、阿部義平氏は畿内の製品ではないという。「ロクロ技術の復元」（『考古学研究』第18巻第2号）昭和46年
- (11) 横田賢次郎・森田勉 「大宰府出土の土師器に関する覚え書」（『九州歴史資料館研究論集』2）昭和51年 亀井明徳他 「大宰府史跡」 昭和46年
- (12) (4)と同じ
- (13) (11)と同じ

- 04 (4)と同じ
- 05 関東の土師器編年では国分式土器に相当する。杉原莊介「土師式土器集成 本編四」昭和48年
最近の研究では、国分式土器の存続期間が9世紀から10世紀代であることが明瞭になった。
(9)と同じ
- 06 森田勉「九州地方の瓦器類について—型式分類と編年試案一」(『考古学雑誌』第59巻第2号)昭和48年
- 07 (4)と同じ
- 08 (4)と同じ
- 09 (4)と同じ
- 10 (4)と同じ
- 11 小林久雄「宮崎県北諸県郡中郷村二俣尾平野洞窟住居址」(『考古学』第8巻第5号)昭和42年
年 小笠原好彦氏は編布土器の範疇に入れている。「縄文・弥生式時代の布」(『考古学研究』第17巻第3号)
- 12 鏡山猛「下弓田遺跡」(『日向遺跡総合調査報告』第1輯)昭和36年
- 13 田中茂「こまくりげ遺跡」(『九州縦貫自動車道埋蔵文化財調査報告』(1))昭和47年
- 14 (2)と同じ
- 15 (2)と同じ
- 16 (2)と同じ
- 17 石川恒太郎「宮崎県の考古学」昭和43年
- 18 小田富士雄「九州地方古代窯址(須恵器・瓦)地名表(第一稿)」(『九州考古学』29・30)
昭和41年 岩切池須恵窯址(宮崎市東郷南方、岩切池畔)(奈良)と記載されており。松ヶ迫
窯址と同じと考えられる。
- 19 福尾正彦「宮崎県内出土の須恵器—地下式横穴・高塚古墳出土例を中心として」(『古文化論
叢』第6集 昭和54年)松ヶ迫窯跡は奈良時代でも古い時期の所産であろうと指摘している。
- 20 この時期は、当遺跡出土の土器類、特に土師器の环の時期の1つの目安である。方法的には御笠
川南条坊遺跡の法量をそのまま導入しており、種々な問題を取り扱って得た結果である。今後の資
料の増加と、それに伴う検討作業を経て、当遺跡の再検討の機会を得たい。

第V章 まとめ

(1) 縄文前期土器の出土頻度について

発掘調査区は現況の畠地の段差に応じて便宜的に設定したものに過ぎなかったが、各地区から出土した各類の土器の出土頻度には、地区ごとにある種の傾向が看取されるようである。ただし、第Ⅱ・第Ⅴ地区は発掘区の狭小さから、比較の対象としては除外するしかない。

I～VI類に分類したタイプ別からみると、I類土器は第Ⅰ・第Ⅳ地区ではほぼI類の出土総数を二分し、II・III類土器は出土数の絶対量に不足するが、主には第Ⅰ・第Ⅱ地区から出土している。IV類土器は第Ⅰ地区で全体のほぼ8分の2が出土し、V類土器は第Ⅱ・第Ⅳ地区で出土数総数をほぼ二分し、VI類土器はおよそ第Ⅰ地区に限られるといって良い。こうした各類の出土頻度を各地区内での出土土器全体に対する割合でみていくと、第Ⅰ地区ではI・II・VI類の各土器に出土が集中し、第Ⅱ地区ではI～V類まで比較的出土量が均一しているが、VI・V類に一つの集中が認められ、第Ⅳ地区ではI類土器が主となり次いでIV・V類土器が比較的多く出土している。

こうした傾向から、I類(窓ノ神式)の時期には、本遺跡の所在する台地上において主要には第Ⅰ・第Ⅳ地区に「居住生活」に関する一つの空間的範囲が存在したと考えることが出来る。又、VI類(吉田式)・V類(前平式)の時期には第Ⅰ・第Ⅱ・第Ⅳ地区と比較的広範囲な一つの範囲が想定出来よう。しかし、VI類(押型文)の時期にはほとんどその範囲が第Ⅰ地区に限られていたと考えられる。

もとより、全面発掘の結果ではなく、部分的な発掘調査からの既算であり、その限りでは人間の生活の範囲あるいは人間行動の様態は常にこうした統計的数値を踏み破るものであり、前述した地区的範囲は必ずしも同時的な居住空間を意味するものでないことは確かであるが、台地上に繰り返された人間の生活の一つの断面は捉え得ている筈である。

(2) 層位について

第Ⅰ地区においては、Ⅲ層から窓ノ神式、Ⅳ層から前平・吉田式が出土し、その層序関係をとらえることが出来た。この前平・吉田式と窓ノ神式との先後関係は河口貞徳氏によって指摘されて以来、鹿児島県内においては桑ノ丸・村原(梅ノ原)遺跡などにおいてそのことが追認されており、本遺跡の結果もその1例となった。

一方、VI類(押型文)土器は、第Ⅰ地区においてⅢ層下層からⅣ層に至る層位から出土したが、前後

地区別 種別	第Ⅰ 地区	第Ⅱ 地区	第Ⅲ 地区	第Ⅳ 地区	第Ⅴ 地区
I類	52	3	—	42	
II類(2個体)		(4個体)	—	(1個体)	8
III類(3個体)		(4個体)	—	—	—
IV類	70	7	—	28	—
V類	5	40	—	65	—
VI類	97	—	—	8	—

第13表 タイプ別からみた各地区の出土パーセント(%)

地区別	I類	II類	III類	IV類	V類	VI類
第Ⅰ地区	36	1.6	2	84	0.7	25
第Ⅱ地区	14	18	9	28	86	—
第Ⅲ地区	—	—	—	—	—	—
第Ⅳ地区	56	1.5	—	22	171	1.5
第Ⅴ地区	—	—	—	—	—	—

第14表 地区別からみた各タイプの出土パーセント(%)

(註) こ標算の数出で云々たものにおける心の目は安すとして

は安すとして

する塞ノ神式あるいは前平・吉田式との厳密な層位的関係は必ずしも判然としない。又、Ⅱ・Ⅲ類土器は同層で集石遺構に併せ、第Ⅰ地区においてⅣ層上層より出土している。

アカホヤ層について一言すれば、本遺跡においてはアカホヤ層上の自然層を畠地の耕作・開墾等により欠き、そのために前期曾畠式以降に相当する土器類の出土をみなかった。アカホヤ層を境とする上層下層の繩文土器について言及し得る資料を宮崎県内では明確に持たないが、鹿児島県の近年の成果である別府(石頭)遺跡では、アカホヤ層を境とし上層より曾畠式土器、下層より塞ノ神A・B式が出土しており、B.P. 6000年を前後するといわれるアカホヤ層を境に從来「縄文前期」として捉えられてきた中に一つの明確な編年上の画線が存在することが、次第に発掘調査の成果の中で明らかとなってきた。宮崎県内の例では、多くはさほど層位的にそうした関係の解明に直接役立つものはないが、近年の2・3の例で、黒草遺跡ではアカホヤ層上に後期棱式土器、アカホヤ層下から撫糸文を施した塞ノ神式のものと思われる細片を確認し、またアカホヤ層上において曾畠式土器片數点を検出している。⁽⁵⁾また、前畠遺跡ではアカホヤ層上で後期初頭の出水式土器の出土をみ、アカホヤ層下で黒草遺跡同様塞ノ神式土器の細片をみている。しかし、良好な曾畠式の単純遺跡であった柿川内第Ⅰ遺跡では、Ⅰ層「スコリア混入灰黒土層」、Ⅱ層「黃色細粒土(赤ホヤ)層」、Ⅲ層「漆黒色土層」としてⅣ層がその包含層とされている。だが、Ⅴ層で再び「赤ホヤ層」が出てきており、同遺跡報告内では層位記述に混乱がみられるが、「赤ホヤ層」上で曾畠式が出土する傾向はとらえられている。

(3) 縄文前期土器について

宮崎県内の縄文前期の遺跡は、柏田・跡江両貝塚など古くから知られたものがあるが、いずれもその全体像が明らかにされているとは言い難く、不幸なことにこれまで恣意的な扱いを受けてきており、原点的な資料整理の必要を感じる。縄文前期土器の中でも、本遺跡出土の塞ノ神式・吉田式・前平式のいずれも鹿児島県下の遺跡を標式としており、又近年の該当期の資料の蓄積についても同県の成果にはみるべきものがある。ここではそうした例を参照しながら、簡単に本遺跡出土の縄文前期土器をまとめたい。

I類(塞ノ神式)土器には、口縁部の特徴に大きく二つの傾向がみられる。一つは「く」の字形に外反する口縁をもち、胴部の器壁の厚さに対し頭部から口縁部にかけてがむしろ肥厚するもので、いま一つは、同じく外反する口縁ではあるが、やや内湾する傾向をもつものである。いわゆる二重口縁風に内反する二重口縁部をもつものはみられない。胴部の形状にはさほどふくらみを示すものはみられず、おおむね寸胴に近いものであるが、第Ⅰ・Ⅵ図がよくその全体をうかがわしめるものである。そして、底部には平底と若干の上げ底とが認められる。こうした傾向は從来の塞ノ神式のバラエティーに矛盾するものではなく、賀川光夫氏の提唱した跡江式あるいは柏田・大貫式などのそもそもの実体が不鮮明である現段階ではそれらと比べ得るすべもない。

II類土器の大きな特徴は、ヘラ描き綴糸文と口縁部の厚みを帯びる肥厚化の現象である。管見の範囲では鹿児島内においてこれと同タイプの土器の報告をみないが、桑ノ丸遺跡において3類として分類されたものの中にクシ状の施文具と思われるがこれに似た文様要素のものを見ることが出来る。南九州以外では、むしろ曾畠式に近いものようであるが、長崎県下本川洞穴遺跡・佐賀県白蛇山岩陰遺跡な

どから本類土器の文様に酷似するものが出土している。一方、肥厚化した口縁部については、宮崎県内では石拔式からの派生とされる田野町出土の貝殻条模文土器⁽¹³⁾に見ることが出来るが、この土器は鹿児島県桑ノ丸遺跡³類土器と同タイプの土器であり、先の文様の類例とも近く、そのあたりに標準的な遺跡が捉えられる期待がある。

Ⅲ類土器についても類例がとぼしいが、鹿児島県西之表市下剣峯遺跡から同タイプの土器が出土している。しかし、まだ標準的な遺跡の発見がなく型式化はされていない。本類の特徴の一つは、多くの場合金環母を胎土に混入することであるが、鹿児島県下剣峯遺跡出土のものにはそれがみられないようである。一方、下剣峯の例では口縁部あるいは胴部に瘤状の突起をもつものがあるが、本遺跡出土の中にはそれがみられなかった。本類土器は、口縁部が山形をなすものもあり、貝殻腹縁刺突文をもつという文様上からいえば前平・吉田式等の貝殻文系土器の範疇に含まれるものであるが、それらにみられる全体的なある種の精緻さという点に欠けるものである。

Ⅳ類吉田式、Ⅴ類前平式についてはこれまで両者の関係が不鮮明で混乱をまねく部分もなくはなかったが、一応近年の鹿児島県内の成果は両者の関係を鮮明化しつつあるようである。吉田式については村原(杵ノ原)遺跡、前平式については桑ノ丸遺跡が好資料を出土し、両者の関係が言及されている。本遺跡出土のⅣ類・Ⅴ類土器については、その全体をうかがわしめる好資料にめぐまれず、角筒・円筒土器についても細片からその両者をうかがうに過ぎない。

Ⅵ類吉田式の角筒土器は、山形口縁・口唇部刻目・口縁端部への横位の貝殻腹縁刺突線文・以下の幾位あるいは斜位の貝殻腹縁刺突線文・クサビ形貼り付け文・押し引き文などよくその特徴を具備するものであった。しかし、円筒土器についてはその口縁部と思われるものは検出されていない。

一方、Ⅶ類前平式では角筒土器のものと思われる口縁部の細片がわずかに2点程出土しているのみで、他は円筒土器の口縁部である。多くのものが風化・剥離が著しく貝殻腹縁刺突文も不鮮明なものが多くあったが、ヘラ状施文具による凹凸文の口縁部には比較的良好な資料が得られている。

(4) 集石遺構について

本遺跡においては挙大の礫の散布が多くみられた。中でも、第Ⅰ地区土層断面、第Ⅱ地区C-8、第Ⅳ地区C、D-8、4に認められた礫の集石は、それが「集石」という一つのまとまりをもつものであることから、多くの礫の散布とは区別される種の人為的な遺構であることが想定された。しかし、集石中あるいは周辺からも鉄土・炭化物などの残存等は全く認められず、また集石下の掘り込みも明瞭ではなかった。近年では、縄文早・前期の遺跡にこうした集石遺構が伴なうことが多く知られている。宮崎県内では、その具体的な報告例はないが、新田原の押型文土器散布地においてこの種の集石がみられ、また黒草遺跡の所在する台地の切り通しにもアカホヤ層下に多くの礫が包含され、ある種の人為性を想起させるものであった。鹿児島県の例を数例あげれば、下剣峯遺跡⁽¹⁴⁾で本遺跡Ⅲ類土器と同タイプの土器の出土層で安山岩質の集石遺構が検出され、桑ノ丸・村原(杵ノ原)・加栗山などの各遺跡からも検出されているが、いずれも本遺跡の例と同じく集石以外に人為の痕跡を認めないものである。

縄文早・前期の集石遺構では、福岡県深原遺跡⁽¹⁵⁾などのような「石蒸し」の機能をもつと考えられる集石遺構があり、宮崎県内においても野尻町梯遺跡が押型文土器を共伴し同種の遺構をもつが、これらの

遺構にも焼土・炭化物等を一切見ない。しかし、明確な掘り込みをもちその人為性が明らかであること、疊に加火の痕跡がうかがえることなどが、「石蒸し」としての機船を想定させるものである。

ともあれ、縄文早・前期の遺跡に伴なうこうした集石遺構は、なお今後の当該期の大きな一つの課題である。なお、本遺跡検出の集石遺構は、第Ⅱ地区でⅢ類・Ⅳ類土器に、第Ⅳ地区でⅠ類土器に伴なうものと考えられ、第Ⅲ章ですでに述べたように、集石遺構は第Ⅰ・第Ⅱ地区でⅢ層下面からⅣ層上層にみられ、第Ⅳ地区でⅢ層中層にみられる。

(5) 石器について

51点出土した石器の内、38点が石鏃で、その中でも第Ⅱ地区出土のものが21点とその大半を占めⅢ層からⅣ層にかけて出土している。第Ⅱ地区的土器の出土量が総体的に少なかったにもかかわらずこうしてその大半が出土した現象は、逆に第Ⅰ・第Ⅳ地区での主体的なⅠ類・Ⅳ類の土器の時期に相対的に狩猟用具である石鏃が少ないことを意味している。あるいは第Ⅲ地区で多くみられた黒曜石等の剝片などからある種の「場」を想定させるものかもしれないが、厳密に供件の土器類を判別出来ない現状では多くの問い合わせが出来ない。

第Ⅳ地区Ⅵ層複層（粘質褐色土層まじり）上面から出土した尖頭器は、先土器時代の遺物と思われ、今後周辺台地からの類例がまたれ、先土器時代の文化層解明が期待出来る好資料である。⁽¹⁹⁾このいわゆる三段尖頭器は宮崎県下では、新富町新山、西都市調査、国富町開拓などから採集されているが、発掘資料としては初の1例を加えることになった。

註

- (1) 河口貞徳「塞ノ神式土器」「鹿児島考古」第6号（昭和47年）
- (2) 「桑ノ丸遺跡」「鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書」(7)鹿児島県教育委員会（昭和52年）
- (3) 「村原（桝ノ原）遺跡」「加世田市埋蔵文化財発掘調査報告書」加世田市教育委員会（昭和52年）
- (4) 「別府（石楠）遺跡」「志布志町埋蔵文化財発掘調査報告書」志布志町教育委員会（昭和54年）
- (5) 新東晃一「南九州の火山灰と土器形式」「どるめん」版19（昭和58年）
- (6) 「黒草遺跡」「九州縦貫自動車道埋蔵文化財調査報告書」(3)宮崎県教育委員会（昭和55年）
- (7) 「前畑遺跡」(6)同じ。
- (8) 「袖川内第1遺跡」「袖川内第1遺跡・袖川内第2遺跡」宮崎県教育委員会（昭和51年）
- (9) 柏田貝塚については「宮崎県史蹟調査報告」第十集
- 00 賀川光夫「九州東南部」「日本の考古学」縄文時代
- 01 「九州の原始文様」佐賀県立博物館（昭和52年）
- 02 (8)と同じ。
- 03 茂山謙「田野町採集の貝殻条痕文土器」「宮崎考古」第4号（昭和58年）
- 04 「下剣峯遺跡」「西之表市埋蔵文化財発掘調査報告書」西之表市教育委員会（昭和58年）
- 05 (3)と同じ。
- 06 岩永哲夫氏の教示による。
- 07 (8)と同じ。
- 08 昨年（昭和54年）2月に発掘調査が行われたが、未報告である。
- 09 茂山謙・大野寅夫「児湯郡下の旧石器」「宮崎考古」第3号（昭和52年）



(1) 第Ⅰ・Ⅱ地区遠景(第Ⅲ地区より)



(2) 第Ⅰ地区発掘風景

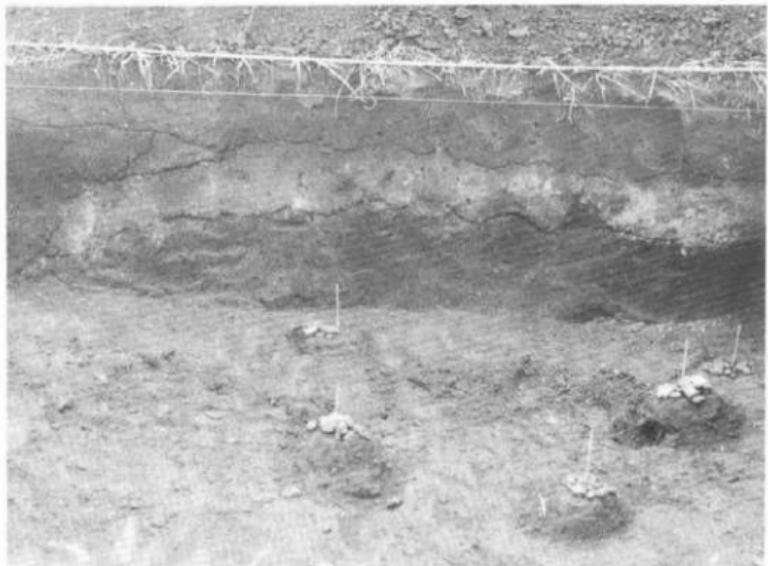
図版 2



(1) 第Ⅱ地区発掘風景



(2) 第N地区発掘風景



(1) 第Ⅳ地区・アカホヤ層の状態



(2) 第Ⅳ地区C, D-3, 4・塞ノ神A式(左端)と集石遺構(右端)

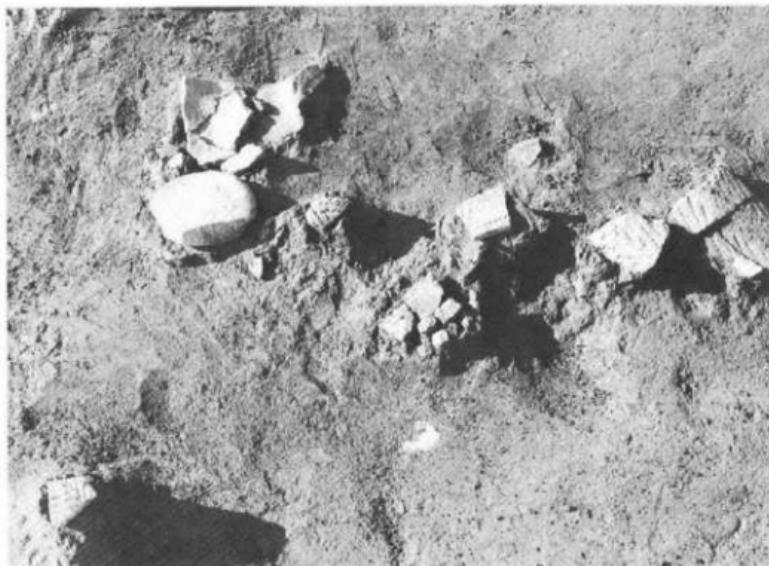
図版 4



(1) 第Ⅳ地区集石遺構



(2) 第Ⅱ地区集石遺構

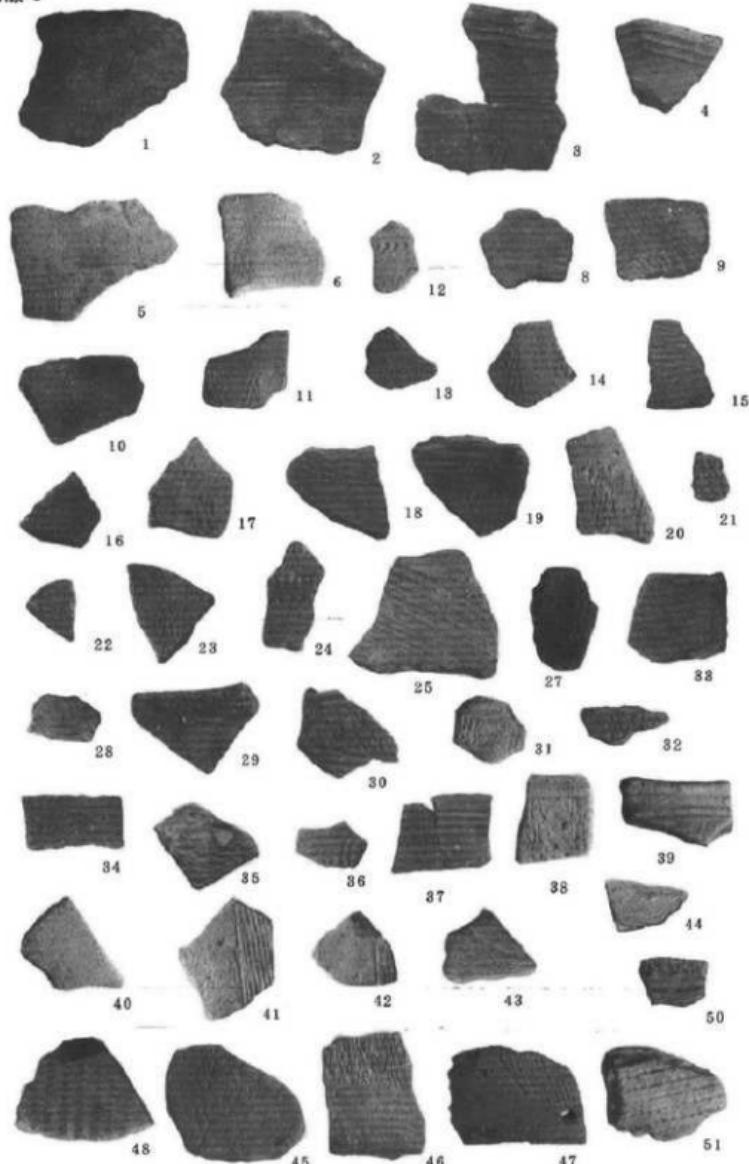


(1) 第Ⅱ地区Ⅲ類土器出土状態



(2) 第Ⅳ地区Ⅰ類土器出土状態

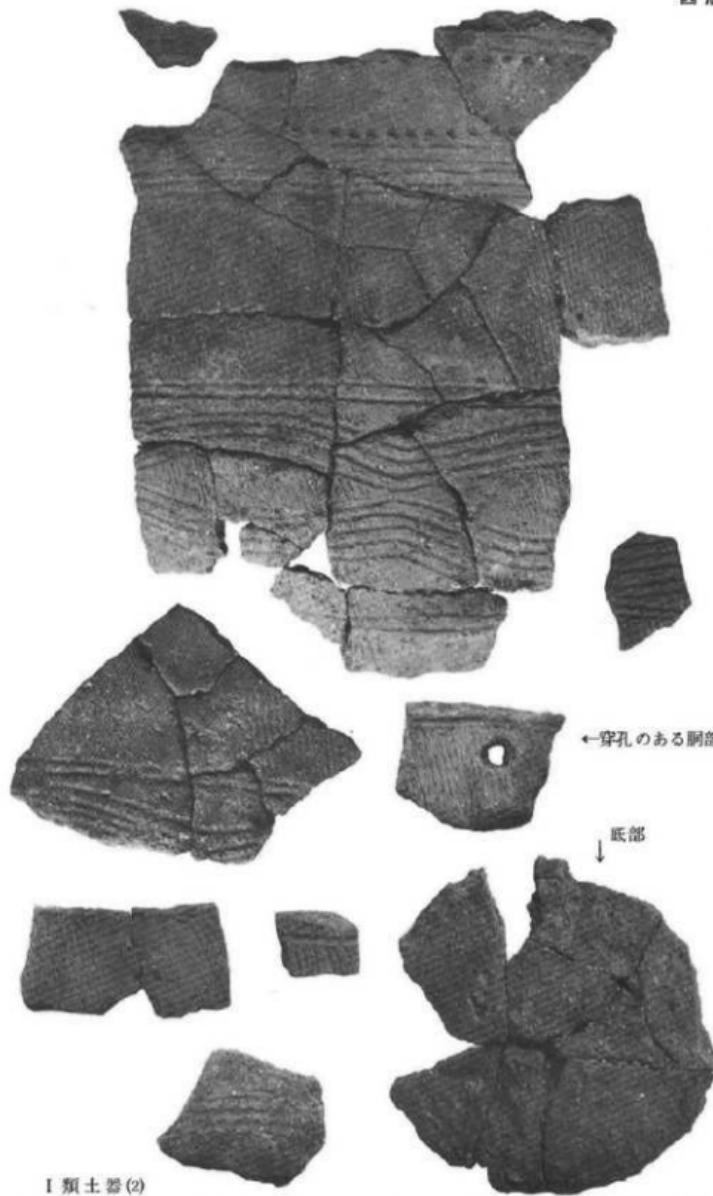
図版 6



第 15 図 (縮尺約 $1/3$)

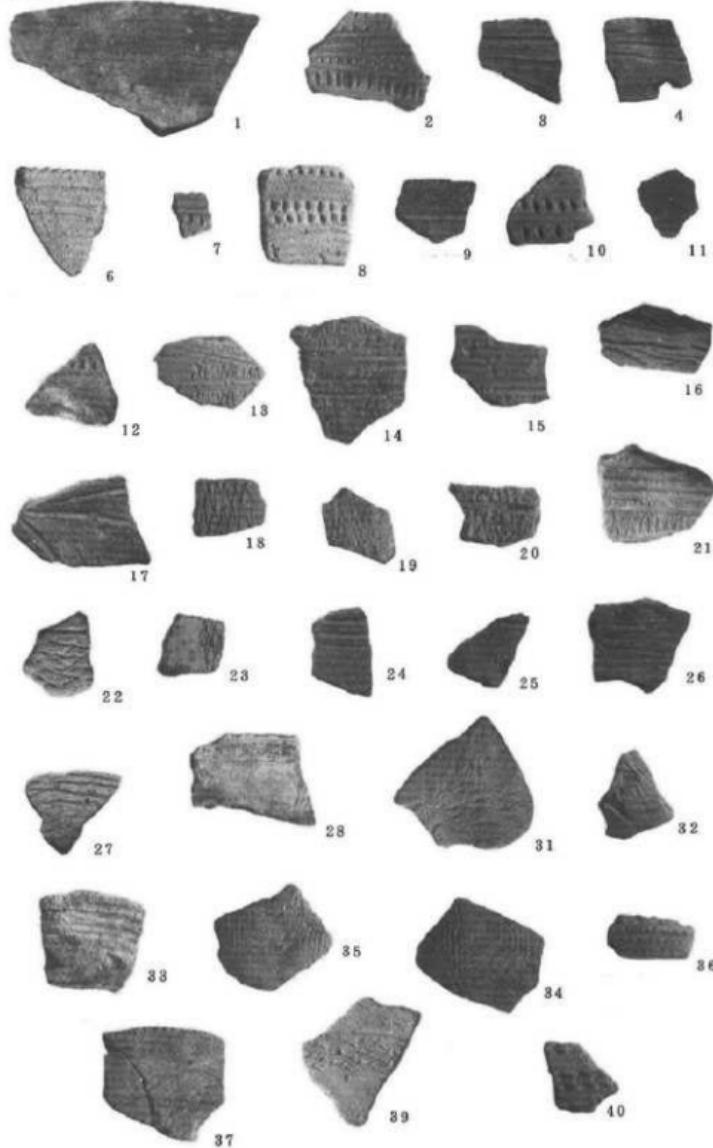
I 類土器(1)

第 16 図
(縮尺約 $1/3$)



I 順土器(2)

圖版 8

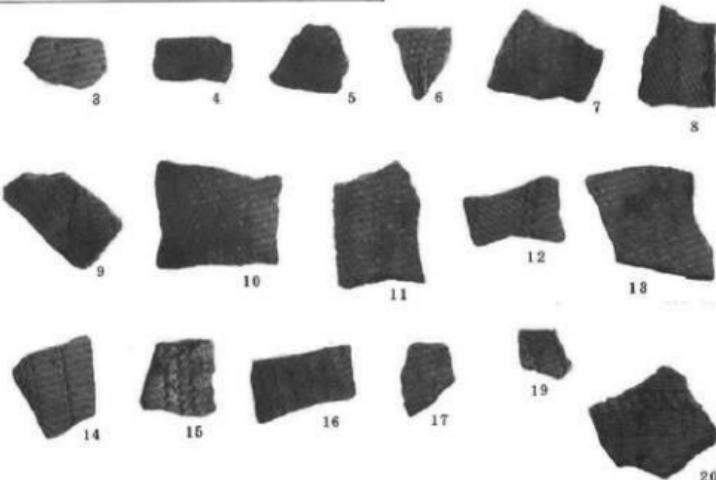
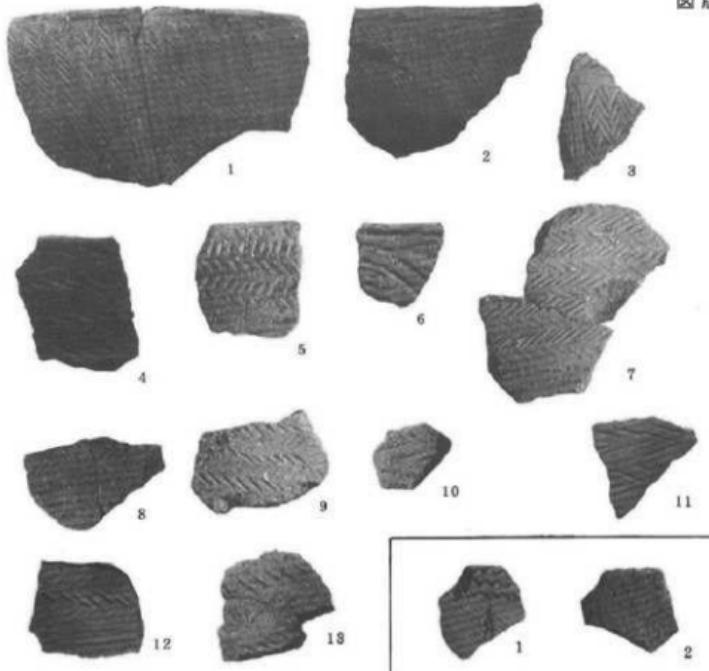


第17圖(縮尺約 $1/3$)

I類土器(3)

圖版 9

第 18 圖
(縮尺約 $1/8$)

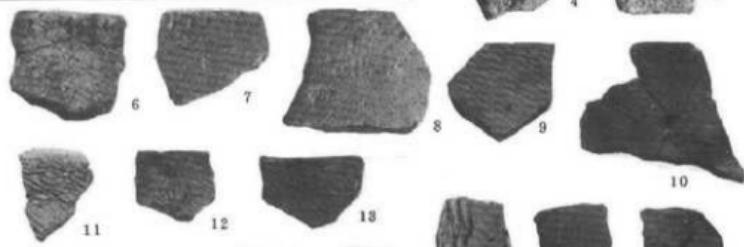
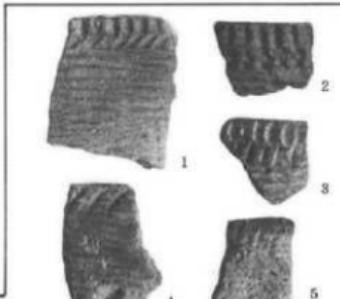
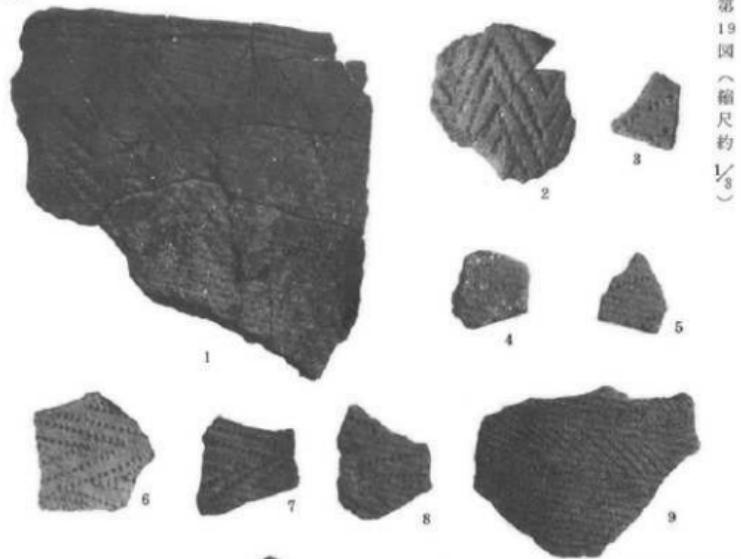


第 21 圖 (縮尺約 $1/8$)

II・N 類土器

図版 10

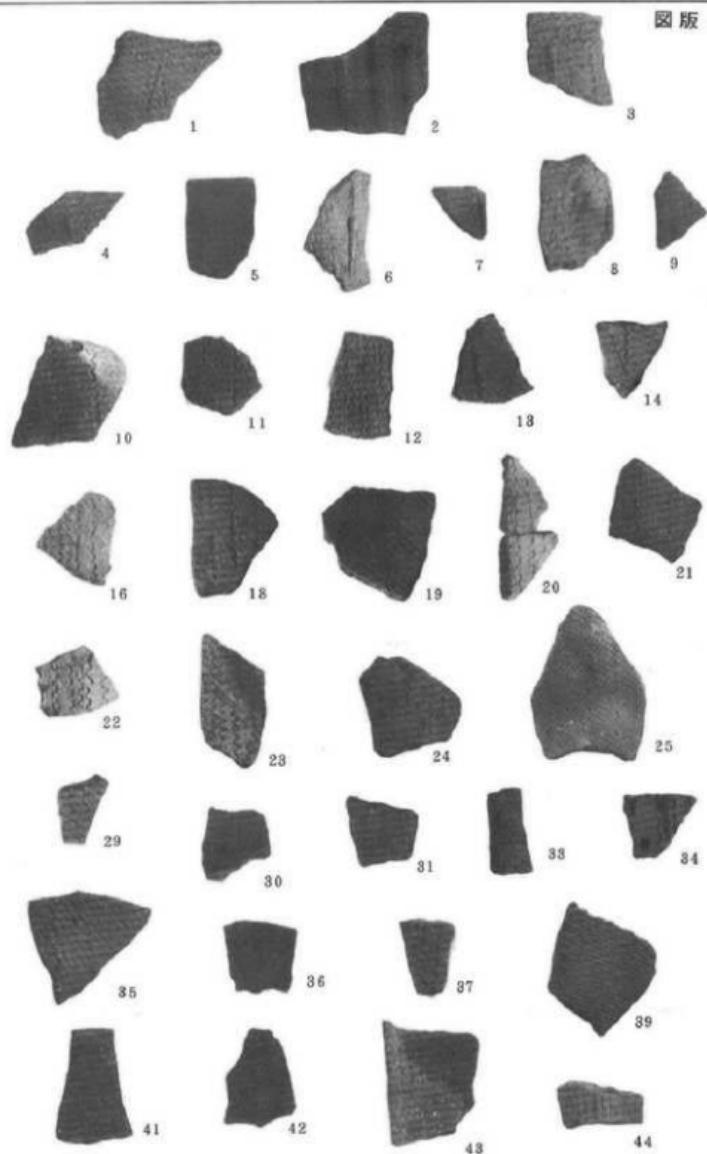
第19図 (縮尺約 $1/8$)



第22図 (縮尺約 $1/8$)

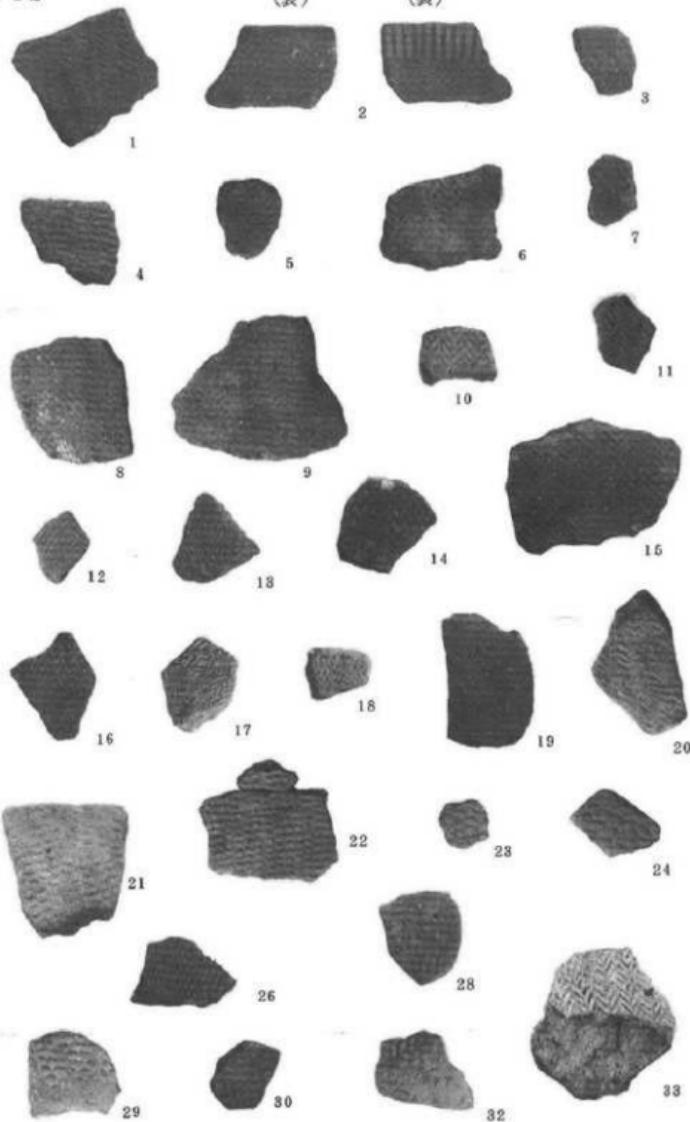
III - V 類土器

図版 11

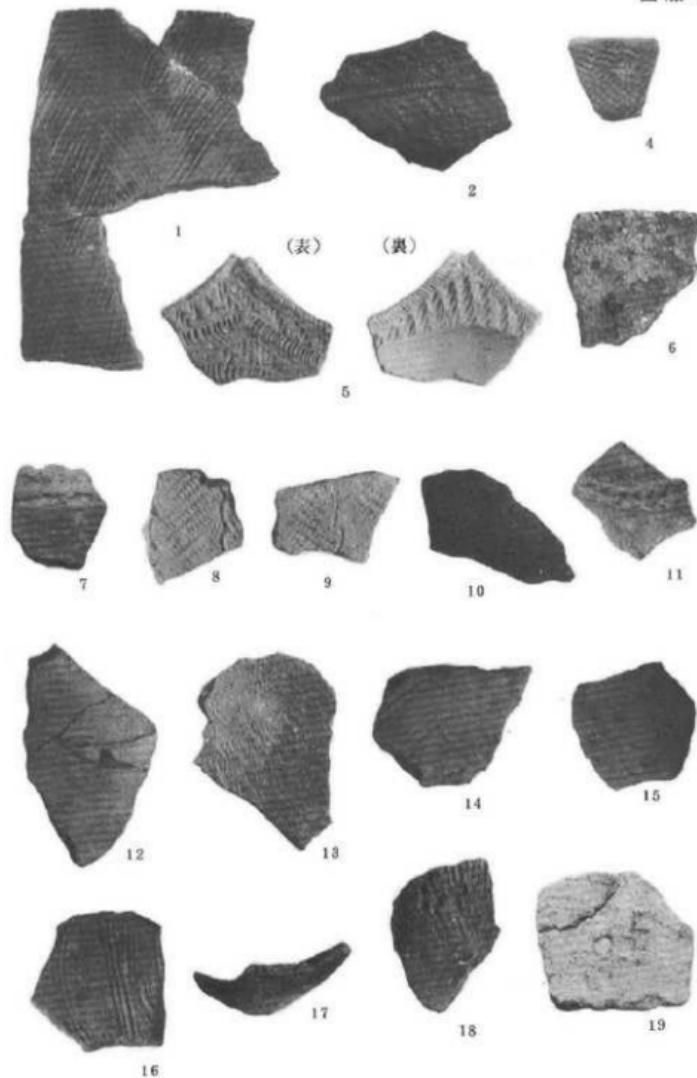


第 20 図 (縮尺約 $1/3$)

IV 類 土 器

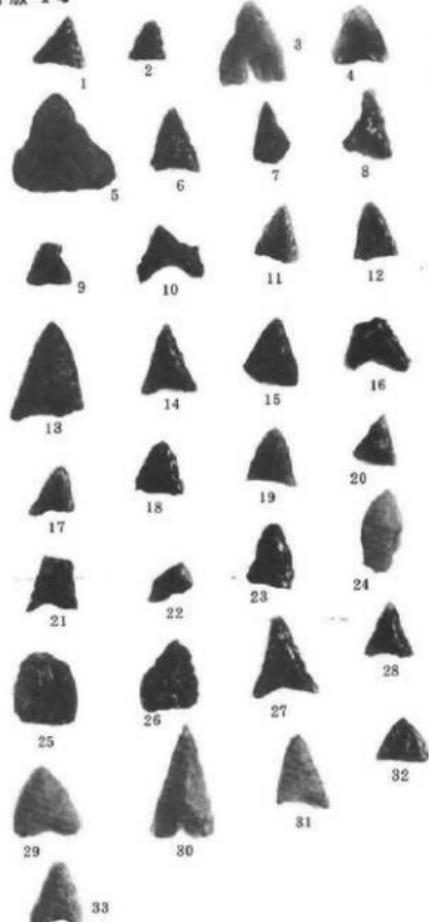
第23図(縮尺約 $1/8$)

W類土器



第24図(縮尺約 $1/3$) その他の土器

図版 14



←石器 第25図

(縮尺約 $1/2$)

第27図



→石器 第26図

(縮尺約 $1/2$)

第28図

(縮尺約 $1/2$)

第29図

(縮尺約 $1/2$)

第30図

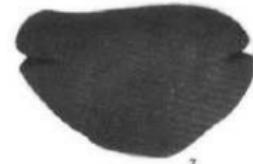
(縮尺約 $1/2$)

第31図

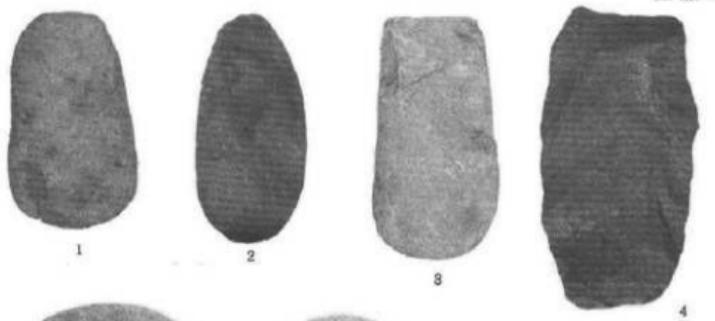
(縮尺約 $1/2$)

第32図

(縮尺約 $1/2$)



石器 (1)



石器 (2)

第26図

1~4 (縮尺約 $1/2$)

5~9 (縮尺約 $2/5$)



第N地区押型文土器出土状態

図版 16



1



2



3



4



5



6



7



8



9

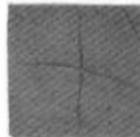


10



11

12. ヘラ記号拡大



12



13



14



15



16



17



18



19



20



21



22



23



24



25



26



27

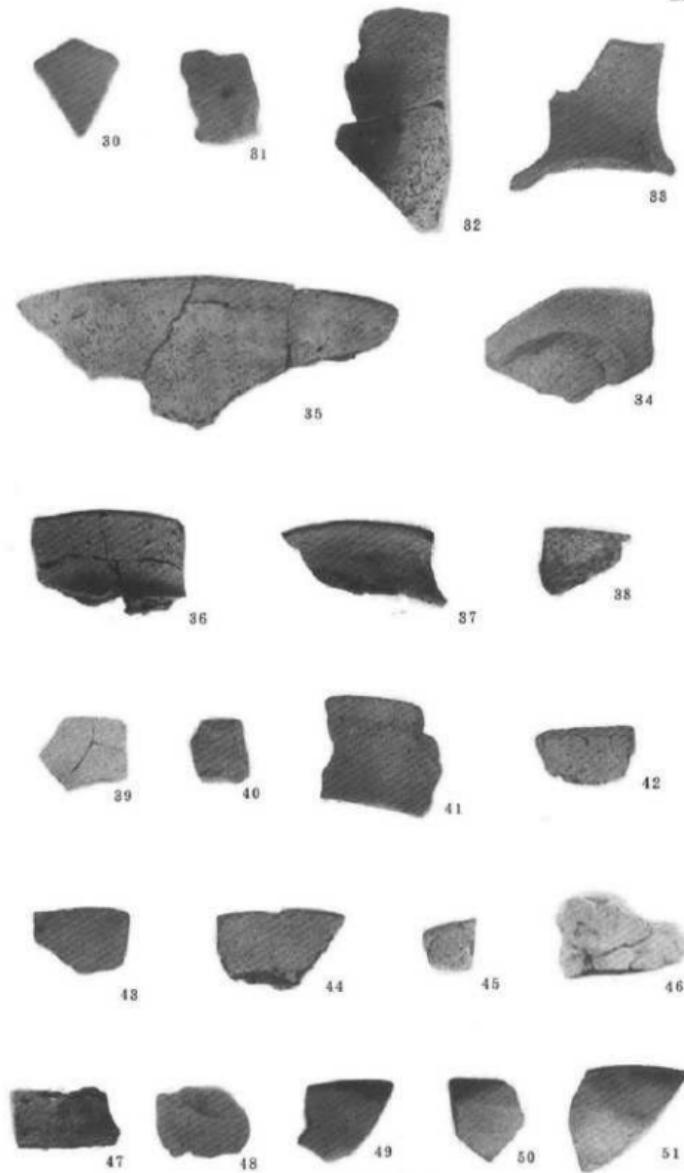


28



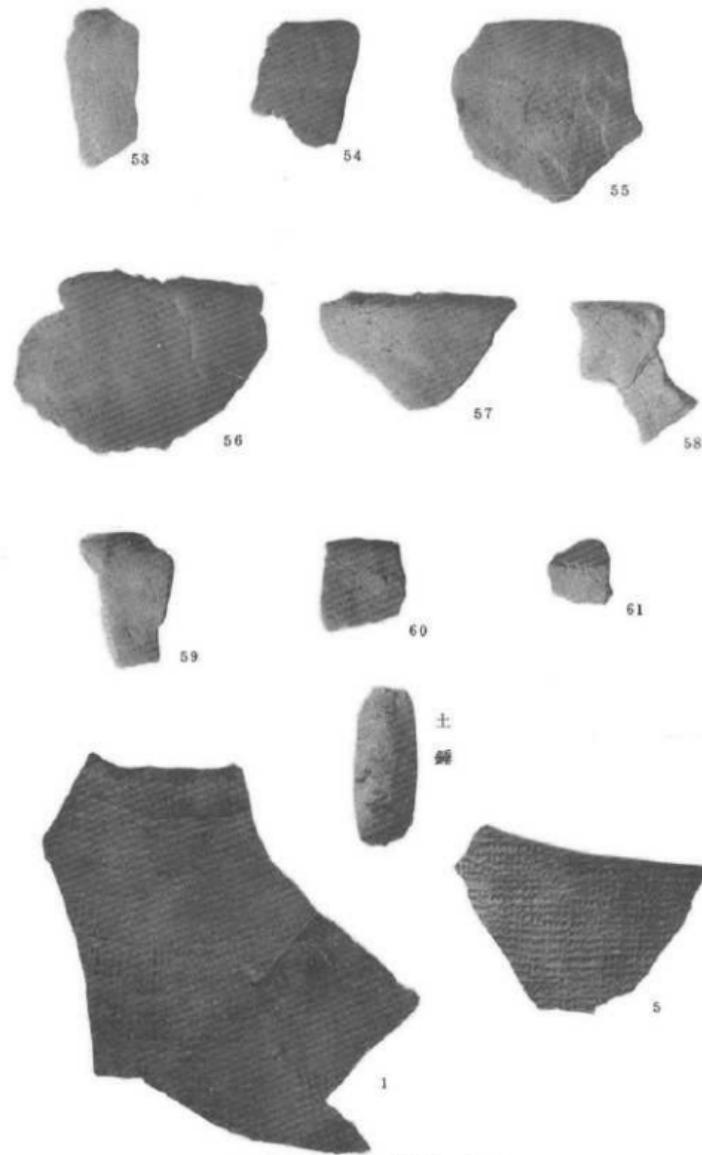
29

土 師 器 (1)



土師器 (2)

圖版 18



鐵布庄痕土器・須惠器・土錘

清武工業団地造成工事埋蔵文化財
発掘調査報告書
辻遺跡

昭和55年4月30日発行

発行 清武町土地開発公社

清武町教育委員会

印刷 (有) 昭和印刷

TEL (27) 8899

清武工業團體造工事業獎勵文化財免徵調查報吉書社

社遺跡

清武町土地開發公社

清武町教育委員會